愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第７集

諏訪遺跡
杉山端城跡

1989

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

序

このたび、愛知県埋蔵文化財センターは、昭和61年度から62年度にかけて調査された既報告の新城市杉山遺跡に引き続き、国道151号線新城バイパス建設工事に伴う事前調査として、諏訪遺跡、杉山端城跡の発掘調査を愛知県の委託事業として実施しました。この結果、諏訪遺跡において弥生時代の竪穴住居、溝、方形周溝墓と奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居、掘立柱建物等が検出され、二つの時代の集落跡に関する重要な資料を得ることができました。また、杉山端城跡では、近接する伝杉山端城に関連する遺構が検出されました。いずれも、当地域における古代・中世の人々の生活、文化について貴重な知見を新たに加えるものと考えられます。

調査にあたり愛知県教育委員会の御指導並びに、地元住民の方々及び新城市教育委員会をはじめとする諸機関の格別の御協力をいただきましたことに深く感謝申し上げる次第であります。

本書が、地域史研究や埋蔵文化財に対する御理解の一助ともなれば幸いと存じます。

1989年3月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

理事長　中　根　昭　二

例　言

1．本書は愛知県新城市豊栄字鳥居前及び字石原に所在する諏訪遺跡（登録番号15130）と同市杉山字端城に所在する杉山端城跡（登録番号15128）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、愛知県土木部がすすめている一般国道151号線新城バイパス建設工事に伴うもので、県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3．調査期間は、諏訪遺跡が昭和62年６月から63年１月、及び63年４月から５月まで、杉山端城跡が63年５月から７月までである。

4．調査担当者は以下のとおりである。

諏訪遺跡　土屋利男　安井俊則　酒井俊彦　池本正明　野口哲也

杉山端城跡　土屋利男　安井俊則　酒井俊彦

5．調査に際しては、次の関係機関の指導・協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課　愛知県土木部　新城市教育委員会

6．遺物整理・製図については次の方々の協力を得た。

酒井三芳　白頭久代　中島たづ子　村田朋子　薪田すま子　稲垣智子　平野視子

7．本書執筆は、森勇一　土屋利男　安井俊則　酒井俊彦　野口哲也　永草康次　楯真美子が分担し、文責は各文末に記す。

8．編集は酒井俊彦が行った。

9．調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。

10．挿図第２図の地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図新城と三河富岡を使用したものである。

11．調査記録・出土遺物は、愛知県埋蔵文化財センターが保管する。

12．報告書をまとめるにあたり、鈴木俊則（浜松市博物館）　松井直樹（西尾市教育委員会）の方々に御協力を賜った。記して感謝したい。（敬称略）

目　　次

諏訪遺跡

第Ⅰ章　調査経過

1．調査の経緯 …… 1

2．位置と環境 …… 1

第Ⅱ章　遺構

1．基本層序 …… 5

2．時期区分 …… 6

3．Ⅰ期の遺構 …… 6

4．Ⅱ期の遺構 …… 6

5．Ⅲ期の遺構 …… 14

6．Ⅳ期の遺構 …… 28

7．Ⅴ期の遺構 …… 28

8．時期不明の遺構 …… 29

9．自然河道 …… 30

第Ⅲ章　遺物

1．Ⅰ期の遺物 …… 32

2．Ⅱ期の遺物 …… 33

3．Ⅲ期の遺物 …… 45

4．Ⅳ期の遺物 …… 56

5．Ⅴ期の遺物 …… 57

第Ⅳ章　自然科学的分析

1．愛知県諏訪遺跡及びその周辺地域に発達する黒色土の起源について
…… 58

2．弥生土器の胎土重鉱物分析 …… 64

第Ⅴ章　考察
1．遺構の時期別変遷 …… 70
2．II期の集落 …… 74
3．Ⅲ期の集落 …… 76
第Ⅵ章　まとめ …… 78

杉山端城跡
第Ⅰ章　調査経過
1．調査の経緯 …… 79
2．遺跡の立地と環境 …… 80
第II章　遺構
1．基本層序 …… 81
2．遺構 …… 81
第Ⅲ章　遺物 …… 84
第Ⅳ章　まとめ …… 86

図版

1．諏訪遺跡遺構図　(1)
2．諏訪遺跡遺構図　(2)
3．諏訪遺跡遺構図　(3)
4．諏訪遺跡遺構図　(4)
5．諏訪遺跡遺構図　(5)
6．諏訪遺跡近遠景
7．調査区全景　(1)
8．調査区全景　(2)
9．調査区全景　(3)
10．調査区全景　(4)
11．竪穴住居　遺物出土状態　(II期)
12．溝　方形周溝墓
13．竪穴住居　(Ⅲ期)
14．竪穴住居　(Ⅲ期)
15．竪穴住居　遺物出土状態　(Ⅲ期)
16．掘立柱建物
17．Ⅳ・Ⅴ期の遺構
18．自然河道他
19．遺物　(1)
20．遺物　(2)
21．遺物　(3)
22．遺物　(4)
23．遺物　(5)
24．遺物　(6)
25．杉山端城跡全景
26．遺構　遺物出土状態

諏訪遺跡

挿図

第１図　調査区位置図 …… 2
第２図　諏訪遺跡位置図 …… 3
第３図　豊川右岸断面図 …… 3
第４図　基本層序 …… 5
第５図　II期の遺構 …… 7
第６図　ＳＢ101・110・111 …… 9
第７図　ＳＢ102 …… 10
第８図　ＳＤ04 …… 11
第９図　ＳＤ01 …… 11
第10図　ＳＫ039 …… 12
第11図　ＳＫ310 …… 12
第12図　ＳＺ01・02 …… 13
第13図　III期の遺構 …… 15
第14図　ＳＢ001 …… 16
第15図　ＳＢ006・007・008 …… 17
第16図　ＳＢ009・010・011 …… 18
第17図　ＳＢ021 …… 19
第18図　ＳＢ109 …… 20
第19図　ＳＢ112・113・115・116 …… 21
第20図　ＳＢ117・118・119 …… 23
第21図　ＳＢ201・202・203 …… 24
第22図　ＳＢ301・302・305 …… 25
第23図　Ｃ区掘立柱建物 …… 27
第24図　Ｂ区掘立柱建物 …… 27
第25図　ＳＸ02 …… 29
第26図　Ｉ期の遺物 …… 32
第27図　II期の遺物（中期） …… 37
第28図　II期遺物 …… 37
第29図　II期の遺物 …… 38
第30図　II期の遺物 …… 39
第31図　II期の遺物 …… 40
第32図　II期の遺物 …… 41
第33図　II期の遺物 …… 42
第34図　II期の遺物 …… 43
第35図　II期の遺物 …… 44
第36図　III期の遺物 …… 48
第37図　III期の遺物 …… 49
第38図　III期の遺物 …… 50
第39図　III期の遺物 …… 51
第40図　III期の遺物 …… 52
第41図　III期の遺物 …… 53
第42図　III期の遺物 …… 55
第43図　Ⅳ・Ⅴ期の遺物 …… 56
第44図　分析試料採取柱状図 …… 58
第45図　黒色土中の植物珪酸体 …… 63
第46図　重鉱物組成 …… 67
第47図　遺構変遷 …… 72
第48図　遺構変遷 …… 73
第49図　II期集落概念図 …… 74
第50図　III－１期遺構変遷 …… 76

表

第１表　調査日程 …… 1
第２表　溝遺構番号 …… 31
第３表　黒色土の植物珪酸体分析結果 …… 59
第４表　鉱物の組成 …… 60
第５表　植物珪酸体と気候帯との関係 …… 61
第６表　諏訪遺跡試料 …… 66
第７表　重鉱物組成 …… 68
第８表　土器胎観察 …… 69

杉山端城跡

挿図

第１図　調査区位置図 …… 79
第２図　基本層序 …… 81
第３図　遺構全体図 …… 83
第４図　出土遺物 …… 85
第５図　杉山端城位置関係図 …… 86

諏訪遺跡

第Ⅰ章　調査経過

1．調査の経緯

諏訪遺跡は、愛知県新城市豊栄字鳥居前及び字石原に所在する。昭和30年代に遺物散布地として認識され、文化庁編集の全国遺跡地図に記載されている。

愛知県土木部は、新城市の市街地を走る国道151号線の交通量の緩和を目的として、昭和47年以来バイパス建設を行っている。この建設工事に伴い、愛知県埋蔵文化財センターは、愛知県から関係する遺跡の調査を委託され、昭和61・62年度は既報告の杉山遺跡の発掘調査を実施し、引き続いて62・63年度に諏訪遺跡の推定範囲にあたる部分の調査を行った。

遺跡範囲は、当初、現在は畑及び森林となっている中位段丘面上と考えられていたが、分布調査と試掘の結果から、下位段丘面と野田川河谷部も調査対象とした。調査区を中位段丘上に2区（B・C）、下位段丘上に3区（X・A_1・A_3）、河谷部分に2区（A_2・A_4）設定し、62年度にB・C・X・A_3・A_4区、63年度にA_1・A_2区の発掘調査を行った。総調査面積は6900㎡である。（第1表・第1図）

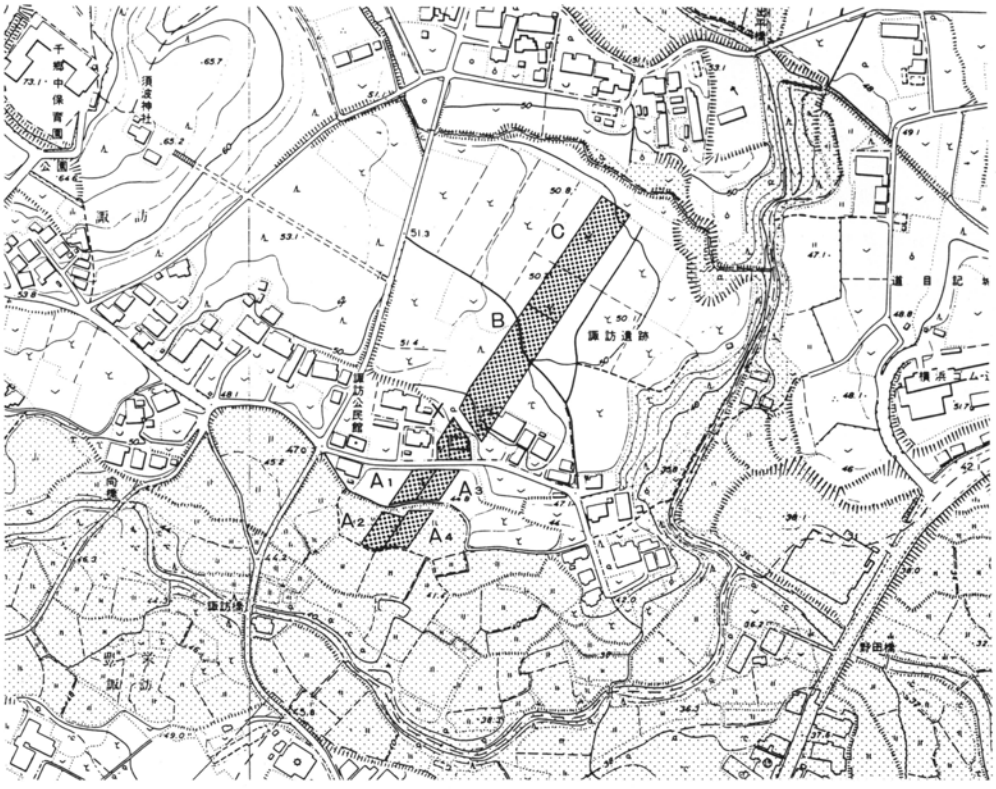
なお、B区の調査終了の時期（11月中旬）に、地元住民、作業員に対する現地説明会を開催した。

2．位置と環境

諏訪遺跡が所在する新城市は、三河高原東部から流れ出る豊川が豊橋平野にさしかかる地点に位置する。南西に向って流れる豊川の両岸には狭い沖積平野と洪積層の河岸段丘が広がり、その外側に標高700mから150m内外の山並が、豊川の流れと同じ方向に連なる。この地域は、旧石器時代から中世まで、各時代の遺跡が豊富に残され、中・近世には、新城市は東海地方と信州・北設を結ぶ交通・軍事の要地として、城下町あるいは伊那街道の宿場町・街道町として栄えてきた。

調 査 区	調査面積	1987 6	7	8	9	10	11	12	1988 1	2	3	4	5
62C	2,285㎡												
62B	2,200㎡												
62X	615㎡												
62A4	525㎡												
62A3	375㎡												
63A2	400㎡												
63A1	500㎡												

第1表　調査日程

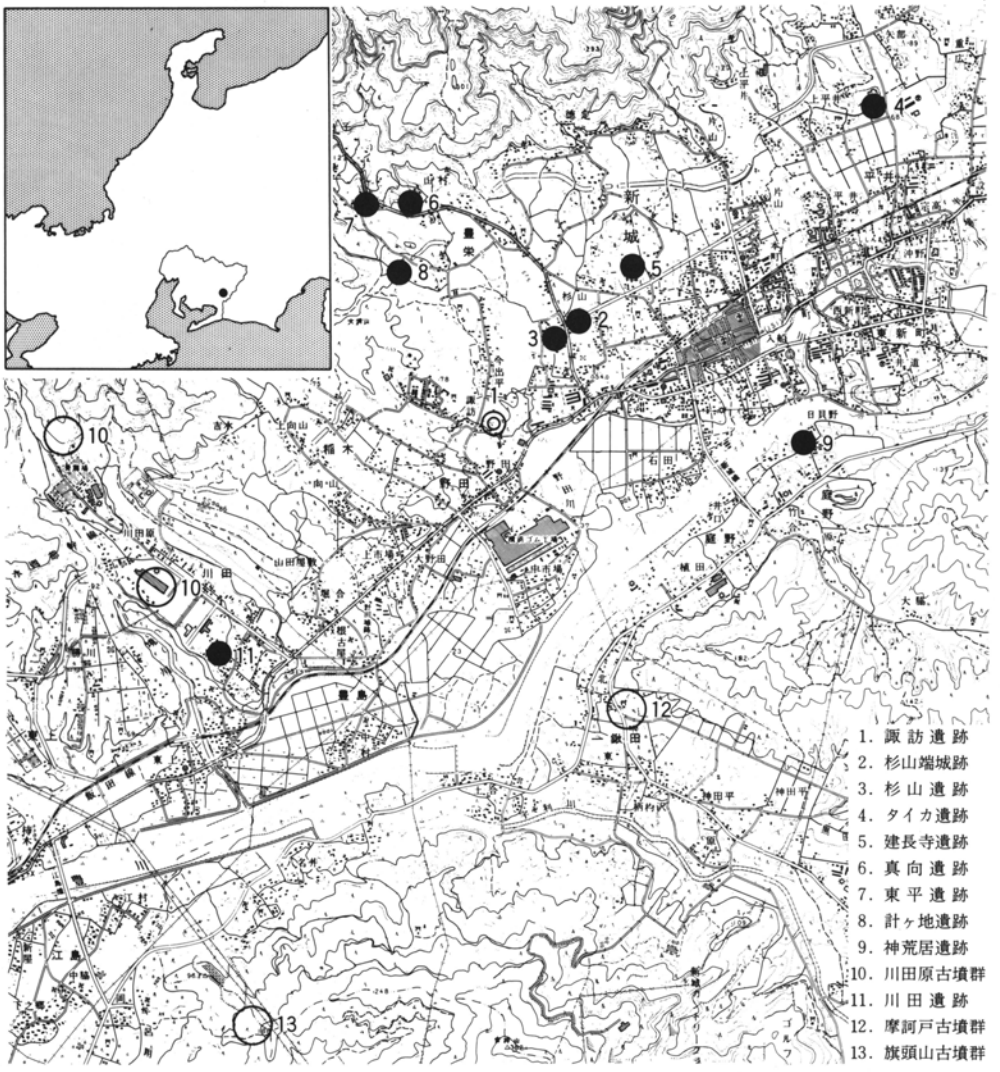


第1図　調査区位置図　1/5000

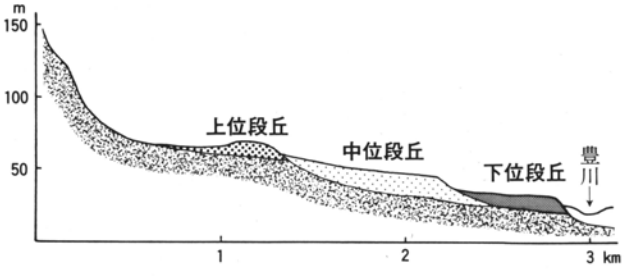
諏訪遺跡は、豊川右岸に発達する3段の河岸段丘（上・中・下）の中位面に立地し、豊川に向って舌状をなす幅300mほどの平坦な段丘上に位置する。標高は約50mである。段丘南側には下位段丘が残存し、これと比高3～4mの崖面をなす。その南は、河岸段丘列を東西に開析する豊川支流の野田川の河谷で緩傾斜地である。北側から東側には臼子川が流れ、東側は比高10数mの河谷で急傾斜地である。北側は、2～3mの崖面をなし、西側の段丘奥部は上位段丘で、さらに山地帯へ続く。

諏訪遺跡周辺の主な遺跡についてみると、北東1.4kmのところに、旧石器時代の建長寺遺跡があり、縄文時代の遺跡では、北1.5kmに中期の東平・計ヶ池遺跡、後期の真向遺跡、東2kmの腕こき山麓台地に晩期の神荒居遺跡がある。上位段丘上を主体に旧石器～縄文時代の各時期の遺跡が数多く存在する。弥生時代には後期の遺跡が多く、諏訪遺跡もその一つである。北東3.3kmに県内で最初に方形周溝墓が検出されたタイカ遺跡が所在する。古墳時代には、段丘上に古墳群が形成され、市域で200余基が確認されている。その大部分が後期の群集墳で、豊川の対岸の吉祥山に積石塚で知られる旗頭山古墳群、西3kmに川田原古墳群があり、南2.1kmには中期の前方後円墳を含む摩訶戸古墳群がある。古代以降では、中世後半

から近世にかけて大小の城が構築され、歴史上有名な野田城をはじめ、山地・段丘上に多くの城郭址がある。北東0.9kmには、杉山端城が所在し、これと関連する杉山遺跡がある。（土屋利男）



第2図　諏訪遺跡位置図　1/50000



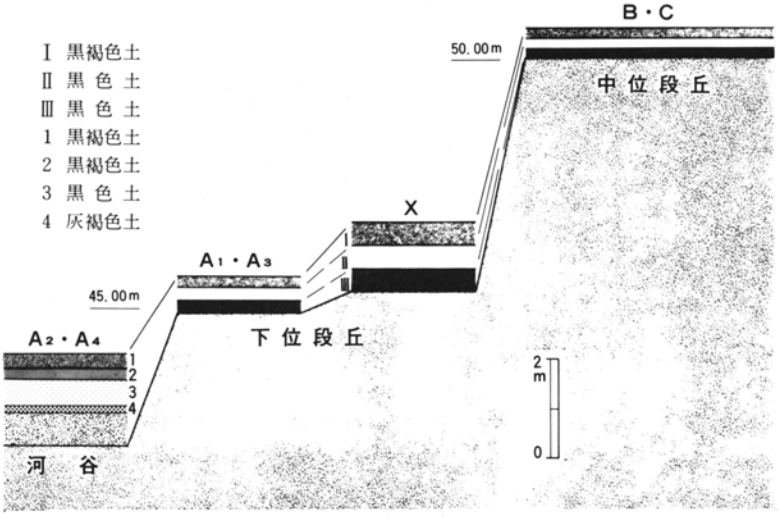
第3図　豊川右岸断面図

第II章　遺　構

1．基本層序

調査地の現況は、B・C区は桑畑等の畑地で南側⅓が竹林である。X区は宅地で、A_1・A_3区は畑地、A_2・A_4区は水田で、部分的に畑地である。現地表で中位段丘面上のB・C区が標高約50.0～51.0m、下位段丘面のX・A_1・A_3区が約45.3～47.2m、A_2・A_4区が約43.5～44.2mを測る。B・C区及びX区は平坦であり、A_1・A_3区は野田川方向に緩傾斜している。A_2・A_4区は階段状の水田である。B－X間とA_1・A_3－A_2・A_4間は、各々標高差約4mと1mの段丘崖である。

B・C・X・A_1・A_3区の基本層序は、I．黒褐色土（耕作土等の表土、厚さ0.2～0.3m）II．黒色土（いわゆる黒ボク、人為的撹乱等が及ぶ部分）　III．黒色土（黒ボク）IV．明黄褐色土（基盤）である。黒色土は、厚さ0.3～0.5m、X区では1.2～1.5mである。遺構検出は、黒色土下部から基盤直上において行う。A_2・A_4区は野田川河谷にあり、層序は基本的に1．黒褐色土（現耕作土）　2．黒褐色土（旧耕作土）　3．黒色土　4．灰褐色土　5．明黄灰色砂礫土（基盤）である。基盤は旧河床で、直上面には部分的に旧河川の粗砂層がある。3・4層には旧水田面が認められ、1～4層は水田造成によって形成されている。遺構検出は、4層下部において行う。　（酒井俊彦）



第4図　基本層序

2．時期区分

諏訪遺跡では複数の時期の遺構が存在するため、出土遺物などから以下のように５期に分け、各時期の遺構の説明を行う。

Ⅰ期　縄文時代

Ⅱ期　弥生時代

Ⅲ期　奈良時代～平安時代

Ⅳ期　中世

Ⅴ期　近世

その他、時期不明の遺構、自然河道がある。

3．Ⅰ期の遺構

ＳＫ1044　Ｂ区ＳＢ125の東で検出した。本遺跡中唯一、確実にこの時期と知り得た遺構である。直径1.2m深さ0.3mで、ほぼ円形プランを呈し、比較的大形である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり黄褐色砂礫土が混じる。遺構内より縄文時代中期の土器が出土した。当時期の遺構は、他に明確なものが見られず希薄であり、遺物も遺構に伴うものがあまり見られず少量であった。

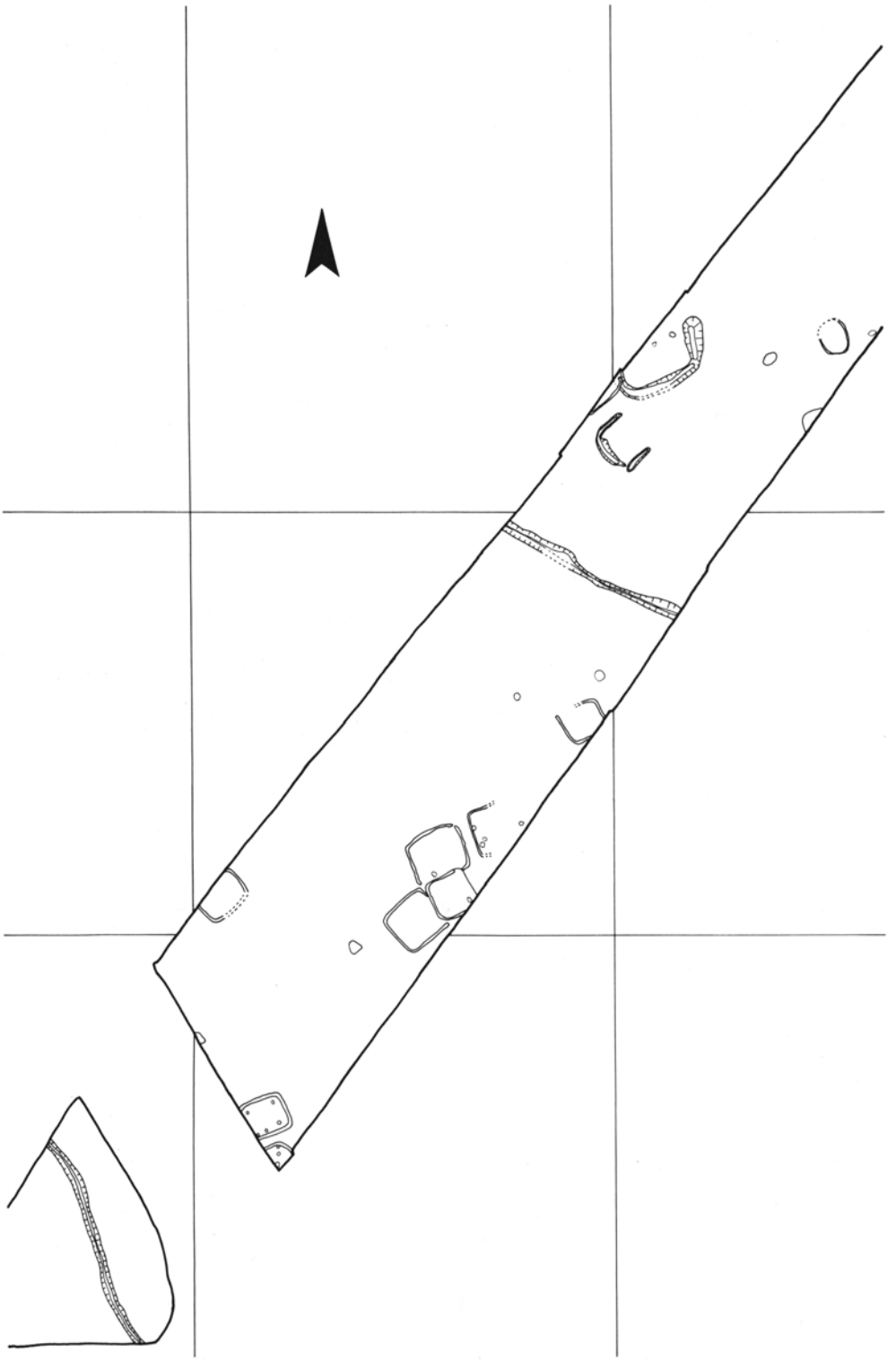
4．Ⅱ期の遺構

Ⅱ期の主な遺構としては、竪穴住居跡、溝、方形周溝墓、土坑などを検出した(第５図)。調査区全体が、後世畑として使われていたことなどにより、畝の天地返しや、削平などを受けており、遺構の遺存状況は良好ではなかった。竪穴住居跡はＳＢ112などを除き、中位段丘上の段丘南端寄りで集中して検出された。南北軸の方位は西に20°前後振れるものが多い。ＳＢ110やＳＢ114などからは遺物がまとまって出土した。土坑はＳＫ039など比較的大形のものが３基ほど検出された。中位段丘上と、その段丘崖下で２状の溝を検出した。方形周溝墓はＳＤ104の北で２基検出した。Ⅱ期の遺構はＳＤ104以南に密であり、後期前半と後期後半のものが主である。以下、方位は建物の南北軸の北向きの方位である。

竪穴住居跡

ＳＢ012　Ｃ区南端北壁沿いで検出した。大部分調査区外となり、南辺あるいは東辺にあたる部分のみを検出した。長さは5.9mである。方位は不明である。深さは検出面から25cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色土粒の混入状況により４層に分かれる。南辺部に沿って幅25cm、深さ30cmの周溝を検出した。後期後半の土器片が出土した。ＳＺ01と重複し、新旧関係はＳＺ01→ＳＢ012である。

ＳＢ014　Ｃ区南部南壁沿いで北西部の一角のみを検出した。このため規模などは不明であり、形状は隅丸方形になるものと考えられる。方位はＮ－22°－Ｗほどである。深さは調査



第5図　II期の遺構　1/800

区南壁断面で25cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色土粒・ブロックが混じり、3層に分かれる。北辺から西辺沿いに幅20cm前後、深さ16cmの周溝を検出した。全周せず北辺の一部でとぎれる。後期後半の壺、台付甕などが出土した。

SB101（第6図）　B区中央南壁寄りで検出した。5.8×7.4mの東西に長い方形プランである。方位はN−26°−Wである。検出面がほとんど遺構底面であるため深さ、埋土は不明である。幅20cm、深さ8cmの周溝を検出した。北東部と南西部の一角でとぎれており、この部分を除いてほぼ全周している。SB110と重複し、新旧関係はSB101→SB110である。時期は後期前半である。南辺沿いで、直径50cmほどの不定形な、住居跡と同時期の土坑を1基検出した。

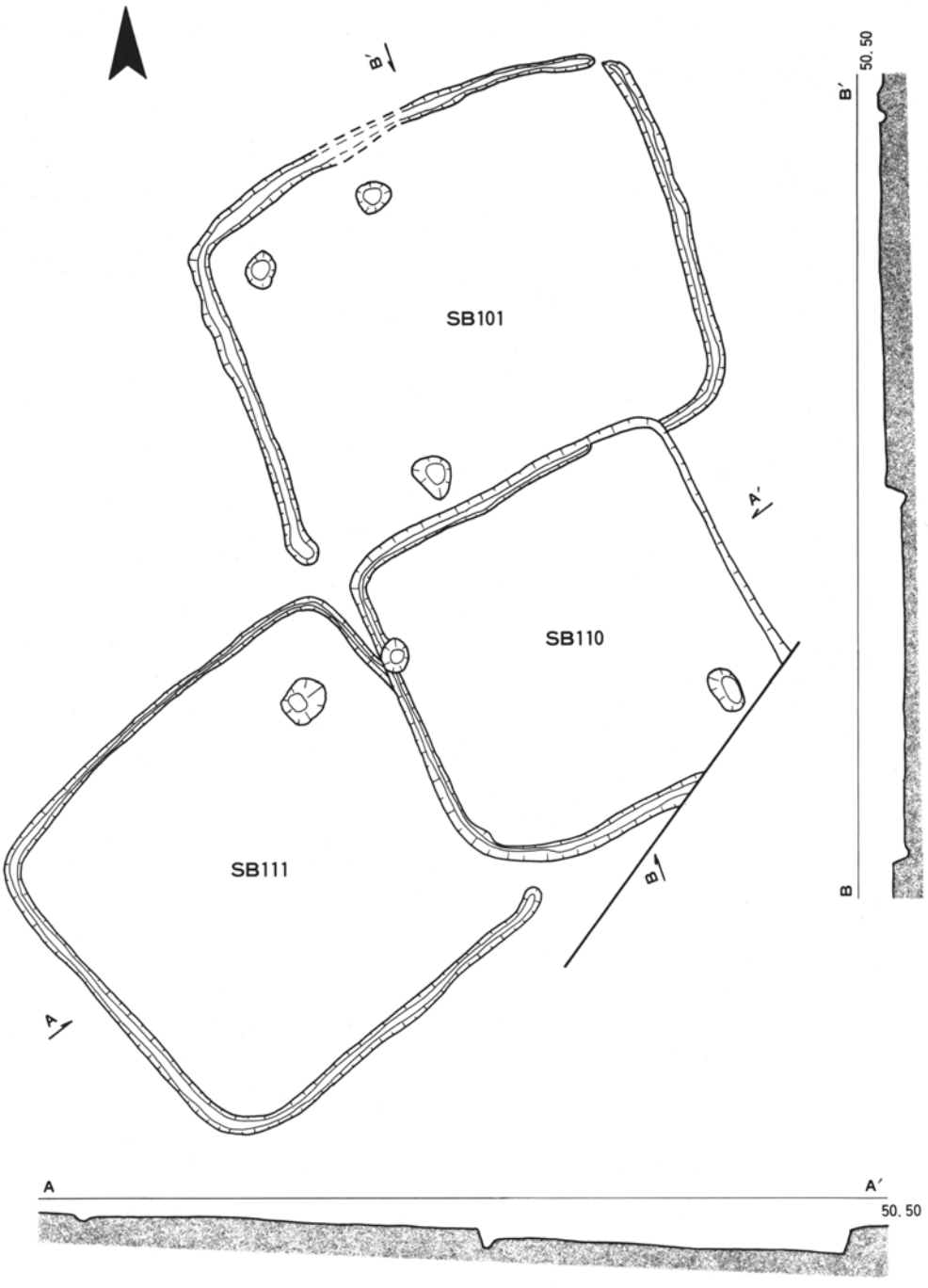
SB102（第7図）　B区南端西壁沿いで検出した。4.8m×5.5mの東西に長い方形プランであり、西辺が調査区外となる。方位はN−22°−Wである。深さは調査区西壁断面で25cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり明黄褐色土粒が少量混じる。直径30cm前後、深さ30cm前後の、柱穴と思われるピットを5基検出した。壁沿いに幅30cm、深さ5cmの周溝を検出した。西辺が調査区外となるため不明であるが、全周すると考えられる。脚台が一点出土しており、後期前半のものである。

SB106　B区北部南壁沿いで検出した。4.3×5.4mの東西に長い方形プランであり、南東の一角が調査区外となる。方位はN−35°−Wである。検出面が遺構底面である。深さは調査区南壁断面で10cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり明黄褐色砂礫土が混じる。幅20cm、深さ16cmの周溝を検出した。一部でとぎれるほかはほぼ全周すると考えられる。時期は弥生時代というほかは不明である。

SB110（第6図）　B区中央南壁寄り、SB101の南で検出した。5.3×5.4mのほぼ正方形プランであり、南東の一角が調査区外となる。方位はN−26°−Wである。深さは調査区南壁断面で60cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、黄褐色土粒の混入の多少により2層に分かれる。北辺から西辺にかけて幅27cm、深さ5cmの周溝を検出した。住居跡内東で、後期後半の壺・台付甕・高杯などがまとまって出土した。本遺跡中数少ない一括性の高い良好な資料である。SB111と重複し、新旧関係はSB111→SB110である。

SB111（第6図）　B区中央南寄り、SB101の南西で検出した。5.7×6.2mの東西に長い方形プランである。方位はN−40°−Wである。検出面が遺構底面であるため、深さ、埋土などは不明であり、幅20cm深さ3cmの周溝を検出した。南東隅でとぎれるほかは全周する。遺物は後期後半の壺などが出土した。

SB114　B区南部北壁沿いで検出した。4.9×6.0mの東西に長いやや隅丸の方形プランである。北部が調査区外となる。方位はN−33°−Wである。深さは調査区北壁断面で30cm

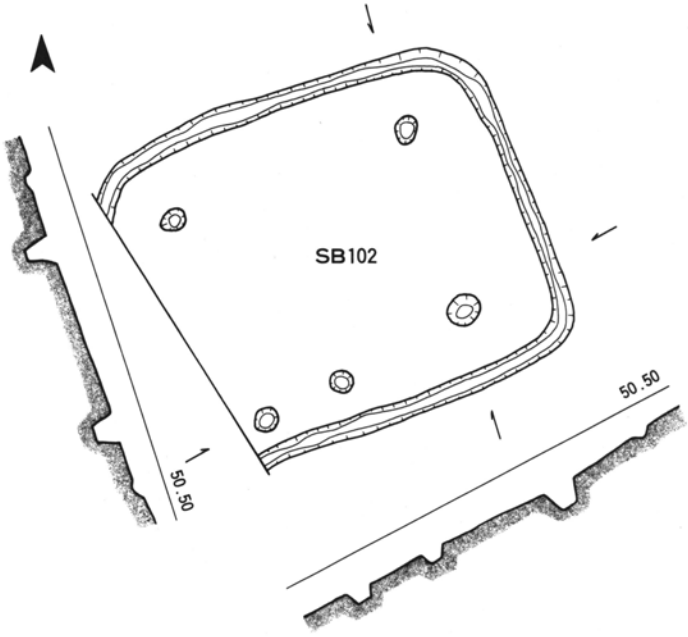


第6図　ＳＢ101・110・111　1/100

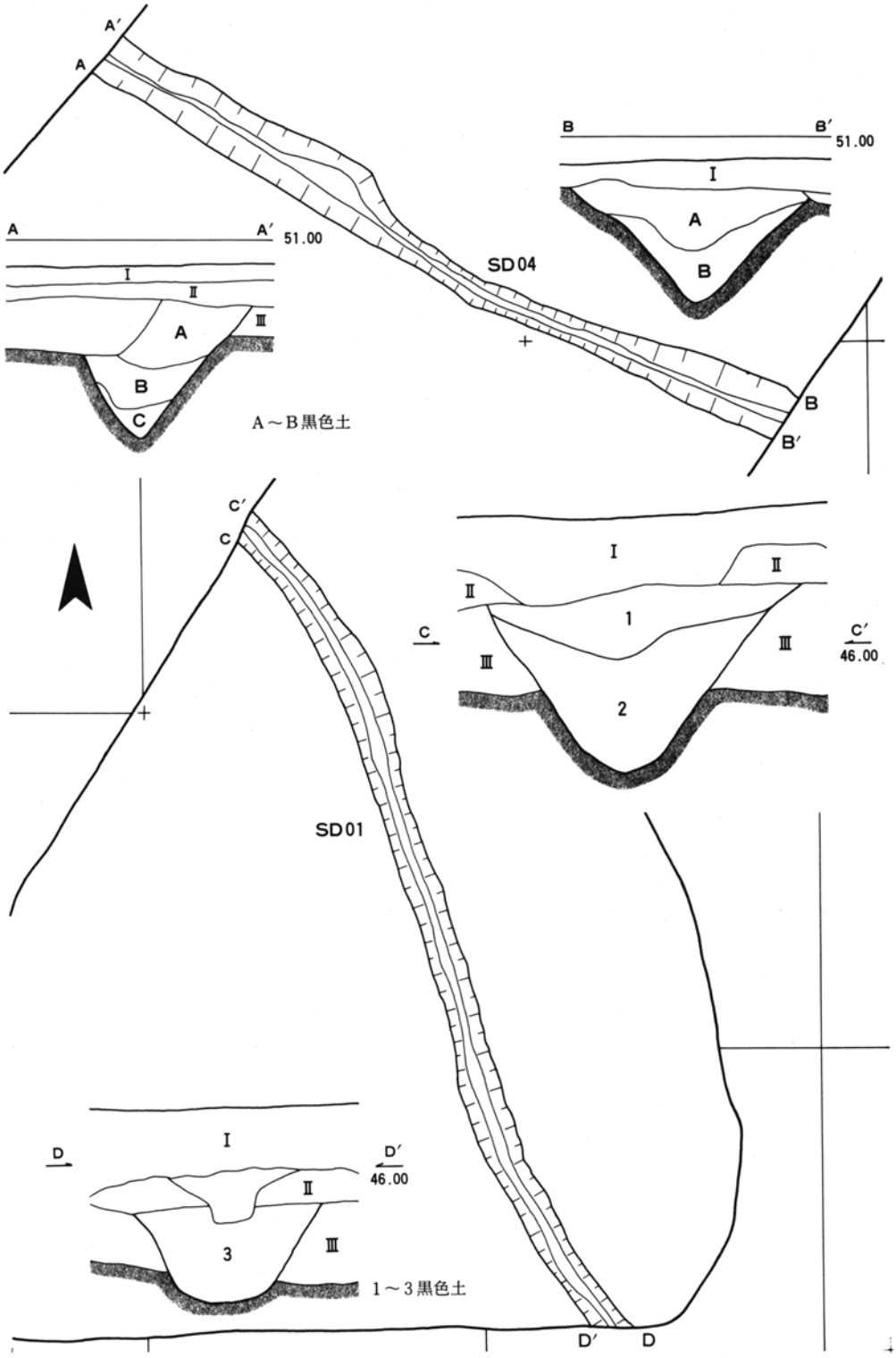
前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、黄褐色土粒を多く含みやや褐色がかる。幅30cm、深さ6cmほどの周溝を検出した。おそらく全周するものと考えられる。西辺沿いで、後期前半の完形に近い壺・甕・高杯などが正立した状態で出土した。本遺跡中において数少ない当時期の良好な一括資料である。

SB124　B区南隅で検出した。住居跡の一角のみ検出したため規模、形状、方位などは不明であるが、隅丸の方形プランになるものと考えられる。深さは調査区南・西壁断面で30cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、黄褐色土粒・ブロックの含み具合により3層に分かれる。直径40cm、深さ17cmの柱穴を1基検出した。また、幅30cm、深さ4cmの周溝を検出した。遺物は弥生土器片が少量出土しており後期前半になるものと考えられる。

SB141　B区中央南寄りで検出した。検出面が遺構底面であるため、柱穴と周溝を確認したのみであり、規模、形状、埋土などは不明である。西辺の長さ5.8mであり、方位はN－18°－Wである。南西隅で直径50cm、深さ28cmの柱穴を1基検出した。柱穴内より後期後半の壺が1点出土している。幅20cm前後、深さ4cmの周溝を西辺部分と南・北辺の一部で検出した。



第7図　SB102　1/100



第8図　ＳＤ04　1/200（上）　　第9図　ＳＤ01　1/200（下）

溝

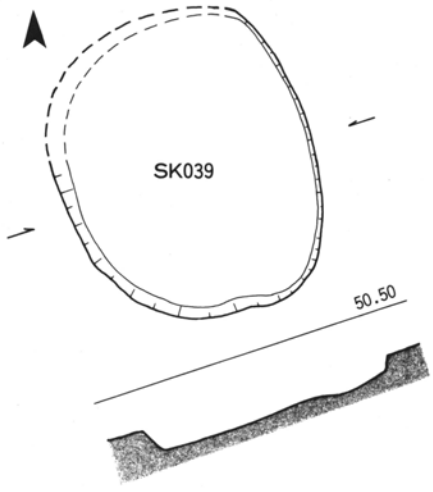
ＳＤ04(第8図)　B区北端で検出した。調査区東壁に平行し直線的に伸びる。長さ11.4ｍ、調査区北壁断面で幅1.5ｍ、深さ0.9ｍであり、断面「Ｖ」字形である。中央より調査区南壁に向かって幅0.8ｍほどに細くなり、南壁付近でまた太くなる。再掘削が認められないことから、最初掘削された時よりこのような形状であったと考えられる。溝の東端において上層より後期後半の土器がまとまって出土した。後期前半に掘削され、後半には埋まったものと考えられる。

ＳＤ01(第９図)　中位段丘崖下のＸ区において、段丘崖直下より数ｍ離れて検出した。段丘崖に沿って走り、長さ26.5ｍ、調査区東壁面で幅2.3ｍ、深さ1.4ｍであり、断面「Ｖ」字形である。ＳＤ04と同じく上層より後期後半の土器が多量に出土し、後期前半に掘削され、後半には埋まったものと考えられる。

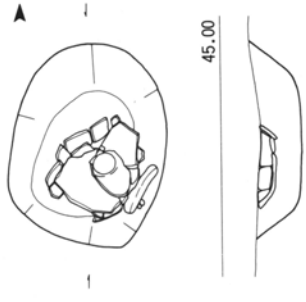
土坑

ＳＫ039（第10図)　Ｃ区中央南壁寄りで検出した。長径４ｍ、短径3.5ｍの楕円形プランを呈し、深さ20㎝である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり２層に分かれ、下層で黄色粘質土が混じる。

ＳＫ310（第11図)　A_3区ほぼ中央で検出した。長径53㎝、短径42㎝、深さ12㎝の不定形な楕円形プランである。中期中葉から後葉と思われる壺の胴下半部が、倒立した状態で出土した。墓坑である可能性が高い。



第10図　ＳＫ039　1/100

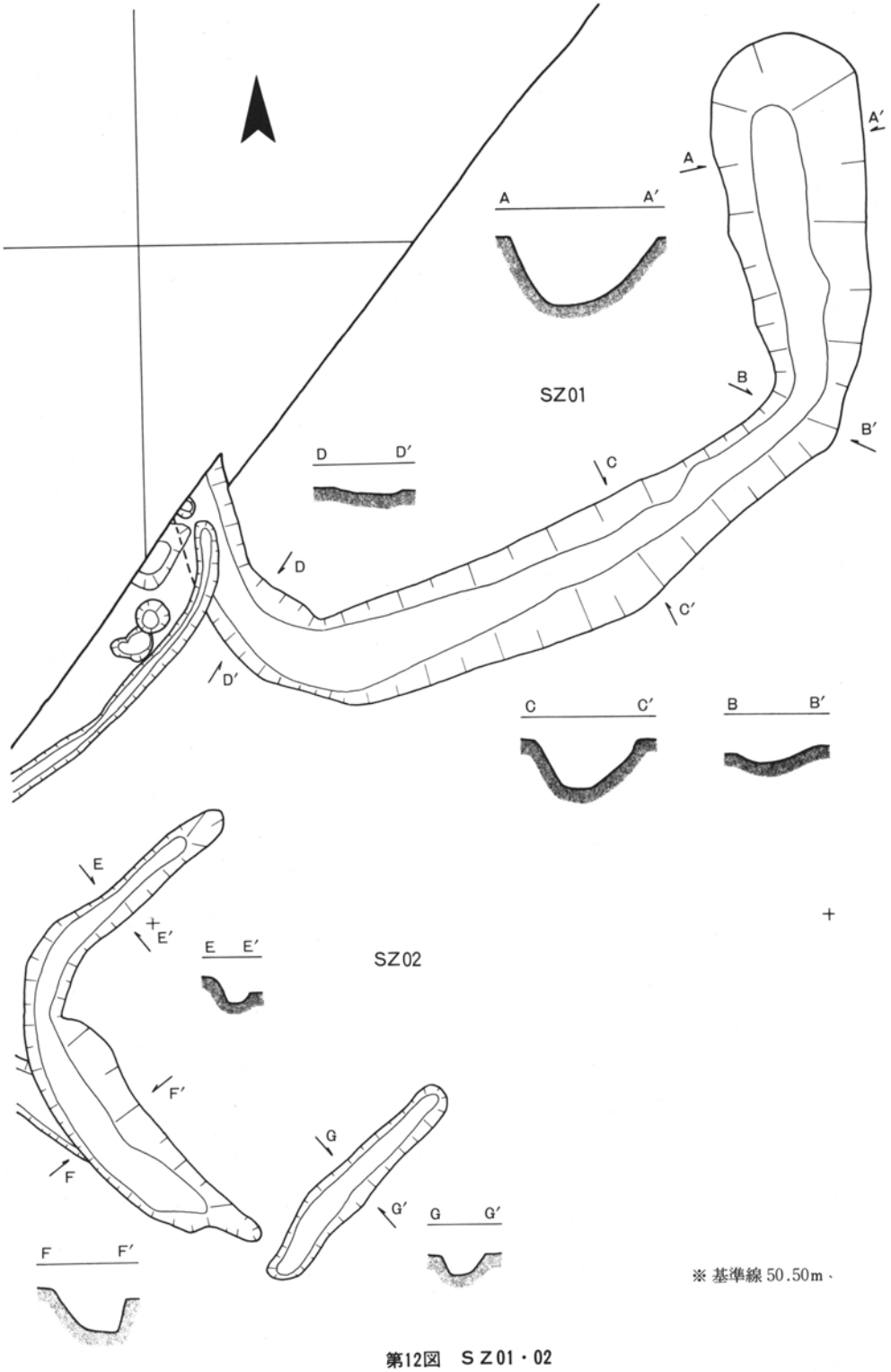


第11図　ＳＫ310　1/20

方形周溝墓

ＳＺ01(第12図)　Ｃ区南部北壁沿いで検出した。半分ほど調査区外に出るため全形は不明である。周溝は幅1.7ｍ、深さ0.3～0.8ｍであり、南部で浅くなる。周溝の東辺中央が一ヶ所切れ、ここに陸橋部をもち、形状は一辺約９ｍほどのほぼ正方形になるものと考えられる。マウンドは不明である。周溝内より後期前半の土器が若干出土した。

ＳＺ02(第12図)　Ｃ区南部ＳＺ01の南で検出した。周溝は幅0.6～1.1ｍ、深さ0.3～0.8ｍである。平面プランは「コ」の字形で、南西部に陸橋部をもち、一辺６×４のやや南北に



第12図　ＳＺ01・02

長い方形プランである。東辺の溝が検出されなかった。他の周溝の深さから考え、掘削されていなかった可能性が高い。ＳＺ01と同じくマウンドは不明である。

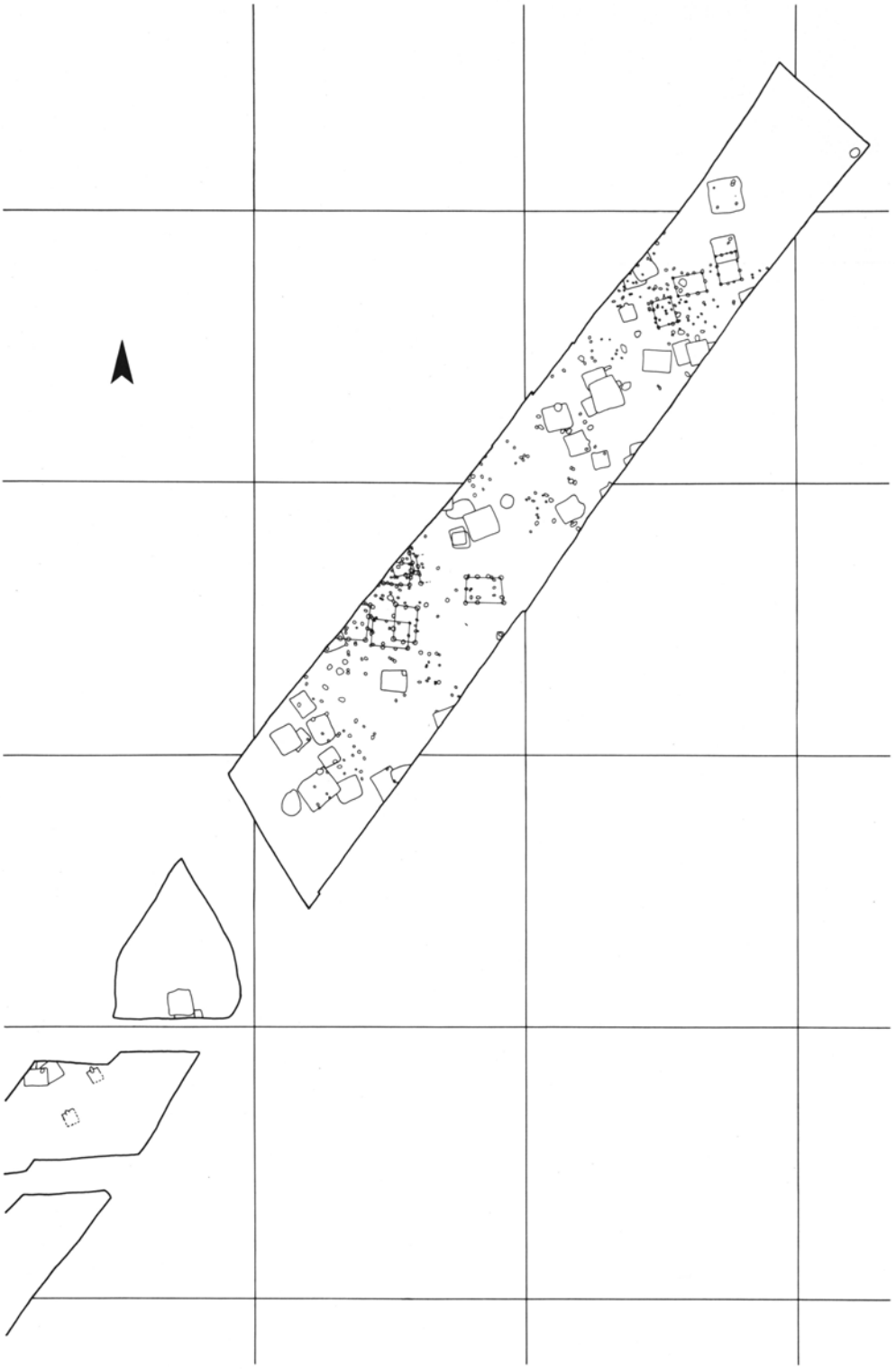
5．Ⅲ期の遺構

Ⅲ期の遺構としては竪穴住居跡、掘立柱建物などを検出した。(第13図) Ⅱ期の遺構と同じく遺存状況は良好ではなかった。竪穴住居跡は正方形から東西に長い形状のものが多く、方位はほぼ南北を向くものが多い。幅40～70cm、長さ30～50cmの住居外への突出部をいくつかの竪穴住居跡で検出した。この部分の床面に焼土の広がりが見られることから、ここがカマド部分であり、突出部は住居外への煙道部分であったと考えられる。多くは北辺中央で検出したが、ＳＢ015のように東辺中央で検出したものもあった。突出部は検出されなかったが、主に北辺中央で、円～楕円形状に焼土の広がりを検出したものもあり、住居内の火所であったと考えられる。また、ＳＢ135のように石組のカマドと考えられるものもみられた。遺存状況が良くないため壁高は浅いものが多い。掘立柱建物は、Ｃ区中央とＢ区中央でまとまって検出された。方位がやや東に振れるものと、西に15°前後振れるものがみられる。柱穴の深さに浅深がみられるものが多く、柱穴を掘る際に四隅の柱穴を深く掘ったようである。柱間は平均値で1.6m前後のものと、2.2m前後のものがみられた。当時期の遺構は奈良時代後半～平安時代初頭のものが多い。

竪穴住居跡

ＳＢ001（第14図）　Ｃ区北端北壁寄りで検出した。6.6×6.4mの正方形プランである。方位はＮ－9°－Ｗである。深さは検出面から８～26cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、若干小礫や花崗岩の風化土を含む。また、北辺寄りで焼土混じりの暗褐色土がみられた。柱穴は４基検出された。北東隅の柱穴を除き他の柱穴は直径40cm、深さ40cmの円形プランである。北東隅の柱穴は長径90cm、短径50cm、深さ44cmの楕円形プランである。この柱穴の北側で本住居跡に伴う長径80cm、短径50cm、深さ50cmの楕円形プランの土坑を１基検出した。この柱穴と土坑内より土師器丸底甕が出土した。北辺中央で焼土の広がりがみられた。遺物は、上記の土師器丸底甕以外に、住居跡埋土掘削中北東隅で土師器把手付甕が出土した。

ＳＢ002　Ｃ区中央よりやや北、ＳＢ001の南で検出した。4.8×4.6mの正方形プランである。方位はＮ－13°－Ｗである。深さは検出面から12cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、若干小礫や花崗岩の風化土を含む。北東隅で長径70cm、短径50cm、深さ30cmの楕円形プランの土坑を１基検出した。本住居跡に伴うものであるが性格については不明である。北辺中央で焼土の広がりがみられた。遺物は須恵器蓋と土師器甕が出土した。ＳＢ023と重複し、新旧関係はＳＢ002→ＳＢ023である。



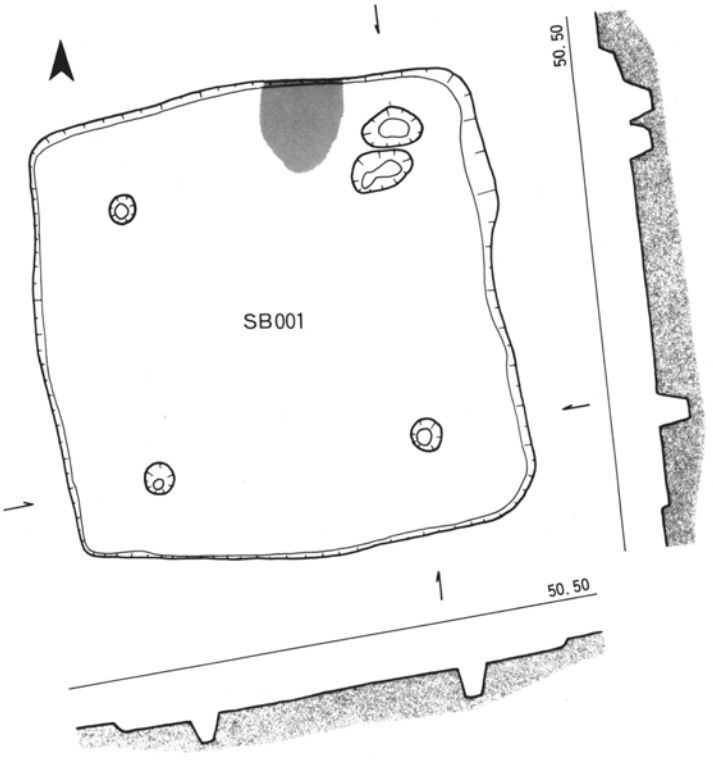
第13図　Ⅲ期の遺構　1/800

ＳＢ003　Ｃ区中央南壁沿いで検出した。大部分調査区外となるため規模、形状、方位などは不明である。深さは調査区南壁断面で20cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色土が少量混じる。

ＳＢ004　Ｃ区中央北壁沿いで検出した。北部が一部調査区外となるため東西辺の長さは不明である。南辺の長さ4.5mの隅丸の方形プランとなる。方位はＮ－30°－Ｗである。深さは調査区北壁断面で20cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、黄褐色土粒を少量含む。遺物は須恵器蓋杯、土師器甕などが出土した。

ＳＢ005　Ｃ区中央北壁寄りで検出した。3.0×3.1mの正方形プランである。方位はＮ－23°－Ｗである。深さは検出面から25cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、黄褐色土粒・ブロックを含み、３層に分かれる。上層の床面上埋土と、下層の床面下の整地層との間に明灰褐色粘土の粒が水平に堆積し、張床を形成している。最初地山まで荒く掘り下げた後、整地を行いその上面に張床を行っている。張床の分かる典型例である。北辺と南辺中央で直径28cm、深さ20cm前後のピットを２基検出した。本住居跡の柱穴になるものと思われるが、どのような上屋構造になるかは不明である。北辺中央突出部を検出し、この部分で焼土の広がりがみられた。この突出部を除き、幅30cm、深さ５cmの周溝がめぐる。遺物は須恵器片が出土した。

ＳＢ006（第15図）
Ｃ区中央南壁寄りで検出した。4.3×3.5mの南北に長い方形プランである。方位はＮ－19°－Ｗである。深さは検出面から10cm前後である。埋土は２層に分かれ、上層は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色土が混じる。下層は黄色砂土層である。遺物は須恵器杯、土師器甕が出土



第14図　ＳＢ001　1/100

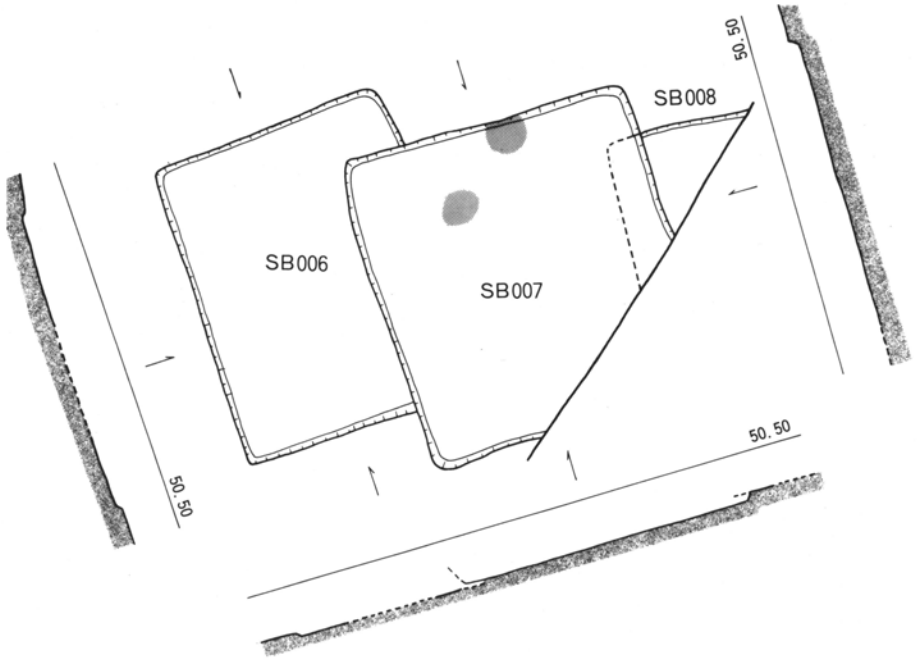
した。東辺北部で焼土の広がりがみられた。ＳＢ007と重複し、新旧関係はＳＢ006→ＳＢ007である。

ＳＢ007（第15図）　Ｃ区中央南壁寄りで検出した。4.4×4.1ｍの方形プランである。方位はＮ－13°－Ｗである。深さは調査区南壁断面で45㎝前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色砂礫土の混入状況により２層に分かれる。調査区南壁断面で幅30㎝、深さ20㎝の周溝を確認した。北辺沿いで焼土の広がりがみられた。遺物は須恵器蓋杯と土師器甕が出土した。ＳＢ008と重複し、新旧関係はＳＢ007→ＳＢ008である。

ＳＢ008（第15図）　Ｃ区中央南壁寄りで検出した。北西部角のみ検出し、大部分調査区外となるため規模、形状については不明である。方位はＮ－11°－Ｗほどである。深さは調査区南壁断面で20㎝前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色土粒の混入状況により２層に分かれる。

ＳＢ009（第16図）　Ｃ区南部北壁寄りで検出した。南半をＳＢ011に切られているため東・西辺の長さ、形状は不明である。北辺の長さは4.3ｍである。方位はＮ－23°－Ｗである。深さは４㎝である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土である。幅30㎝、深さ６㎝の周溝を検出した。全周するものと考えられる。遺物は土師器甕が出土した。

ＳＢ010（第16図）　Ｃ区南部で検出した。東部をＳＢ011によって切られているため南・北辺の長さ、形状については不明である。西辺の長さは3.3ｍである。方位はＮ－25°－Ｗであ

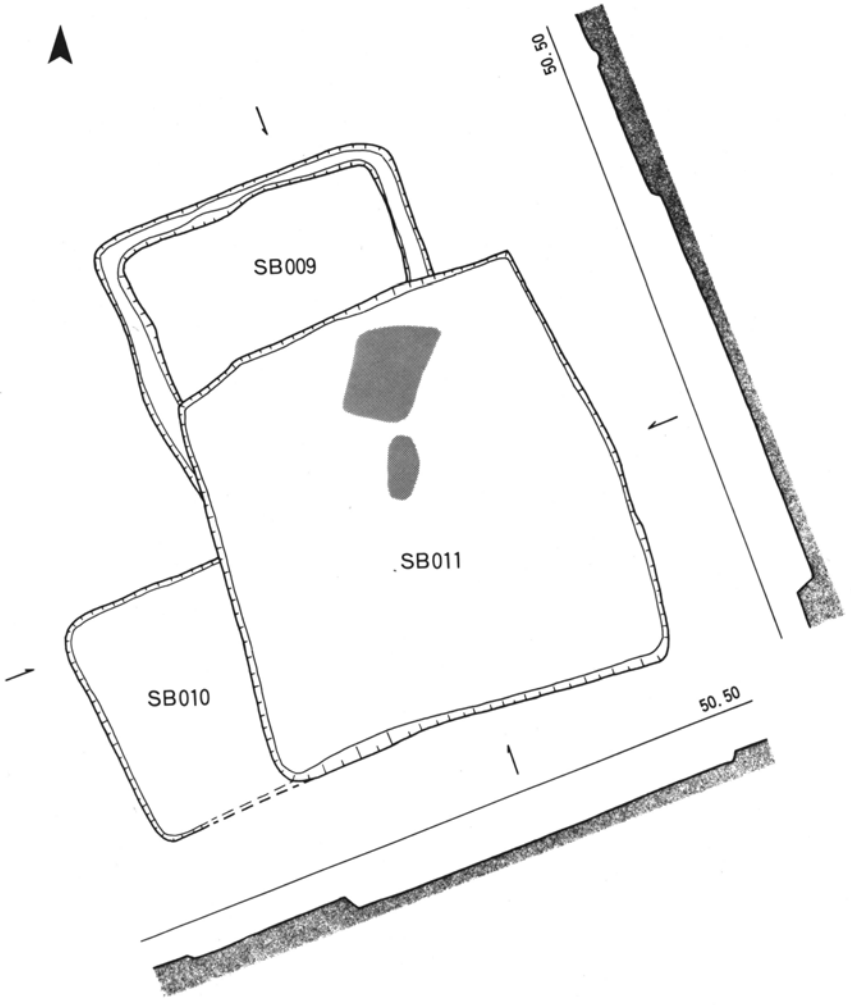


第15図　ＳＢ006・007・008　1/100

る。深さは5㎝である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色土粒が少量混じる。遺物は須恵器杯、須恵器甕が出土した。

ＳＢ011（第16図）　Ｃ区南部中央で検出した。5.8×5.6mのやや不定形な正方形プランである。方位はＮ－20°－Ｗである。深さは検出面から23㎝である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色土ブロックの混入状況により２層に分かれる。下層は、住居跡内埋土とほぼ同じ黒色土と明黄褐色土ブロックの混じった土であり、これによって床面下の整地が行われている。北辺寄りで焼土を多量に含んだ層がみられ、同じく北辺中央で焼土の広がりがみられた。遺物は須恵器蓋杯、土師器甕が出土した。

ＳＢ013　Ｃ区南部北壁寄りで検出した。4.7×4.9mの正方形プランである。方位はＮ－19°－Ｗである。深さは10㎝前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、黄色土粒



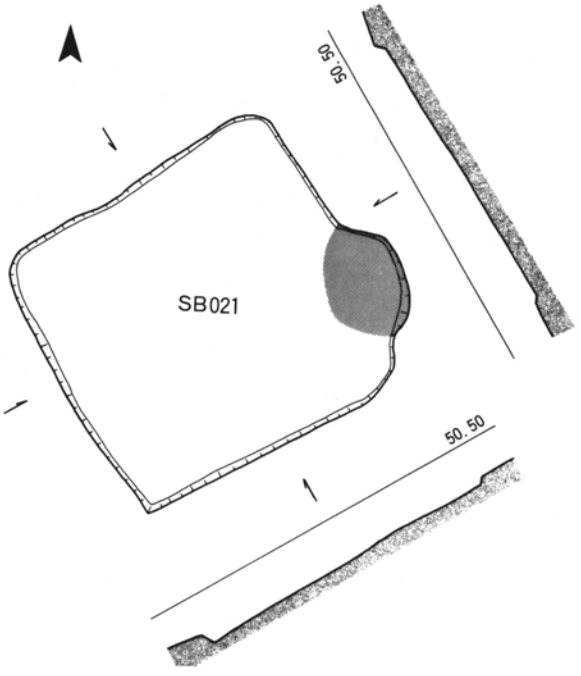
第16図　ＳＢ009・010・011　1/100

・ブロックを含む。黄色土粒、焼土粒ブロックを含む黒色土によって整地を行った後、黄色土を含んだ黒色土によって張床が行われている。北辺中央で直径1.2m深さ0.35mの、住居跡外に突出した円形プランを呈する土坑を一基検出した。埋土は2層に分かれ、上層は焼土粒・焼土塊を多量に含む灰褐色粘土、下層は明黄褐色土と焼土粒を少量含んだ黒色土である。この土坑は床面下の整地層を切って掘り込まれている。カマド部分の遺存は状況の良好な例である。このカマド部分を除き、幅30cm、深さ6cmの周溝がめぐる。遺物は須恵器や土師器甕などが出土した。

ＳＢ015　Ｃ区南部中央で検出した。4.1×4.2mの正方形プランである。方位はＮ－23°－Ｗである。検出面が遺構底面であるため、深さは不明である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、黄褐色土ブロックを含む。東辺中央で突出部を検出し、焼土の広がりがみられた。南東隅で長径70cm、短径40cm、深さ30cmの楕円形プランを呈するピットを1基検出した。中から須恵器杯、盤が出土した。住居跡の柱穴になると考えられる。遺物は柱穴内のもののほか、須恵器杯、土師器甕などが出土した。

ＳＢ016　Ｃ区南部中央、ＳＢ015の南東で検出した。3.3×3.2mのやや不定形な正方形プランである。方位はＮ－10°－Ｗである。検出面が遺構底面であるため、深さは不明である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、黄褐色土ブロックを含む。北東隅で直径40cm、深さ20cmの円形プランを呈する土坑を1基検出した。住居跡に伴うものと考えられる。また、この土坑と北辺との間で焼土の広がりを検出した。遺物は須恵器蓋などが出土した。

ＳＢ017　Ｃ区南部南壁沿いで検出した。大部分調査区外となるため規模、形状は不明である。方位はＮ－13°－Ｗほどである。深さは調査区南壁断面で、床面まで15cm(床面整地層下まで30cm)である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土で2層に分かれ、下層は黄褐色土ブロックを含む床面下の整地層である。ＳＢ018



第17図　ＳＢ021　1/100

と重複し、新旧関係はＳＢ017→ＳＢ018である。

ＳＢ018　Ｃ区南部南壁沿いで検出した。大部分調査区外となるため規模、形状は不明である。方位はＮ－26°－Ｗほどである。深さは調査区南壁断面で30cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土で、黄褐色土ブロックなどの混入状況により２層に分かれる。

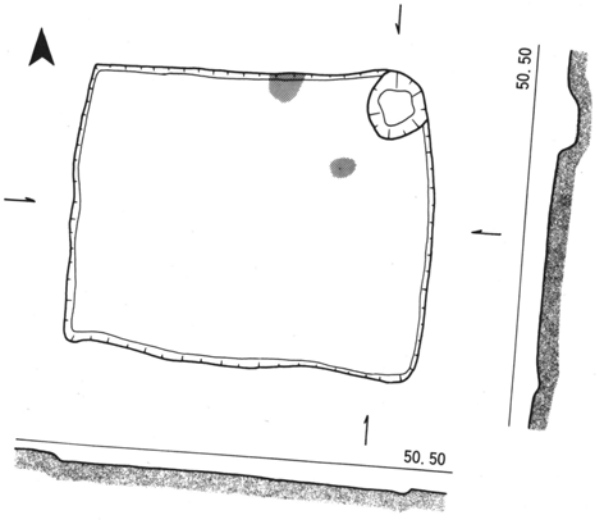
ＳＢ020　Ｃ区南端南壁沿いで検出した。大部分調査区外となるため規模、形状は不明である。方位はＮ－24°－Ｗほどである。深さは、上層からの攪乱を受けているため床面下整地層のみ残っており、調査区南壁断面で20cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土で、明黄褐土が混じる。北辺で突出部を検出し、焼土の広がりがみられた。

ＳＢ021（第17図）　Ｂ・Ｃ区にまたがり検出した。4.2×4.3mの正方形プランである。方位はＮ－33°－Ｗである。深さはＣ区西壁断面より、床面まで30cm（床面整地層下まで30～60cm）である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色土粒、ブロックの混入状況により２層に分かれ、下層は床面下の整地層である。東辺で、幅1.6m、長さ0.6mの突出部を検出し、焼土の広がりがみられた。遺物は須恵器杯、土師器甕が出土した。

ＳＢ026　Ｃ区中央やや南、ＳＢ06の西で検出した。4.1×5.3mの東西に長い方形プランである。方位はＮ－２°－Ｅである。深さは６cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、黄褐色土粒、焼土、炭化物が混じる。黄褐色粘質土による張床を行っている。北辺中央で焼土の広がりがみられた。遺物は須恵器蓋・壺などが出土した。

ＳＢ104　Ｂ区の北部、ＳＤ04の南西で検出した。大部分が調査区外に出るため全体を明らかにすることは出来なかった。方位はＮ－１°－Ｗである。深さは、調査区北壁断面で30cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり２層に分かれ、上層では黄褐色土粒を少量、下層では黄褐色土粒・ブロックを含む。

ＳＢ105　Ｂ区北部、ＳＢ104の東で検出した。5.2×5.8mの東西に長い方形プランである。方位はＮ－21°－Ｗである。深さは５～21cmである。埋土は砂を多く含む明黒褐色土である。遺物は須恵器片が出土した。



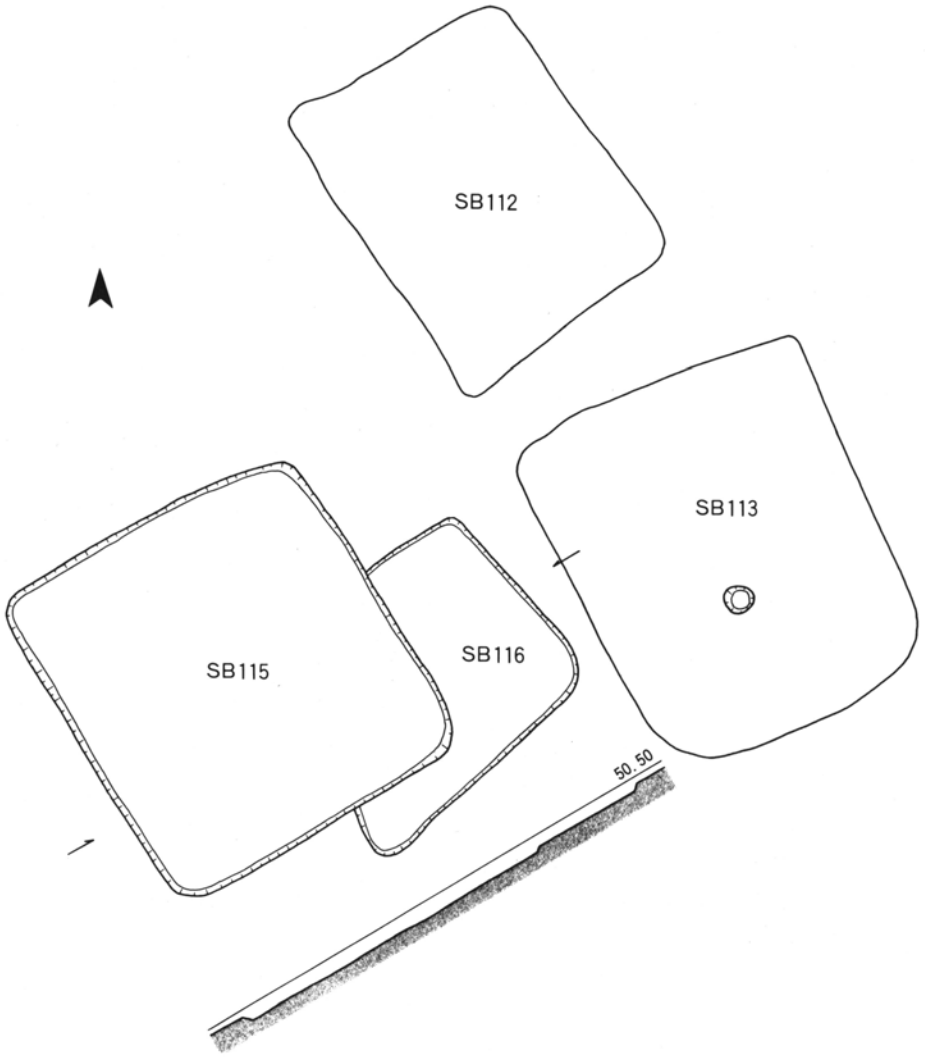
第18図　ＳＢ109　1/100

ＳＢ108　Ｂ区中央北壁沿いで検

出した。北半部が調査区外に出るため全体を明らかにすることは出来なかった。南辺の長さは4.5mである。方位はN－23°－Wである。深さは調査区北壁断面で30cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土である。

ＳＢ109（第18図）　B区ほぼ中央で検出した。4.1×4.9mの東西に長い方形プランである。方位はN－4°－Wである。深さは5～11cmである。北東隅で、直径90cm、深さ30cmの円形プランを呈する土坑を1基検出した。遺物は須恵器蓋杯が出土した。

ＳＢ112（第19図）　B区南部、SB113の北で検出した。4.5×3.4mの南北に長い方形プランである。方位はN－37°－Wである。検出面が遺構底面であり、そのため深さなどは不明



第19図　ＳＢ112・113・115・116　1/100

である。

ＳＢ113（第19図）　Ｂ区南部、ＳＢ112の南で検出した。5.0×4.2mの南北に長い方形プランである。方位はＮ－25°－Ｗである。検出面が遺構底面であり、そのため埋土、深さなどは不明である。

ＳＢ115（第19図）　Ｂ区南部北壁寄りで検出した。4.8×4.5mのほぼ正方形プランである。方位はＮ－32°－Ｗである。深さは13cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、北辺沿いに焼土の広がりがみられた。遺物は須恵器杯、土師器などが出土した。ＳＢ116と重複し、新旧関係はＳＢ116→ＳＢ115である。

ＳＢ116（第19図）　Ｂ区南部北壁寄りで検出した。3.1×3.8mの東西に長い、やや不定形な方形プランである。方位はＮ－43°－Ｗである。深さは検出面から８cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土である。

ＳＢ117（第20図）　Ｂ区南部中央、ＳＢ118の北で検出した。3.0×3.6mの東西に長い方形プランである。方位はＮ－35°－Ｗである。深さは検出面から６cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり黄褐色土粒・ブロックが混じる。

ＳＢ118（第20図）　Ｂ区南部中央、ＳＢ117の南で検出した。5.8×6.8mの東西に長い方形プランである。方位はＮ－36°－Ｗである。深さは検出面から７cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり黄褐色土粒・ブロックが混じる。ＳＢ119と重複し、新旧関係はＳＢ119→ＳＢ118である。

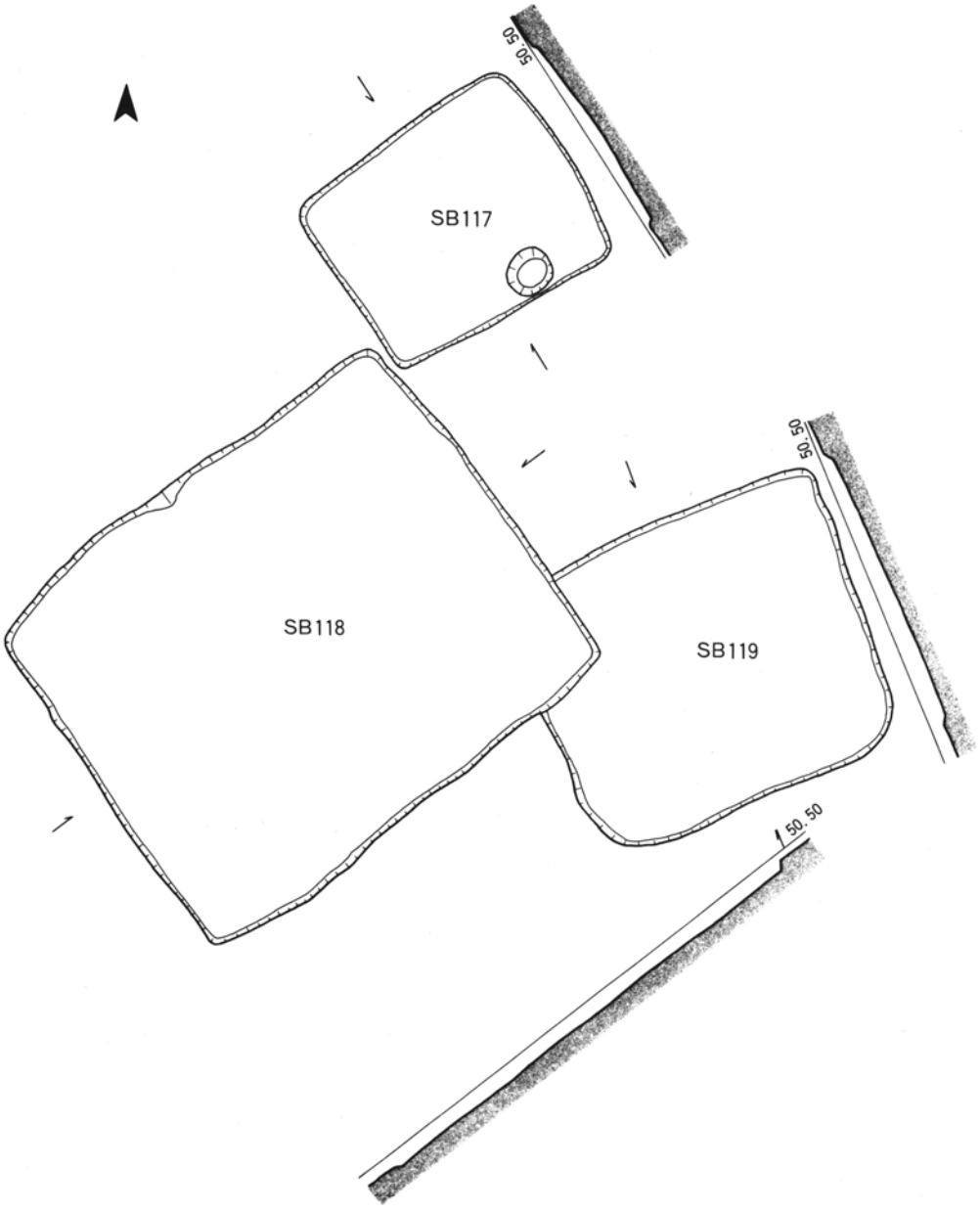
ＳＢ119（第20図）　Ｂ区南部中央、ＳＢ117の南で検出した。4.1×4.7mの東西に長い方形プランである。方位はＮ－25°－Ｗである。深さは検出面から７cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり黄褐色土が混じる。

ＳＢ120　Ｂ区南部南壁沿いで検出した。5.3（以上）×4.5mの南北に長い方形プランである。方位はＮ－31°－Ｗである。深さは調査区南壁断面で20cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色土ブロック、焼土が少量混じる。ＳＢ121・ＳＢ139と重複し、新旧関係はＳＢ139→ＳＢ120→ＳＢ121である。

ＳＢ121　Ｂ区南部南壁沿いで検出した。3.0×4.4m（以上）の極端に東西に長い、やや不定形な方形プランになるものと考えられる。方位はＮ－14°－Ｗである。深さは調査区南壁断面で25cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、明黄褐色土粒を部分的に多く含む。

ＳＢ133　Ｂ区北部、ＳＢ105の西で検出した。3.1×2.8mの南北に長い、やや不定形な方形プランである。方位はＮ－14°－Ｗである。検出面が遺構底面であり、そのため埋土、深さは不明である。ＳＢ136と重複し、新旧関係はＳＢ133→ＳＢ136である。

ＳＢ135　Ｂ区中央東寄りで検出した。大部分調査区外に出るため、全体を明らかにすることはできなかった。方位はＮ－19°－Ｗである。深さは調査区南壁断面で30㎝である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり、黄褐色土粒・ブロックの含み具合により２層に分かれる。北辺中央と思われる部分において焼土の広がりがみられ、その南側で柱状の石が



第20図　ＳＢ117・118・119　1/100

並んだ状態で出土した。石組カマドの一部と考えられる。この周囲で長胴の土師器甕などが出土した。

ＳＢ136　B区北部、ＳＢ105の西で検出した。3.0×3.3mの東西に長い、やや不定形な方形プランである。方位はＮ－3°－Ｗである。深さは検出面から5㎝前後である。北辺中央から東辺、南辺にかけて、幅40㎝、深さ4㎝の周溝がめぐる。遺物は須恵器小片、土師器甕などが出土した。

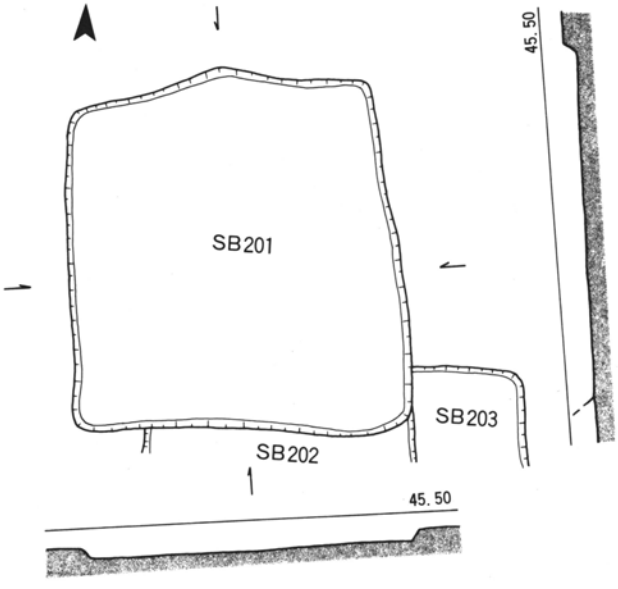
ＳＢ139　B区南部南壁沿いで検出した。ＳＢ120・ＳＢ121によって切られ、南半部が調査区外に出るため規模、形状については不明であるが、隅丸の方形プランになるものと考えられる。また、検出面が遺構底面であるため、深さについても不明である。幅50㎝・深さ12㎝の周溝を検出した。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土で、明黄褐色土をやや多く含み褐色がかる。方位はＮ－24°－Ｗである。

ＳＢ201（第21図）　X区北端中央で検出した。5.0×4.5mの南北に長い方形プランである。方位はＮ－7°－Ｗである。深さは検出面から13～20㎝である。遺物は須恵器蓋杯が出土した。ＳＢ202・ＳＢ203と重複し、新旧関係はＳＢ203→ＳＢ202→ＳＢ201である。

ＳＢ202（第21図）　X区北端中央で検出した。ＳＢ201に切られ、また、南半部が調査区外に出るため規模、形状は不明である。検出した部分での東西方向の長さ3.6mである。方位はＮ－1°－Ｗである。深さは調査区南壁断面で80㎝前後である。埋土は暗黒褐色土であり、下部で焼土、炭化物が混じる。

ＳＢ203（第21図）　X区北端中央で検出した。ＳＢ201・ＳＢ202に切られ、また、北東部角のみを検出し得たため規模、形状などは不明である。方位はＮ－0°である。深さは調査区南壁断面で60㎝前後である。埋土は砂を多く含む暗黒褐色土である。

ＳＢ301（第22図）　A_1区北西隅で検出した。北西隅の一角が調査区外となり、3.3×4.6mの東西に長い方形プランである。方位はＮ－1°－Ｗであ



第21図　ＳＢ201・202・203　1/100

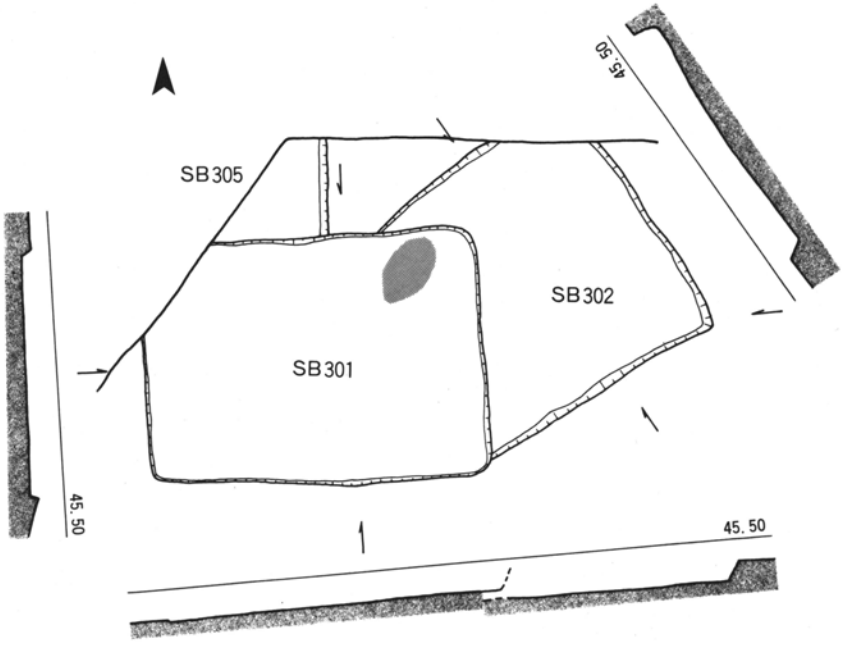
る。深さは検出面から25cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり上層で砂、小礫を少量含み、下層で明黄褐色砂礫を多く含む。遺物は須恵器、灰釉陶器、土師器甕が出土した。ＳＢ302・ＳＢ305と重複し、新旧関係はＳＢ302・ＳＢ305→ＳＢ301である。

ＳＢ302（第22図）　A_1区北西隅で検出した。北東隅の一角が調査区外となり、また、ＳＢ301によって切られるため規模は不明であるが、ほぼ正方形プランになるものと考えられる。方位はＮ－35°－Ｗである。深さは検出面から15cm前後である。埋土は黒ボクを基調とした黒色土であり明黄褐色砂礫土を多く含む。

ＳＢ303　A_1区北東隅で検出した。南部がA_3区になる。北辺の長さ2.2ｍであり南北に長い方形プランになると考えられる。方位はＮ－29°－Ｗである。深さは検出面から床面まで10cm前後（床面整地層下まで25cm前後）である。埋土は黒色土であり、整地層中に焼土、黄褐色土粘土粒を少量含む。北辺中央で突出部を検出し、焼土の広がりがみられた。

ＳＢ304　A_1区東壁中央で検出した。北辺の長さ2.4ｍである。方位はＮ－30°－Ｗほどである。深さは検出面から20cm前後である。埋土は灰褐色砂であり上層で黄褐色の粘土を多く含み、下層で小礫を多く含む。北辺中央で突出部を検出し、焼土の広がりがみられた。

ＳＢ305（第22図）　A_1区北東隅で検出した。ＳＢ301によって切られ、また大部分が調査区外となるため詳細は不明である。埋土は暗黒褐色土である。



第22図　ＳＢ301・302・305　1/100

掘立柱建物

ＳＢ023（第23図）　Ｃ区ほぼ中央、ＳＢ024の東で検出した。桁行３間、梁行３間であり南北に長い。柱穴は50cm前後のほぼ円形プランを呈し、深さは15～40cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒褐色土であり黄褐色土粒を含むものもみられる。柱間は桁行で1.6m、梁行で1.3mである。方位はＮ－15°－Ｗである。ＳＢ002と重複し、新旧関係は、ＳＢ002→ＳＢ023である。

ＳＢ024（第23図）　Ｃ区ほぼ中央、ＳＢ023の西で検出した。桁行３間、梁行２間であり東西に長い。柱穴は50cm前後のほぼ円形プランを呈し、深さは23～50cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり暗褐色砂礫土を含む。柱間は桁行で1.9m、梁行で1.9mである。方位はＮ－13°－Ｗである。

ＳＢ027（第23図）　Ｃ区ほぼ中央、ＳＢ024の西で検出した。桁行３間、梁行３間であり南北に長い。柱穴は50cm前後のほぼ円形プランを呈し、深さは15～30cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり黄褐色土ブロックが混じる。柱間は桁行で1.6m、梁行で1.3mである。方位はＮ－15°－Ｗである。

ＳＢ125（第24図）　Ｂ区北部北壁寄り、ＳＢ106の北で検出した。桁行３間、梁行２間であり東西に長い。柱穴は70cm前後のほぼ円形プランを呈し、深さは14～42cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土であり明黄褐色ブロックが混じる。柱間は桁行で2.1m、梁行で2.5mである。方位はＮ－10°－Ｗである。柱穴内より須恵器蓋片が出土した。

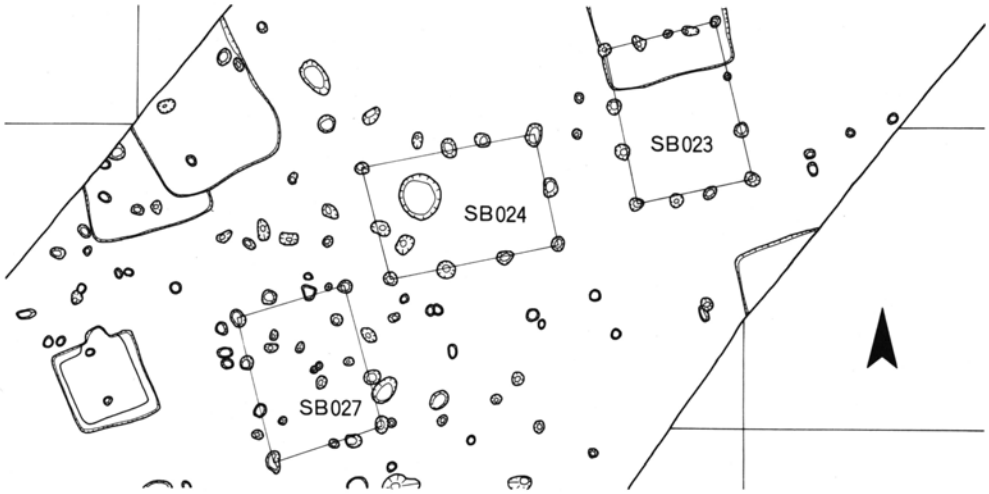
ＳＢ126（第24図）　Ｂ区北部北壁寄り、ＳＢ127、ＳＢ128の西で、南北方向の柱穴列のみを一条検出した。柱間は1.7mであり３間分を確認した。柱穴は70cm前後のほぼ円形プランを呈し、深さは11～31cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土である。西側に対応する柱穴がみられないことから、この柱穴列は建物の西片にあたり建物自体は東側に伸びると考えられる。方位はＮ－９°－Ｗである。柱穴内より須恵器片が出土した。ＳＢ127と重複し、新旧関係はＳＢ126→ＳＢ127である。

ＳＢ127（第24図）　Ｂ区北部北壁寄り、ＳＢ126の東側で、ＳＢ128と重複して検出した。一部調査区外となるため棟方向は確定できないが、柱穴の続き具合より、東西辺が梁行、南北辺が桁行になると考えられる。梁行２間、桁行の間数は不明であるが３間分確認している。柱穴は60～80cmのほぼ円形プランを呈し、深さは19～43cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土である。柱間は桁行で1.9m、梁行で1.9mである。方位はＮ－16°－Ｗである。柱穴内より須恵器片が出土した。ＳＢ128との新旧関係はＳＢ128→ＳＢ127である。

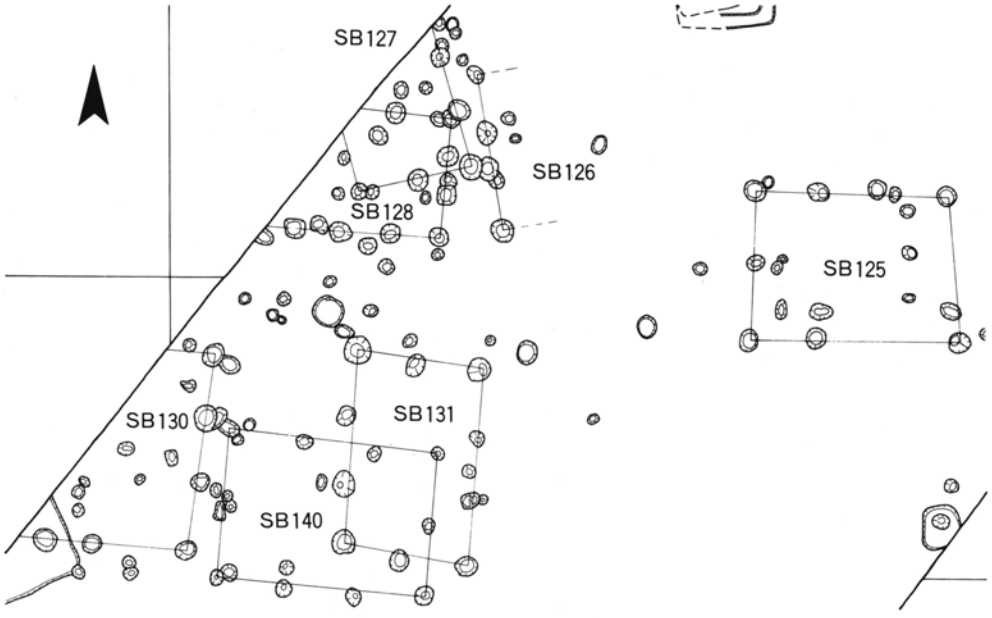
ＳＢ128（第24図）　Ｂ区北部北壁寄り、ＳＢ126の東で、ＳＢ127と重複して検出した。一部調査区外となるため棟方向は確定できないが、柱穴の続き具合より、東西方向が桁行、南北

方向が梁行になると考えられる。梁行３間、桁行の間数は不明であるが４間分確認している。柱穴は60～70cmのほぼ円形プランを呈し、深さは30cm前後である。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土である。柱間は桁行で1.6m、梁行で1.3mである。方位はＮ－６°－Ｅである。柱穴内より須恵器片が出土した。

ＳＢ130（第24図）　Ｂ区ほぼ中央北壁沿い、ＳＢ140の西で検出した。一部調査区外となるが、柱穴の続き具合より、東西方向が桁行、南北方向が梁行になると考えられる。桁行３間、梁行２間を確認している。柱穴は70cm前後のほぼ円形プランを呈し、深さは12～40cmであ



第23図　Ｃ区掘立柱建物　1/250



第24図　Ｂ区掘立柱建物　1/250

る。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土である。柱間は桁行で2.2m、梁行で2.4mである。方位はN－5°－Eである。

SB131（第24図）　B区ほぼ中央北壁寄り、SB140と重複して検出した。桁行3間、梁行2間であり南北に長い。柱穴は50～70cmのほぼ円形プランを呈し、深さは12～36cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土である。柱間は桁行で2.2m、梁行で2.1mである。方位はN－4°－Eである。柱穴内より須恵器片が出土した。

SB140（第24図）　B区ほぼ中央北壁寄り、SB130の東で、SB131と重複して検出した。桁行3間、梁行2間であり東西に長い。柱穴は50～60cmのほぼ円形プランを呈し、深さは23～37cmである。埋土は黒ボク土を基調とした黒色土である。柱間は桁行で2.3m、梁行で2.4mである。方位はN－5°－Eである。柱穴内より須恵器、灰釉陶器が出土した。SB131との新旧関係は不明である。　（野口哲也）

6．Ⅳ期の遺構

中世の遺構として一括されるが，13世紀代と16世紀代の2時期に分かれる。X区とA_2・A_4区で検出され，中位段丘のB・C区上では確認されていない。全体としてこの時期の遺構は希薄である。

SK4002　A_2区の中央部で検出され、東側をSD15できられる。平面形が東西約5.5m以上・南北最大幅2.7mの不整形の大型土坑である。検出面からの深さ0.3m、埋土は暗黒色土で、砂を多く含み、径30cm程度の円礫が混入する。出土遺物は少なく、13世紀代の山茶椀が出土している。

SD15　A_2区北西部からA_4区南壁へ向けて、南方向から南東へやや屈曲してはしる溝。検出面で、幅0.8～3.2m、深さ0.1～0.8m、南東へ傾斜し、断面は、緩傾斜のV字形である。埋土は、砂を多く含み、部分的に流水の痕跡が認められる。発掘区壁面の観察によれば、現在の耕地造成より2時期以上古い水田によって上半が削平されている。出土遺物は少なく、SK4002とほぼ同時期の13世紀代の山茶椀が出土している。現在、野田川の河谷は、階段状の水田となっているが、初期の水田造成に伴う用水路と考えられる。

SK2001～2032　X区の西半に集中する小土坑群。形状は、直径約0.3～1.3m、検出面からの深さ約0.1～0.5m、不整形のものがあり、一定していない。埋土は、粘性のある灰黒色土で基盤の砂分を含み、Ⅱ・Ⅲ期の遺構の黒色土とは様相が異なる。天目茶椀、内耳鍋、土師皿等が、幾つかの土坑から出土しており、時期は16世紀代である。遺構の掘り込み面と考えられる現地表面から検出面まで深さ約1mで、方向性・規則性はないが、掘立柱建物などの柱穴と推定される。

7．Ⅴ期の遺構

B区で土坑１基が検出されている。

ＳＫ103　長軸1.9m、短軸1.0mの平面が長楕円形の土坑。長軸方向は、Ｎ－36°－Ｗである。底面は検出面より深さ約0.2m、ほぼフラットである。埋土は、粘性のある黒色土である。出土遺物は、18世紀代の施釉陶器、土師皿で、半割されており、遺構の形態から墓坑と考えられる。

８．時期不明の遺構

大形土坑

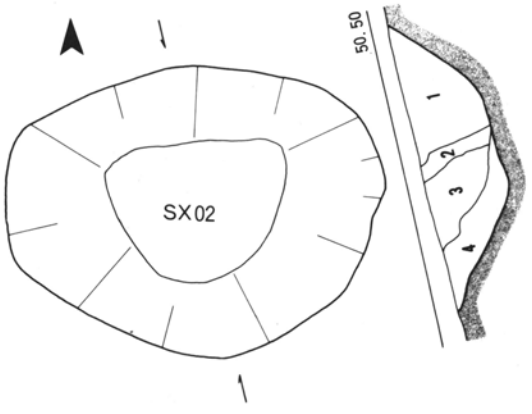
Ｃ区の中央部から北半にかけて、形状、埋土の特徴から同時期に掘削されたと推定される大形の土坑が７基検出された。遺構に伴う遺物が検出されず、埋土の特徴からも時期を特定しえない。共通した特徴として、平面形は長径３～５m程度の不整円形、検出された基盤面を深さ0.6～1.1m程度掘り込んでいる。埋土は、黒色土に基盤の砂礫土が一定方向から流れ込んだ状況である。掘削した砂礫土を、土坑に近接した場所に積み上げた状態で土坑の埋土が形成されたと考えられる。

ＳＸ01　Ｃ区北東隅に位置する。平面形は南北方向に長い3.5×3.0mの円形。深さ1.2m。東方向より、砂礫土流入。

ＳＸ02（第24図）　Ｃ区北部中央に位置する。東西に長く、5.0×3.8mの楕円形。深さ1.1m。南方向より砂礫土流入。

ＳＸ03　Ｃ区北部西壁部分に位置し、西半が発掘外で現存径4.1m、深さ1.1m。南方向より砂礫土が流入したと推定される。

ＳＸ04　Ｃ区北部西壁部分に位置し、西半は発掘外である。現存径2.6m、深さ0.6m。南西方向より砂礫土が流入したと推定される。



1．黒　色　土
2．黒色土・黄褐色土
3．明黄褐色砂礫土
4．黒　色　土

第25図　ＳＸ02　1/100

ＳＸ05　Ｃ区中央部東壁部分に位置し、東半が発掘区外である。現存径4.0m、深さ1.2m、北西方向より砂礫土が流入したと推定される。

ＳＸ06　Ｃ区中央部南西部に位置する。平面形は南北に長く、4.3×3.8mの不整円形、深さ1.1mを測る。西方向より砂礫土が流入している。

ＳＸ07　Ｃ区中央部西側に位置する。平面形は東西に若干長い2.4×2.0mの不整円形、深さ0.7mを測る。大形土坑の中で最小である。西方向より砂礫土が流入している。

溝

Ａ区で、畑作・水田耕作に伴う溝状の遺構が検出された。出土遺物、埋土からは時期を特定しえない。

ＳＤ08～12　A_1区の南半部で検出された同時期と考えられる溝群。ＳＤ09～11は、溝の深い部分のみ検出され、西壁、南壁のセクションから、ＳＤ08･12と同じく北西・南東方向に続くことが確認される。検出面で、最大幅はＳＤ08－2.0m、ＳＤ09－0.3m、ＳＤ10－0.3m、ＳＤ11－0.4m、ＳＤ12－0.8m、深さは、ＳＤ08が、0.6～0.7m、ＳＤ09～12が、0.2～0.3mである。埋土は、砂礫を含む黒色土である。

ＳＤ14　A_2・A_4区の南部で検出された南東方向の溝。幅2.0～2.3m、最深1.1mで、A_2区内より西は検出されない。A_4区の現水田の南縁の一部と直線状に連続することから、現在の水田の耕地整理以前の用水路と推定される。

ＳＤ16　A_2区の北東方向の溝。幅1.2m、深さ0.2m、埋土は黒色土。田面との関連から、中世以前の時期と推定される。

９．自然河道

ＮＲ01・02　A_2・A_4区の北半部分の旧田面下の基盤直上面に黄白色粗砂が最大約50cmの厚さで堆積し、幅・深さが一定しない溝状の凹地に流水の形跡があることから、自然河道と推定される。野田川に対して平行で、西方向から東方向へ流下する。流路は、A_2区西半では南東方向、A_2区東半からA_4区は東方向に近くなり、A_4区で分流する。検出面で最大幅12m、砂層の厚さはA_2・A_4の境界部で最も厚く、全体では10～20cm程度である。砂層中から弥生時代中期と後期の土器が出土している。中世の水田造成以前の野田川河谷の小河川の流路跡と考えられる。　（酒井俊彦）

（注）遺構番号について

調査区が別れるため、調査時の遺構番号が重複することなどから、本報告書では以下のように遺構番号を統一している。

建物　調査時の２桁番に　Ｃ区「0」Ｂ区「1」Ｘ「2」A_1区「3」を各々３桁に加える。

C区ＳＢ01　→　ＳＢ001

土坑　調査時の２桁番に　C区「0」B区「1」X区「2」A_3区「3」A_4区「4」を３桁に加える。

C区ＳＫ01　→　ＳＫ001

柱穴　調査時はPitとしたが、土坑（ＳＫ）とし　C区「0」B区「1」X区「2」A_1区「3」A_4「4」を４桁に加える。

C区P01　→　ＳＫ0001

溝　　溝（ＳＤ）は　第２表を参照

遺構番号	調 査 区	調査番号
ＳＤ01	X	ＳＤ01
ＳＤ02	C	ＳＤ15
ＳＤ03	C	ＳＤ17
ＳＤ04	B	ＳＤ04
ＳＤ05	C	ＳＤ18
ＳＤ06	C	ＳＤ20
ＳＤ07	C	ＳＤ21
ＳＤ08	A_1	ＳＤ01
ＳＤ09	A_1	ＳＤ03
ＳＤ10	A_1	ＳＤ04
ＳＤ11	A_1	ＳＤ05
ＳＤ12	A_1	ＳＤ02
ＳＤ13	A_3	ＳＤ03
ＳＤ14	A_2 A_4	ＳＤ01 ＳＤ01'
ＳＤ15	A_2 A_4	ＳＤ03 ＳＤ02
ＳＤ16	A_2	ＳＤ04

第２表　溝遺構番号

第Ⅲ章　遺　物

調査区Ｂ・Ｃ・Ｘ・A_1・A_3の表土中の黒色土は、洪積世に形成された土壌であり、遺構の掘り込み面は現地表とほぼ同一である。ゆえに明確な遺物包含層は存在しない。遺構の大部分を占めるⅡ・Ⅲ期の竪穴住居等の集中するＢ・Ｃ区で、現表土から明黄褐色土の基盤直上面まで深さ0.4～0.8mであり、基盤面への遺構の掘り込みは浅く、以後の耕作等の人為的攪乱のため遺物の遺存状態は良くない。

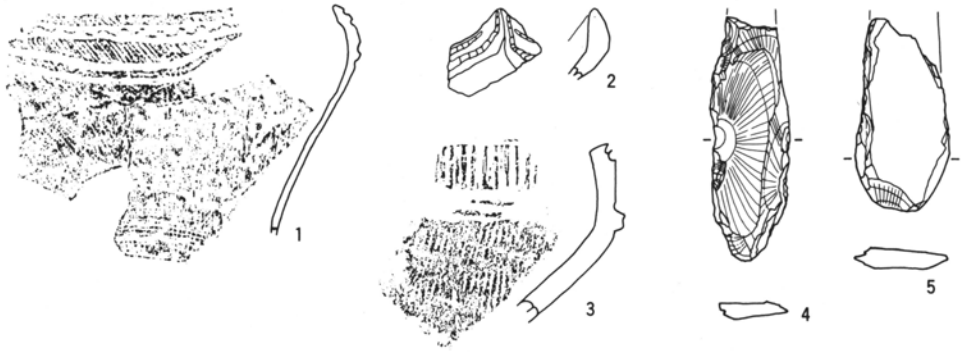
遺物の出土量は、遺構に比例し、Ⅱ・Ⅲ期が大きな割合を占める。Ⅱ期は、竪穴住居跡と溝、Ⅲ期は竪穴住居跡内からの資料が大部分である。他の時期は、遺構が希薄であり、遺構内からの出土量及び遺構外からの検出量もⅡ・Ⅲ期に比して少量である。以下、各時期について、遺構毎に記述していく。

１．Ⅰ期の遺物

縄文時代中期及び、それ以前の時期の土器・石器が少量出土しているが、図示できる個体はわずかである。(第26図)

ＳＫ1044（第26図）　土器１個体片が出土した。１は、口縁が内湾し、波状をなす深鉢の口頸部である。地紋は半截竹管によって口縁部は斜方向、頸部は縦方向、肩部は格子目状に施される。口縁部に平行して、細かい波状帯をつくる沈線及びその下部に沈線２条による連弧紋が施され、器壁は薄く砂粒を多く含む。岐阜県地方を中心とする中期の中富式と考えられる。

２～５は遺構検出時に出土した。２は、深鉢の波状口縁の先端部で、刺突による２条の沈線を口縁部に廻らす。中期と考えられる。３は深鉢で、口縁部に長方形の凸帯に囲まれた内部に縦沈線を充填する櫛歯状紋を配し、頸部の地紋に撚糸紋を施す。中部高地の中期



第26図　Ⅰ期の遺物　1/4

後葉の曽利式に類似する。４・５は、いわゆる打製石斧で、いずれも欠損している。石質は、堆積岩系である。

２．Ⅱ期の遺物

弥生時代中期と後期の遺物が検出された。中期の遺構は希薄で、遺構外からの出土も少量である。下位段丘上のA_1・A_3区及び、A_4区に比較的集中する。後期は、Ｂ・Ｃ区の竪穴住居跡及び溝とＸ区の溝埋土中の出土遺物が主要なものである。遺構の集中するＢ区では遺構検出時に遺構外から比較的多量に出土したのに対して、Ａ区では旧自然河道から極少量検出されたのみである。

(1) 中期

ＳＫ310（第27図）　遺構に伴う唯一の例である。12は、壺底部で内外面ヘラ磨きを施され、この時期に特徴的な暗灰色を呈する。胎土は、粗砂を多く含む。

ＮＲ01（第27図）　10・11は斜格子文の施文後、横沈線を廻らす細頸壺。A_4区の旧道河道の河底直上の粗砂中より検出。流水による磨滅は認められない。

６～９は、時期不明のＳＤ13の埋土中より出土。６は、細頸壺で肩部に櫛描文が施される。７・８は、斜格子文をもつ壺肩部。９は台付甕の脚部で、他の土器より新しい時期に属す。

(2) 後期

Ｂ区とＣ区南部及びＸ区で検出された遺構内出土の土器が主要部分をなす。Ｂ・Ｃ区については比較的遺存状態の良好な竪穴住居跡と溝埋土中より検出された土器が主体となる。出土遺物は、後期前半と後期後半の２時期に分けられる。

記述の繁雑さを避けるため、主要器種について分類を行う。

壺　形態により以下のように分類する。

A_1　広口壺　口縁が強く外反し、端部を下方に拡げ、幅広い口唇部をつくる。

A_2　広口壺　A_1より口縁の外反の度合いは弱く、口唇部の面も顕著でない。球胴形で最大径が胴下半にある。

Ｂ　小型広口壺　口縁部が強く外反し、口唇部に幅広い面を有す。

Ｃ　小型広口壺　口縁部は直線的に外反し、口唇部に面を有さない。

Ｄ　短頸壺　口頸部が大きく開き、やや内湾ぎみに開く口縁部を有す。

Ｅ　長頸壺　球形の胴部にわずかに内湾する口縁部を有する小型の壺である。

甕　台付甕について、口縁部の形態を中心に以下のように分類する。

Ａ　単純に外反する口縁部を有するもので、３類に分けられる。

A_1　胴最大径が、胴上半～中位にあり球形に近い形態。口唇部に刻目を有さない。

A_2　頸部のくびれが穏やかで肩部の張りが弱く、長胴形に近い形態。口唇部に刻目

を有さない。

A_3　胴最大径が、A_1と同じく胴上半から中位にあり、口唇部に刻目を有する。

B　口縁部が、比較的長く、単純に直線的に外反するもので、2類に分けられる。

B_1　頸部に強いくびれを有し、口唇上端を強くなでるもの。

B_2　頸部のくびれが弱く、胴最大径が下半にあるもの。

C　口縁部外側上半の外反の角度が穏やかで、受口状的な外形をなすもので2類にわけられる。

C_1　口唇部に刻目を有しない。

C_2　口唇部に刻目を有する。

D　口縁部が屈曲し、口唇部がわずかに外側に張り「S字」状になる。

E　小型台付甕で、櫛描波状文を口縁部から胴部に施す。

高杯　杯部と脚部の形態を中心に以下のように分類する。

A　杯部は浅く稜を有する皿状で、脚部は長く大きく開く。

B　杯部は椀状で、脚部は大きく開く。

C　杯部は側面逆台形で、脚部は内湾しながら外開きする。

D　杯部は半球形のもので、脚部の形態から2類に分けられる。

D_1　内湾しながら外開きする脚部のもの

D_2　単純に大きく外開きする脚部のもの

SB114（第28・29図）　床面上及び埋土中より甕・高杯・鉢が出土したが、壺類は図示し得る個体は検出されていない。甕A_1類（22・23・25～27）A_2類（24）E類（21）がある。23・25は球形に近い胴部、27は口頸部が大きく開く形態である。調整については、共通して口縁部内外面横ナデ調整。内面はハケ調整後、丁寧に調整痕をなで消すが、27のみは板ナデ痕を上半に残す。外面は、23はハケ調整後丁寧になで消し、26・27は全面に、25は肩部に調整痕を残す。24は口縁部は急角度に外反し、最大径は胴下部にあり、ハケ調整後、内外面ともなで消す。28はA類の脚部で、内面板ナデ、外面ハケ調整痕を残す。21は、小形の甕であるが、煤が付着し、実用品と考えられる。胴上半以外は、調整痕はなで消される。口唇部に刻目を有し口縁部に2単位、肩部に4単位の櫛描波状文が施される。波状文は左回り、施文の休止が3回認められる。器形は当地域のものであるが、櫛描文については長野県地方の影響が認められる。高杯A類（15・17・18）B類（13・14・16・19）がある。A類はいずれも杯部の全形は不明である。外面縦方向ヘラ磨き脚部内面は、ハケ調整後ヨコナデを施す。15・18は、4～5条の沈線帯を脚上半に施す。13は、杯部下半のみヘラ磨き、上半・内面は横ナデ、脚部にハケ調整痕を残し、粗製である。14は、内外面ヘラ

磨き、脚部に沈線帯を有し、外面及び杯部内面丹彩である。口縁部が、わずかに外反し、いわゆるブランデーグラス型に近い形態である。16・19は、外面縦方向ヘラ磨きで、19の沈線・横方向羽状文、斜線文はヘラ状工具による。20は鉢で、口縁部がわずか外反し、丸底に近い形態である。内外面は、ヘラ磨きとナデ調整である。胎土は細礫を多く含み、粗い。以上、後期前半の時期に属す。

ＳＫ115（第29図）　ＳＢ101内の小土坑より、甕A_1類（32）、高杯Ａ類（31）Ｂ類（29・30）が出土する。甕は、外面ハケ調整、内面板ナデ調整で、下半はなで消し、口縁部は横ナデである。29は、脚部に櫛描直線文とヘラ刺突、口縁部に沈線と刺突、30は櫛描直線文を有する。いずれも外面縦方向ヘラ磨きである。31は、Ａ類口縁部で、外側櫛描波状文を施す。後期前半に属す。

ＳＢ110（第30・31図）　竪穴住居跡内の埋土中より出土した土器群で、壺・甕・高杯・鉢がある。壺（33～37）は、出土量が少なくＡ類（37）Ｂ類（36）Ｃ類（35）Ｅ類（33・34）がある。33は、ほぼ完形に近く、外面摩耗し調整不明、内面はナデ調整である。34は底部近くに焼成後の穿孔がある。36は、外面ハケ調整の形跡が残る。37は、外面横方向ヘラ磨きである。甕はA_2類（53・56・57・60）B_1類（55・58・59）C_1類（54）がある。外面は斜方向、内面は横方向のハケ調整を施す。口縁部はハケ調整後に横ナデをする。内面はハケ調整後ナデを行い、調整痕が残らないもの（54・55・59・60）と部分的にしか残らないものが多い。54は外面もハケ調整痕が残らない。58・59は比較的長い口縁部で、端部上面を強くなでて面取りをする。60は小形の甕の全形のわかる例で脚部は内外面ナデ調整で器壁が薄い成形である。61～68は、脚部で、61～63は、単純に外開きする形態、64～68は裾部で内湾し、接地面が幅広い形態である。外面はハケ調整、内面は横ナデを行う。高杯は、Ｃ類（40～46）とD_2類（39・47・48・50～52）がある。40は、全形のわかる例で内外面縦方向ヘラ磨き、脚裾部は横方向ヘラ磨きである。脚の上半にヘラ沈線を廻らし、内面横ナデ調整である。40～42は、口縁端部内面に面取りが行われる。43～46はＣ類の脚部で、46以外は上半部にヘラ沈線を廻らし、外面ヘラ磨き、内面ナデ調整である。D_2類の全形の判明する個体はない。39は、内面の口縁端部に面取りがある。脚部（47・48・50～52）は外面ヘラ磨き、内面ハケ調整後ナデ、裾部に端面を形成する。49は、甕の脚部の形態であるが、円形透かしがあり外面ヘラ磨きであるため高杯の脚と考えられる。38は鉢で、底部が突出し、壺の胴下半部の形態である。外面はハケ調整後ナデ調整である。69は甑で、底部に焼成前の穿孔がある。上半が欠損する。内面に押圧痕が残りナデ調整、外面はハケ調整後部分的にヘラ削りを行う。粘土の輪積み痕が残り、粗雑な成形である。以上、後期後半に属す。

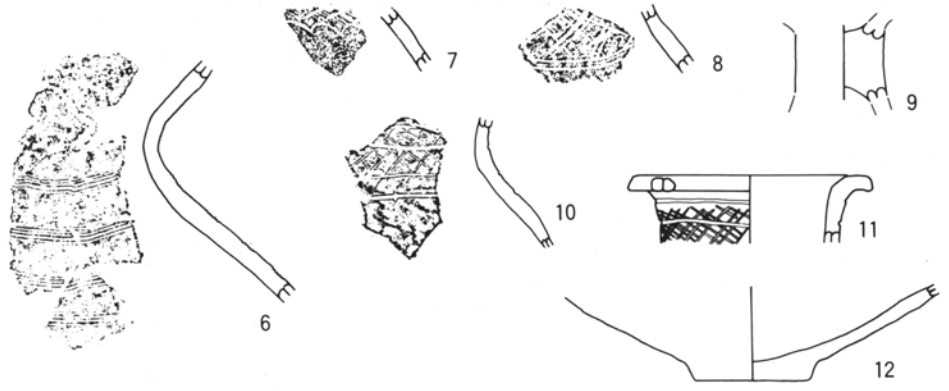
ＳＢ014（第32図　70～73）　壺A_2類（71）Ｂ類（70）甕C_1類（73）C_3類（72）がある。70

は、口唇部に櫛原体による刺突と3組7単位の棒状浮文がある。肩部には、櫛描直線文と簾状文状の櫛描文が施され、下端には櫛原体の刺突文がある。胴中位から底部は斜方向のヘラ磨きである。71は、胴下半ヘラ磨き、中位にハケ調整痕残す。内面はハケ調整後にナデを施す。72・73は、成形、形態とも近似し、内外面とも胴下部は縦方向、上・中位は横方向のハケ調整を施す。口縁部横ナデである。以上は後期後半に属す。

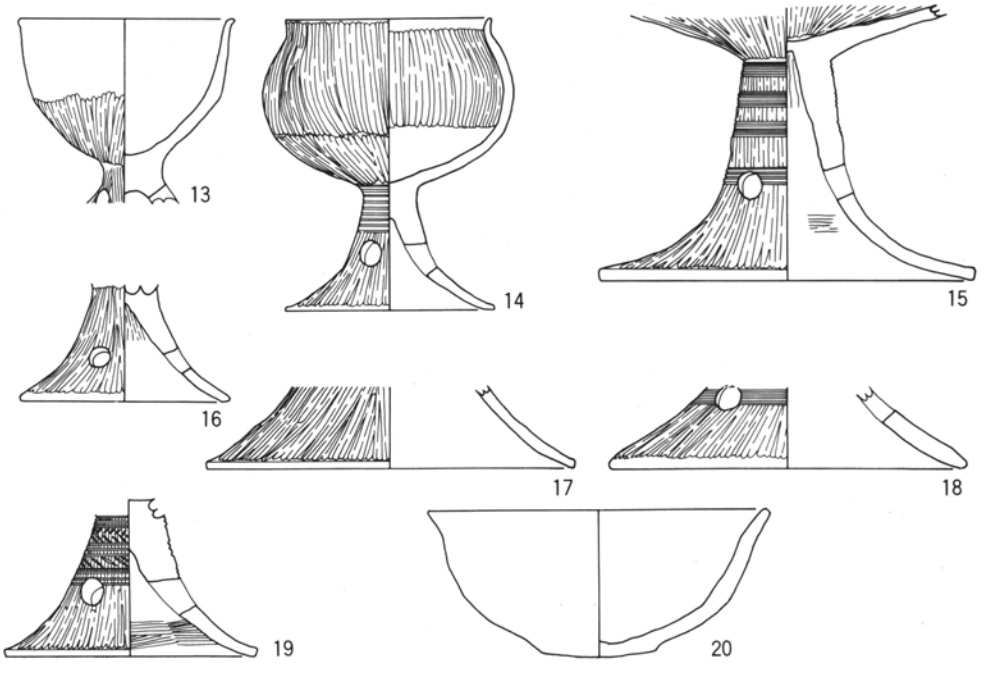
ＳＤ04（第32図74～81・33図・34図）　ＳＤ04の東部（第7図）の埋土中より一括検出された。壺（74～81）高杯（82～92）甕（93～107）がある。壺の割合は少なく、図示し得る個体はわずかである。Ｂ類（75・76）Ｃ類（77）がある。76は、肩部に櫛描直線文があり、その原体で口唇部に刺突している。77は外面ハケ調整後、ナデ調整を施す。74は、ミニチュア品で、胴部ヘラ磨きを行う。78～81は底部で、類別できない。高杯は、Ｃ類（82・83・91・92）Ｄ類（84～90）がある。Ｃ類の杯部82・83は内外面縦方向ヘラ磨き、82は口縁内面端部に面取りがある。脚部は、外面縦方向ヘラ磨きで、91は裾部は横方向の磨きを持つ。内面にハケ調整痕が残る。Ｄ類は、D_1類（86・90）D_2類（87～89）不明（84・85）がある。86は内外面縦方向ヘラ磨き、口縁部外面は横方向に幅広くヘラ磨きをする。90は、内湾が弱いが、86と同じく幅広い下端面で裾部横方向ヘラ磨きを施す。D_2類の脚裾部の外反は弱く、端面を持たない。85～87は脚部にヘラ沈線を廻らす。甕はＡ類・Ｂ類・Ｃ類・Ｄ類がある。Ａ類はA_1類（99）・A_2類（93・101）・A_3類（94・100）がある。93は内面ハケ調整、外面は胴下半ヘラ削り調整で小形の甕と考えられるが、他器種の可能性がある。Ｂ類は、B_1類（97）B_2類（98・104）がある。104は口縁がやや外に湾曲するが3個体とも口縁が比較的薄手の成形で、Ａ・Ｃ類より長いという共通した特徴を持つ。Ｃ類はC_1（96・103）とC_2（102）がある。3個体とも長胴形の器形である。これらの甕は外面は基本的にハケ調整痕を残すが、内面はナデ調整によって消す（95・97・98・99・100）か、部分的にしか残存しない（104）ものが多い。また、ハケ調整の方向は、縦あるいは斜方向を基本にする個体（100・103・104）横方向を基本にする個体（94・96・98・102）がある。99・101は、胴中～下位が縦方向から斜方向、上位が横方向近くにハケ調整が行われる。口縁部は基本的に横ナデ調整が施される。105は、いわゆるＳ字状口縁の甕に類似した形態である。口縁部は、屈曲して稜がつき、口唇部がわずか外に張り出し断面はＳ字状に類似する。胴部は球形に近く、胴部に斜方向のハケ調整を行い、口縁上半と内面はナデ消す。頸部直下に、ヘラ沈線を廻らし、その下と口縁の稜線上にヘラ刺突を廻らす。106・107は脚部で、内湾しながら外開きし、接地面が広い形態である。

ＳＤ01（第35図）　Ｘ区西壁面の、埋土部分より一括出土した。壺は、A_1類（111）A_2類（113）B_1類（112）Ｃ類（109・110）Ｄ類（114）Ｅ類（108）がある。108は、Ｅ類頸部で内外面

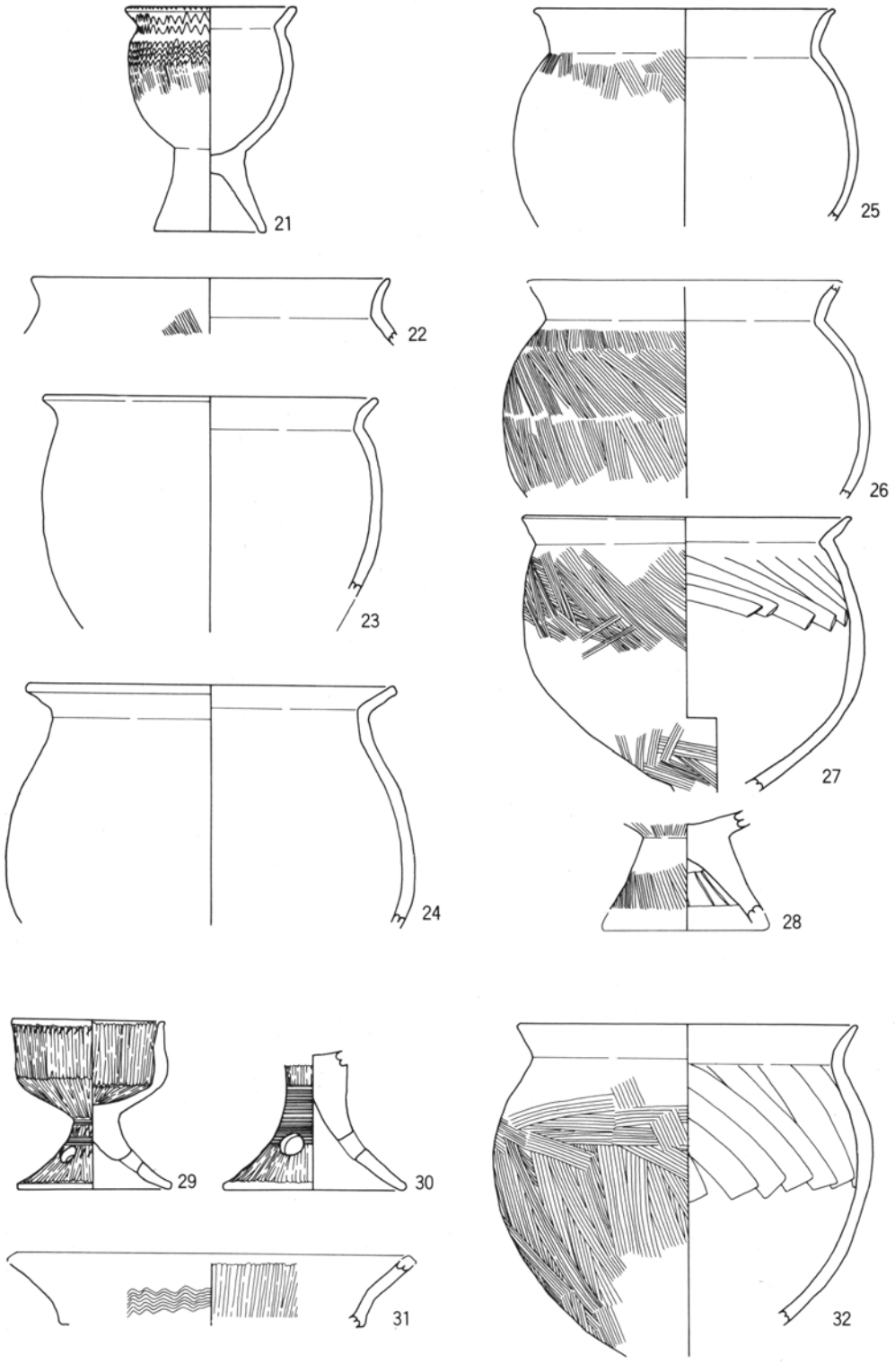
ヘラ磨きである。110は、胴部内面を、指でナデ上げる調整を行う。111は口縁外面に粘土帯を貼り付け、幅広い口唇部をつくり、頸部に凸帯を廻らし、外面にハケ調整痕を残す。112は、外面にハケ調整痕を残し、内面はナデ調整で指圧痕がある。113は、外面は胴上位から中位のみヘラ磨きを行い、口頸部・胴下半にハケ調整痕がある。内面も同様に胴中上位のみヘラ磨きが行われる。114は、口頸部が大きく開く形態で、内面胴部は横ナデ調整、外面及び口縁部内面は横方向の磨きである。口縁部はやや屈曲し、受口的な形態である。



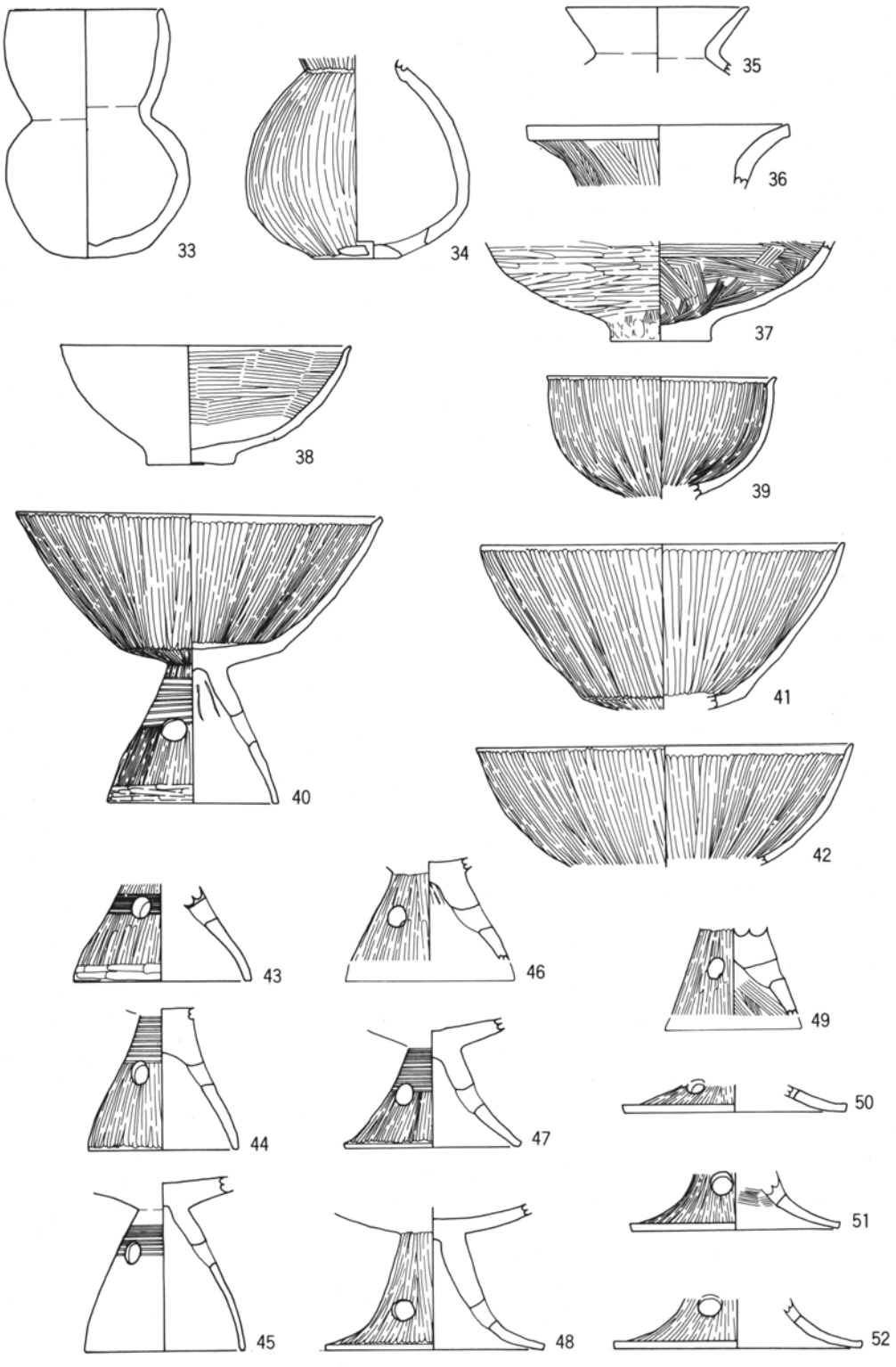
第27図　II期の遺物（中期）　1/4



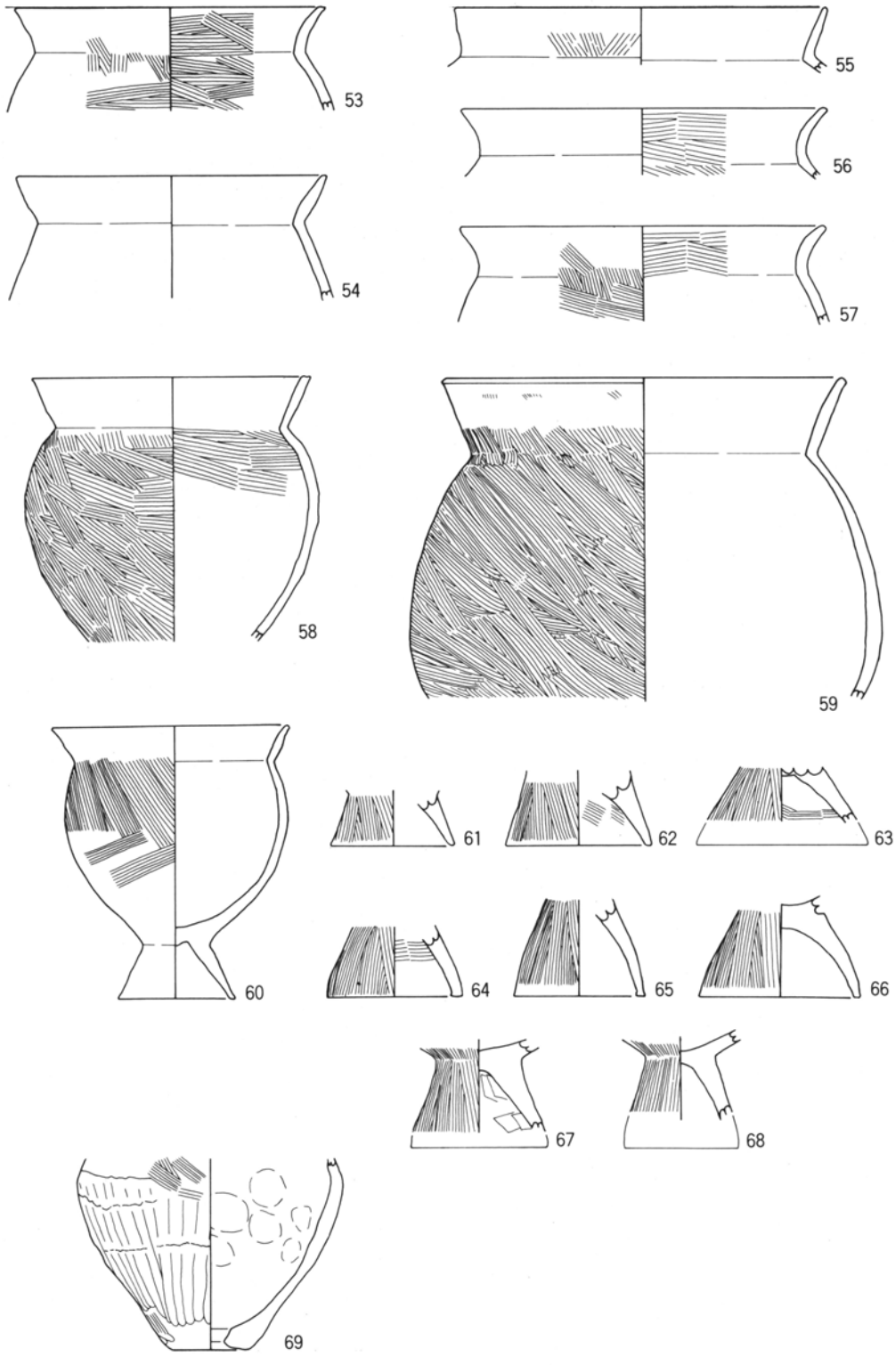
第28図　II期の遺物　SB114　1/4



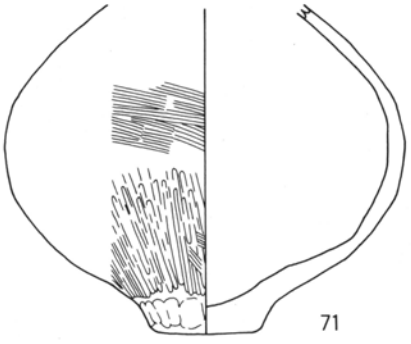
第29図　II期の遺物　ＳＢ114・ＳＫ115　1/4

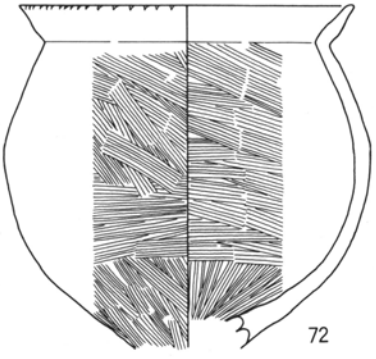


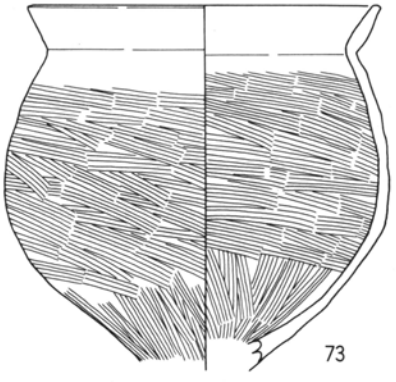
第30図　II期の遺物　ＳＢ110　1/4

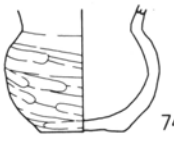


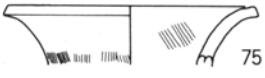
第31図　II期の遺物　ＳＢ110　1/4

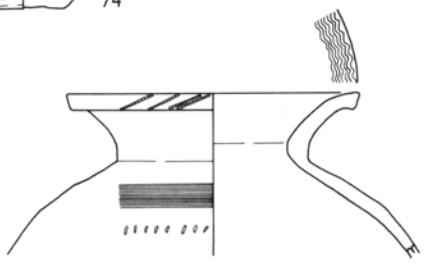


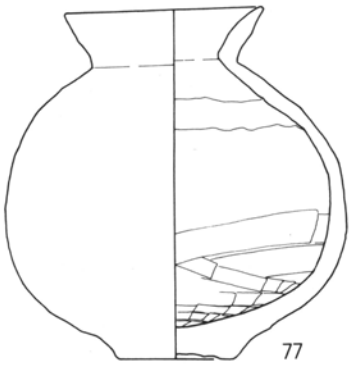


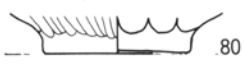




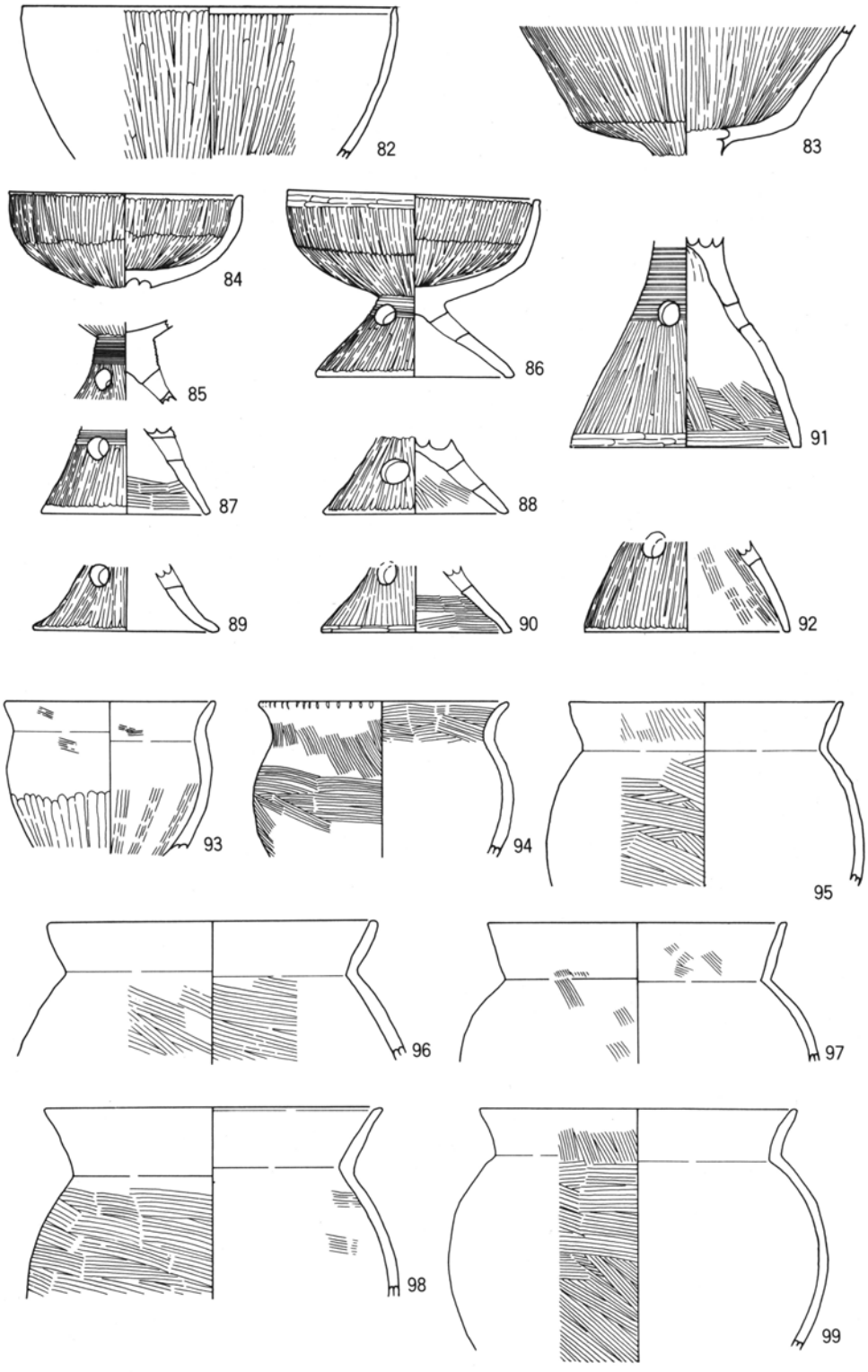




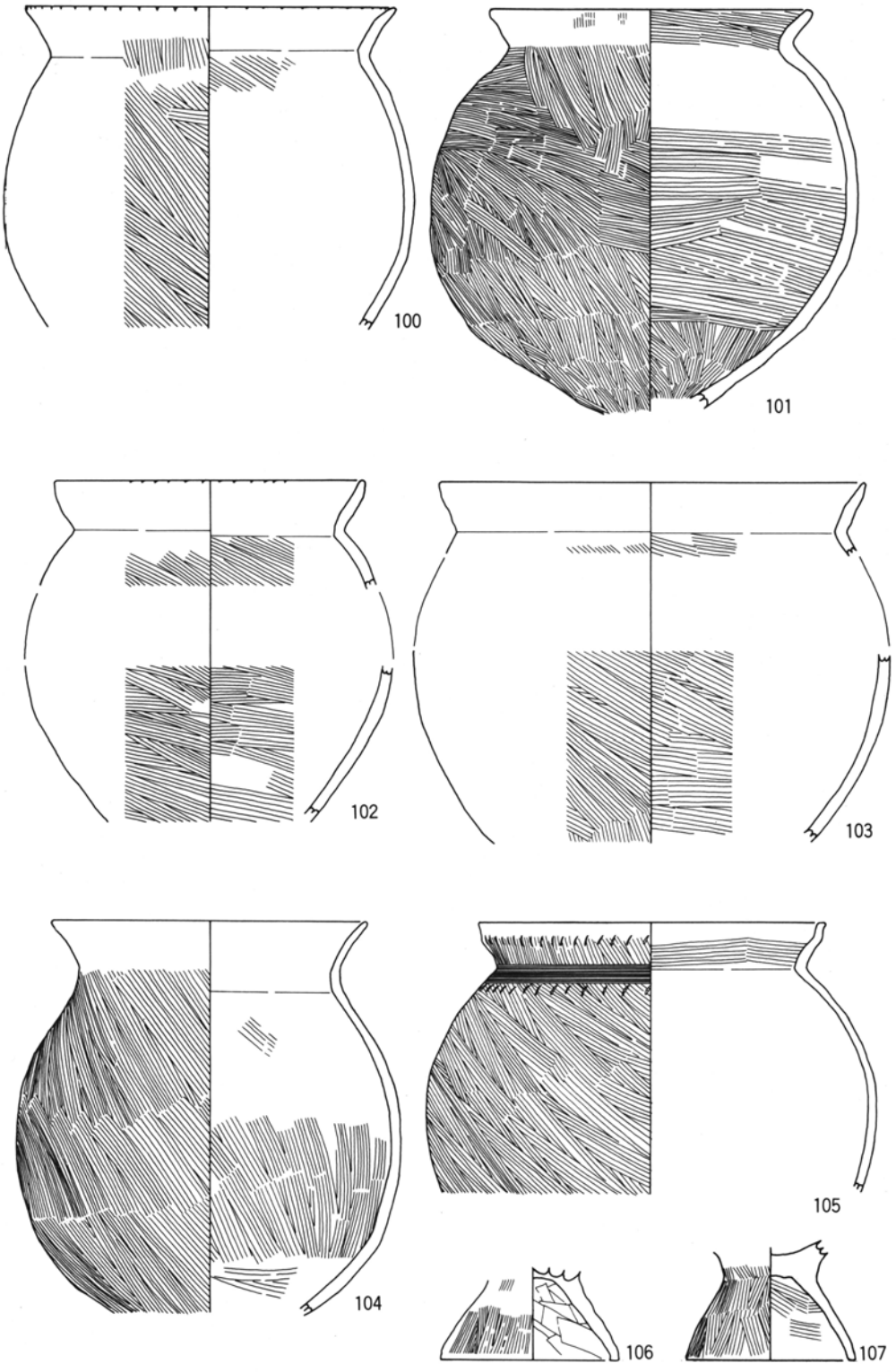




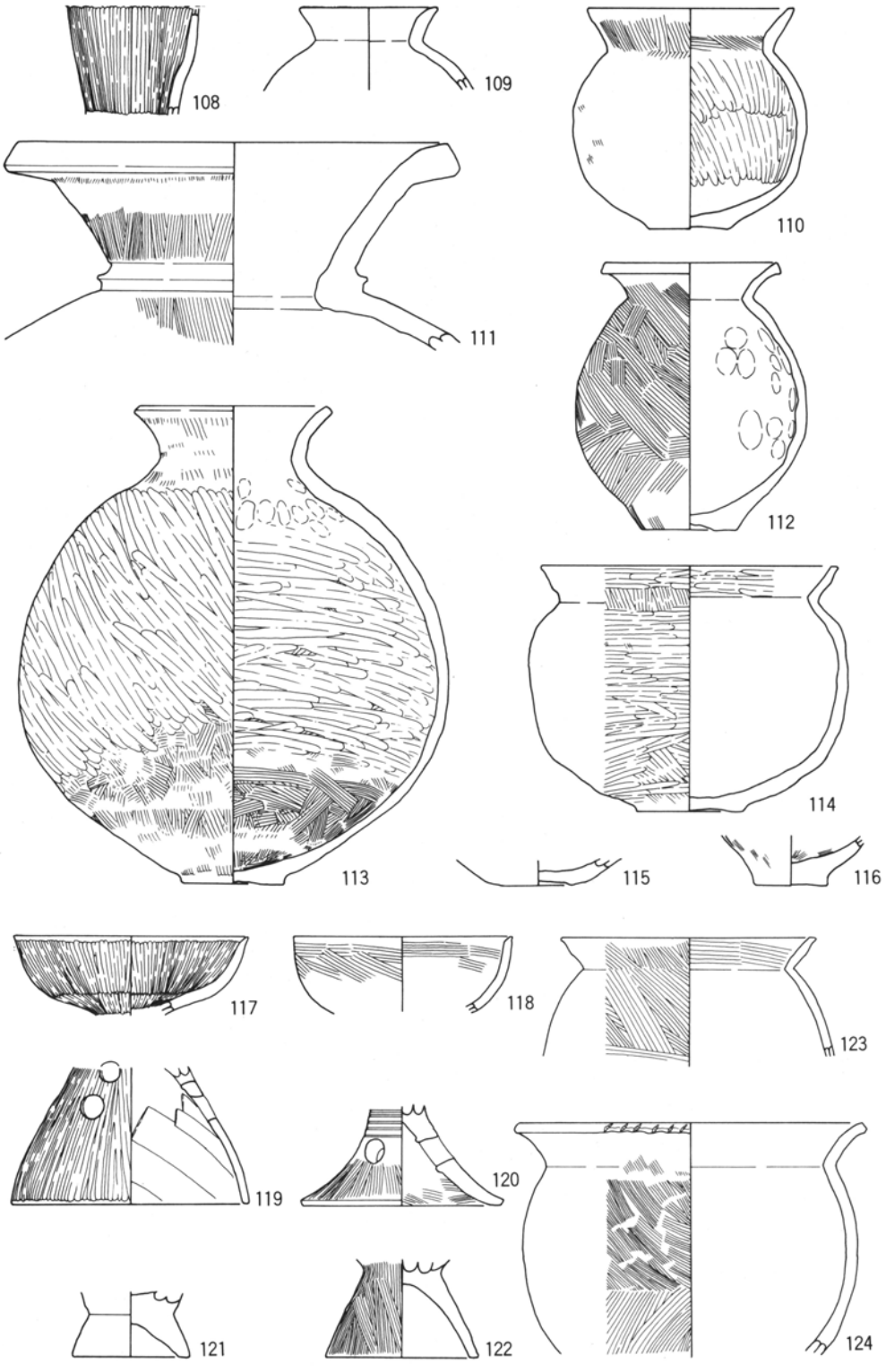
第32図　II期の遺物　ＳＢ014・ＳＤ04



第33図　II期の遺物　ＳＤ04　1/4



第34図　II期の遺物　ＳＤ04　1/4



第35図　II期の遺物　ＳＤ01　1/4

甕はA_2類（123）A_3類（124）がある。123は、ハケ調整後胴部内面ナデ調整。124は、ハケ調整後内面と口縁部にナデ調整を行う。121・122は脚部で、内湾せず単純に開く。高杯は、C類（119）　D類（117・118）　D_2類（120）がある。119は、円形透かしが2個3単位ある。内面は板ナデ調整である。117・118は脚部がなく、類別できない。口縁内面端部に面取りがあり、117は内外面縦方向ヘラ磨き、118は磨きが行われず、ハケ調整痕を残す。120は、裾部に端面がある。内外面とも磨きが行われず、ハケ調整痕が残る。

ＳＤ04・01の土器は、後期後半に属すと考えられる。

3．Ⅲ期の遺物

Ⅲ期は、Ⅲ－1期（8世紀後半～9世紀前半　奈良時代後半から平安時代初期）とⅢ－2期（9世紀後半～10世紀　平安時代前半）に分かれる。竪穴住居跡内より出土した須恵器・灰釉陶器・土師器が主体である。

須恵器の蓋杯について記述の繁雑さを避けるため以下のように分類する。

蓋　A　天井頂部に鈕を有するもの。口縁部はくの字形に折り返し、天井部に回転ヘラ削り調整が施される。

　　B　天井頂部に鈕を有さないもの。頂部が、回転ヘラ削り調整あるいは未調整で回転糸切り痕を残し、平坦部となる。

杯　A　高台を有するもの。底部と体部との境が屈曲して明瞭な稜をなし、体部は直線的に立ち上がる。

　　B　高台を有し、体部は底部から緩やかに開くもの。

　　C　高台を有さないもので、腰から底部には回転ヘラ削り調整が施され腰部に明瞭な稜をつくり出す。

　　D　高台を有さないもので体部は底部から緩やかに外に開くもの。

また、土師器の甕について、以下のように分類する。

　A　口縁が逆Ｌ字状に屈曲し、長胴形の形態で、内外面をナデ調整する。

　B　内外面をハケ調整し、調整痕を残す甕で器形によって以下のように分けられる。

　　B_1　球胴形で、口縁部はほぼ直立する。

　　B_2　長胴形で、口縁部は単純に外反する。

　　B_3　長胴形で、頸部がくびれ、口縁が大きく外反する。

　C　平底に近い形態で、一対の把手を有する。内外面ハケ調整が施される。

(1)　Ⅲ－1期

ＳＢ001（第36図）　土師器甕B_1類（125）Ｃ類（126）が床面上より一括出土した。125はわずか外反する短い口縁を有する形態である。内外面ハケ調整後口縁部横ナデ。126は、大

きく外反する口縁を有する口縁の内外面は横ナデ調整。把手は、手の押圧によって成形する。胴下半に、接触のため器壁が剝離する部分があり、煤が付着する。時期は8世紀後半と考えられる。

SB002（第36図）　須恵器蓋A類（127）　土師器甕A類（128）がある。8世紀後半の時期と考えられる。

SB004（第36図）　須恵器蓋A類（129）杯A類（132）C類（131）　土師器甕A類（130）が出土した。0－10号窯式に併行する時期である。

SB005（第36図）　133は肩部に稜を有する須恵器鉢である。

SB006（第37図）　須恵器杯C類（135）D類（134）　土師器甕A類（136～138）が出土。137・138は、口縁部が比較的大形のつくりである。138は、内面横方向ハケ調整、外面縦方向ハケ調整、調整後ナデ消す。口縁部横ナデを施す。8世紀後半の時期である。

SB007（第37図）　須恵器蓋A類（139・140）　土師器甕A類（141・142）が出土。いずれも破片で全形は不明。8世紀後半と考えられる。

SB009（第37図）　土師器甕A類（143・144）があり、8世紀代と考えられる。

SB011（第37図）　須恵器の蓋A類（145～147）杯A類（148～150）D類（151）甕口縁部（152）　土師器甕A類（153）が出土した。145・147は、口縁折り返し部を強く回転ナデ調整する特徴を持つ。151は、底面回転ヘラ削り調整、内外面に火だすき痕が認められる。0－10号窯式に併行する時期と考えられる。

SB013（第37図）　須恵器杯A類（154）　土師器甕A類（155）がある。155は、外面横方向、内面縦方向のハケ調整で、ナデ調整が弱い。8世紀後半と考えられる。

SB015（第37図）　須恵器杯A類（156）　土師器甕A類（157）が出土した。

SB021（第38図）　須恵器蓋A類（158）杯C類（159・160）D類（161）　土師器甕A類（162～166）が出土。158は、偏平な鈕で墨書がある。159は、底部は腰まで回転ヘラ削り調整、中心部に回転糸切り痕を残す。160は、底部中心部に回転糸切り痕を残し、外縁部回転ナデ調整である。161は、底部未調整で回転糸切り痕を残す。甕は、口径20cm以下の種類（161・162）と、口径30cm弱の種類（164～166）の2種がある。全個体ナデ調整を施すが、ハケ調整痕が残るもの（164・166）がある。

SB026（第38図）　須恵器蓋A類（167・168）杯A類（169）皿（170）盤（171）甕（172）土師器甕（173・174）が出土した。167は、中央が突出する鈕を有するもので、焼成やや不良。169は体部が高く立ち上がる器形で、焼成不良である。171は無台の盤である。土師器甕は、内外面ハケ調整後ナデ調整である。0－10号窯式に併行する時期と考えられる。

SB109（第38図）　須恵器蓋A類（175・176）杯C類（177）盤（178）　土師器甕A類（179）

が床面及び土坑より出土した。175は、中心部が突出する鈕をもつ小形の蓋である。177は、底面は腰部まで回転ヘラ削り。179は、内外面縦方向ハケ調整後ナデ調整である。0－10号窯式に併行の時期である。

SB115（第39図）　須恵器杯D類（180）　土師器甕B_1類（183・185）B_2類（184）B_3類（182）C類（181）が出土した。180は口径が広い無台の杯と考えられる。181は、甕の把手で、内面板ナデ、把手部は押圧による成形、外面ハケ調整である。182は、胴下半が欠損しているが、丸底になると考えられる。胴部外面は縦方向の長いハケ調整。内面は横方向の短いハケ調整。口頸部に幅広く横ナデを施す。183は、丸底になると考えられ、口縁部がほぼ直立する。内面は強い板ナデ、外面ハケ調整。厚い器壁で把手を有する可能性がある。184は、胴部に長い縦方向のハケ調整。口縁部内面に横方向のハケ調整が施される。胴部内面は未調整で、粘土輪積み痕が残る。185は球形に近い形態の胴部に、わずかに外反する短い口縁を有する甕で、内外面ハケ調整後、胴部内面ナデ調整。183と類似した厚い器壁である。8世紀後半の時期と考えられる。

SB135（第40図）　須恵器杯D類（186）　土師器甕B_1類（187）B_2類（188・189）が出土した。187は、胴部が欠損するが甕B_1類と考えられる。内外面ハケ調整で、口縁部には横ナデ調整を施さない。188は、外面縦方向ハケ調整で胴下半ナデ調整、内面横方向ハケ調整である。口縁部横ナデを施す。189は、内外面ハケ調整、口縁部横ナデである。8世紀後半の時期と考えられる。

SB136（第40図）　土師器甕A類（190）がある。外面にハケ調整痕を残す。8世紀代と考えられる。

SB201（第40図）　須恵器蓋A類（191・192）杯C類（194）D類（193）皿（195）が出土した。191は、中央部分が突出する鈕である。192は、偏平な鈕を有し、砂粒・細礫を多く含む胎土である。193～195は底部回転ヘラ削り調整である。8世紀後半の時期と考えられる。

SB203（第40図）　須恵器蓋A類（196）杯D類（197）がある。197は、底部回転糸切り痕を残し未調整である。8世紀後半と考えられる。

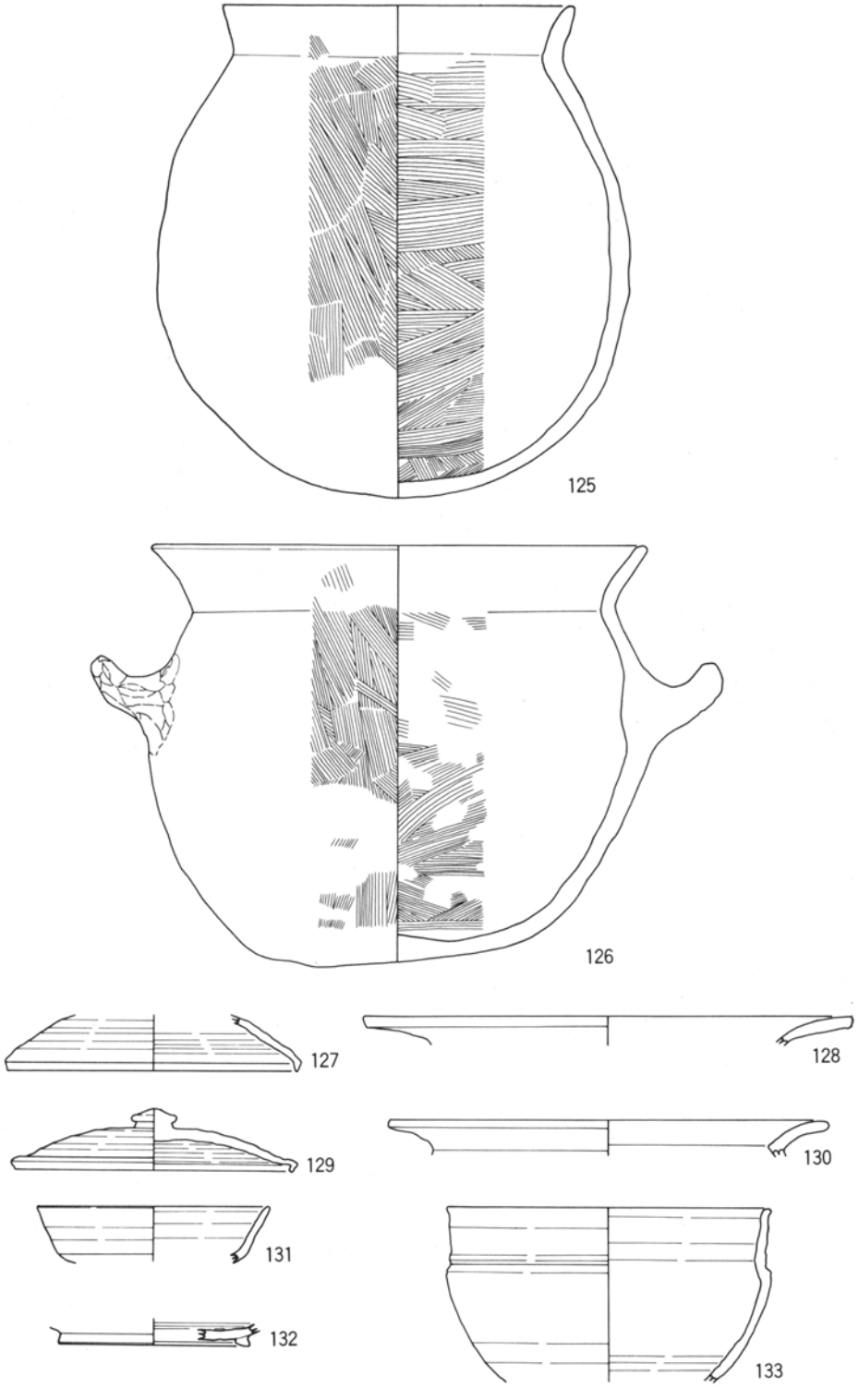
SB303（第40図）　須恵器蓋A類（198）杯A類（199）D類（200）が出土した。199は、腰部が角ばる形態である。200は、厚い器壁で焼成不良である。8世紀後半と考えられる。

SB305（第40図）　須恵器壺の体部（201）が出土した。

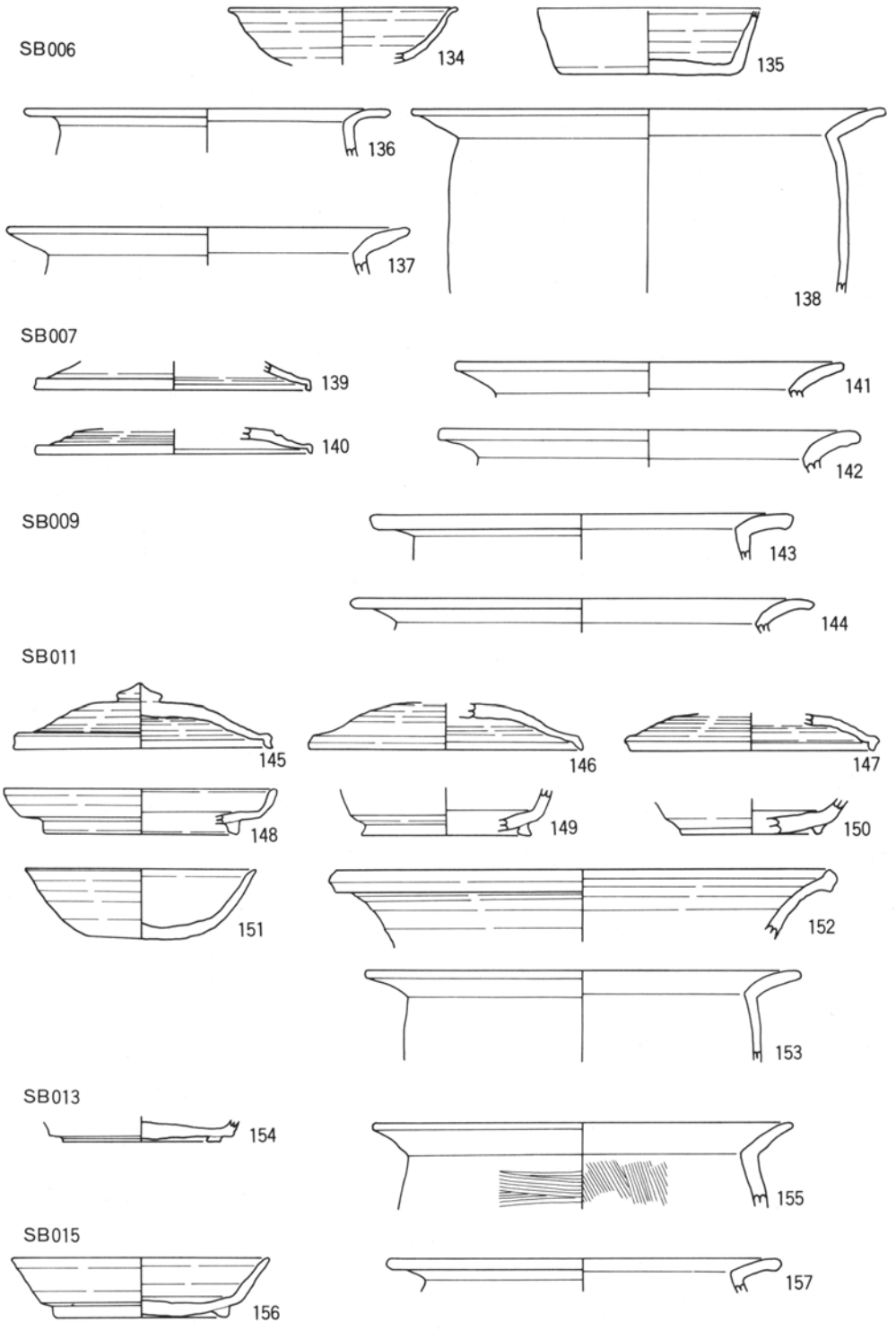
SK045（第41図）　須恵器杯A類（202）　土師器甕A類（203）が出土した。

SK019（第41図）　須恵器杯D類（204）が出土した。底部回転ヘラ切り痕がある。

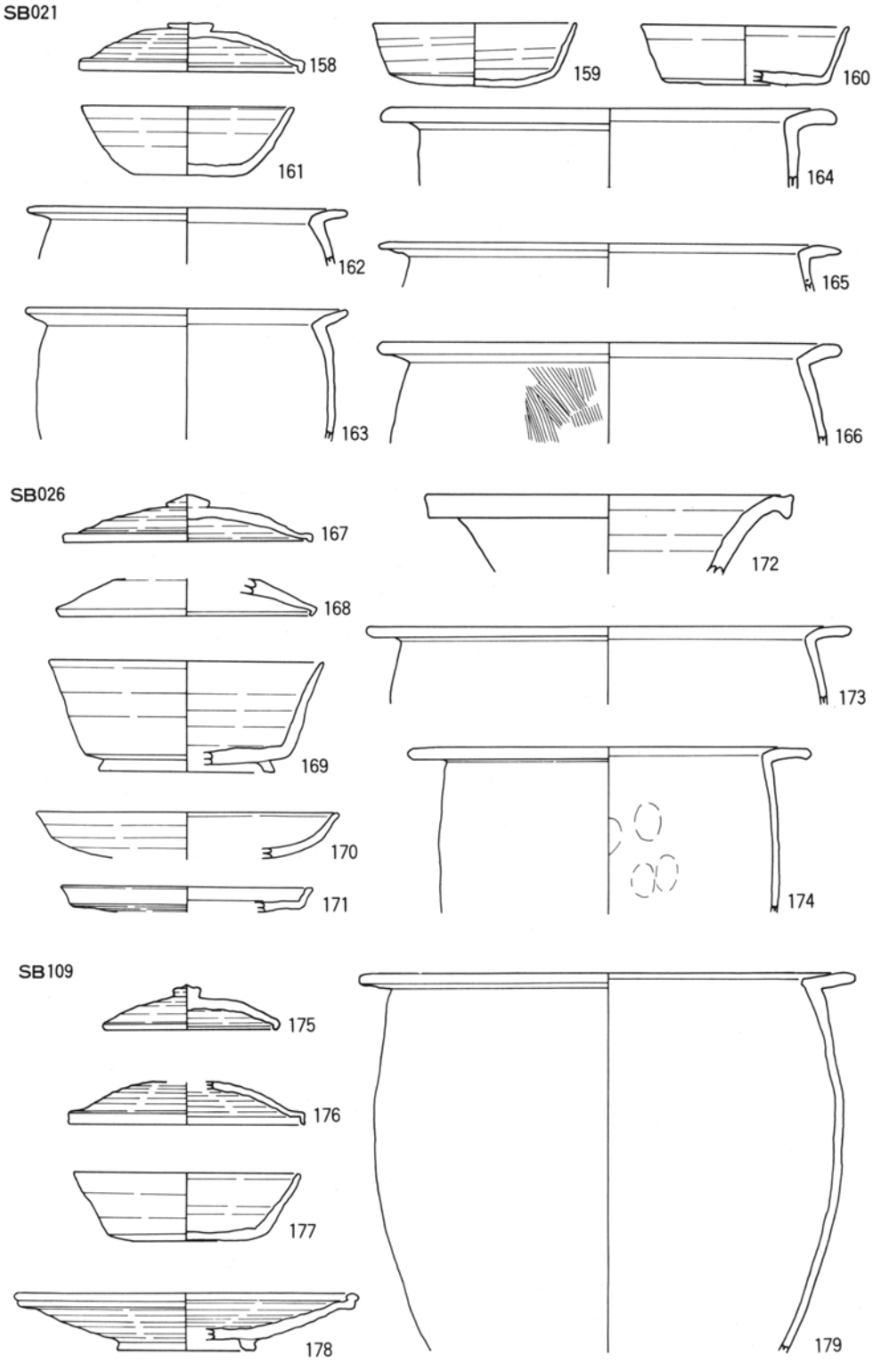
SK011（第41図）　須恵器杯D類（205）が出土した。底部は、体部の下部まで回転ヘラ



第36図　Ⅲ期の遺物　ＳＢ0001・002・004・005　1/4

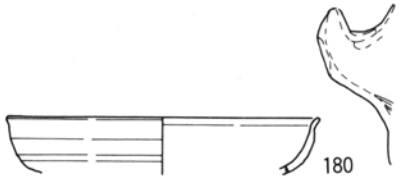


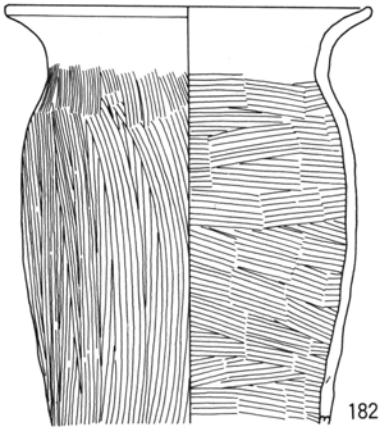
第37図　Ⅲ期の遺物　1/4

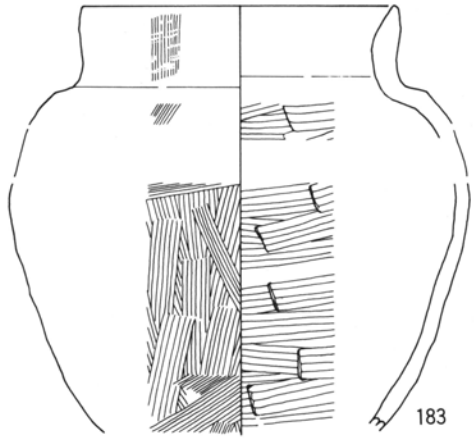


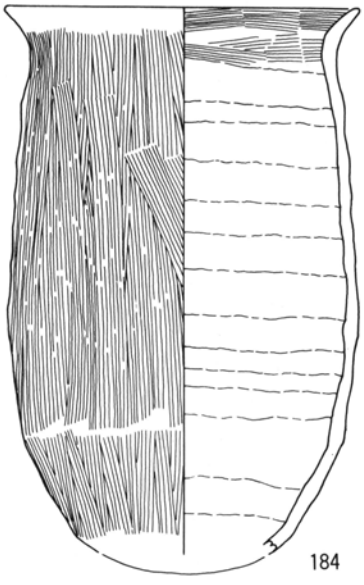
第38図　Ⅲ期の遺物　1/4

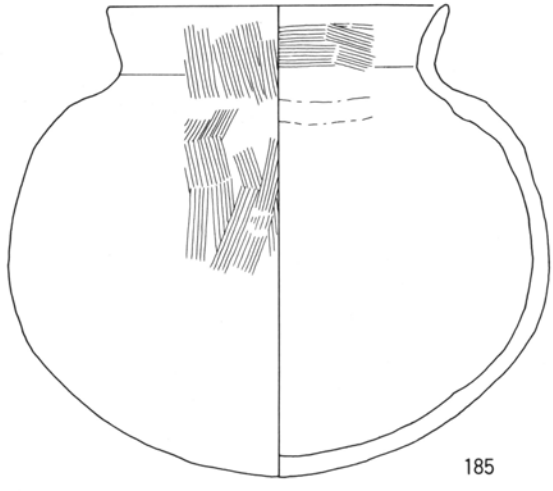
SB115



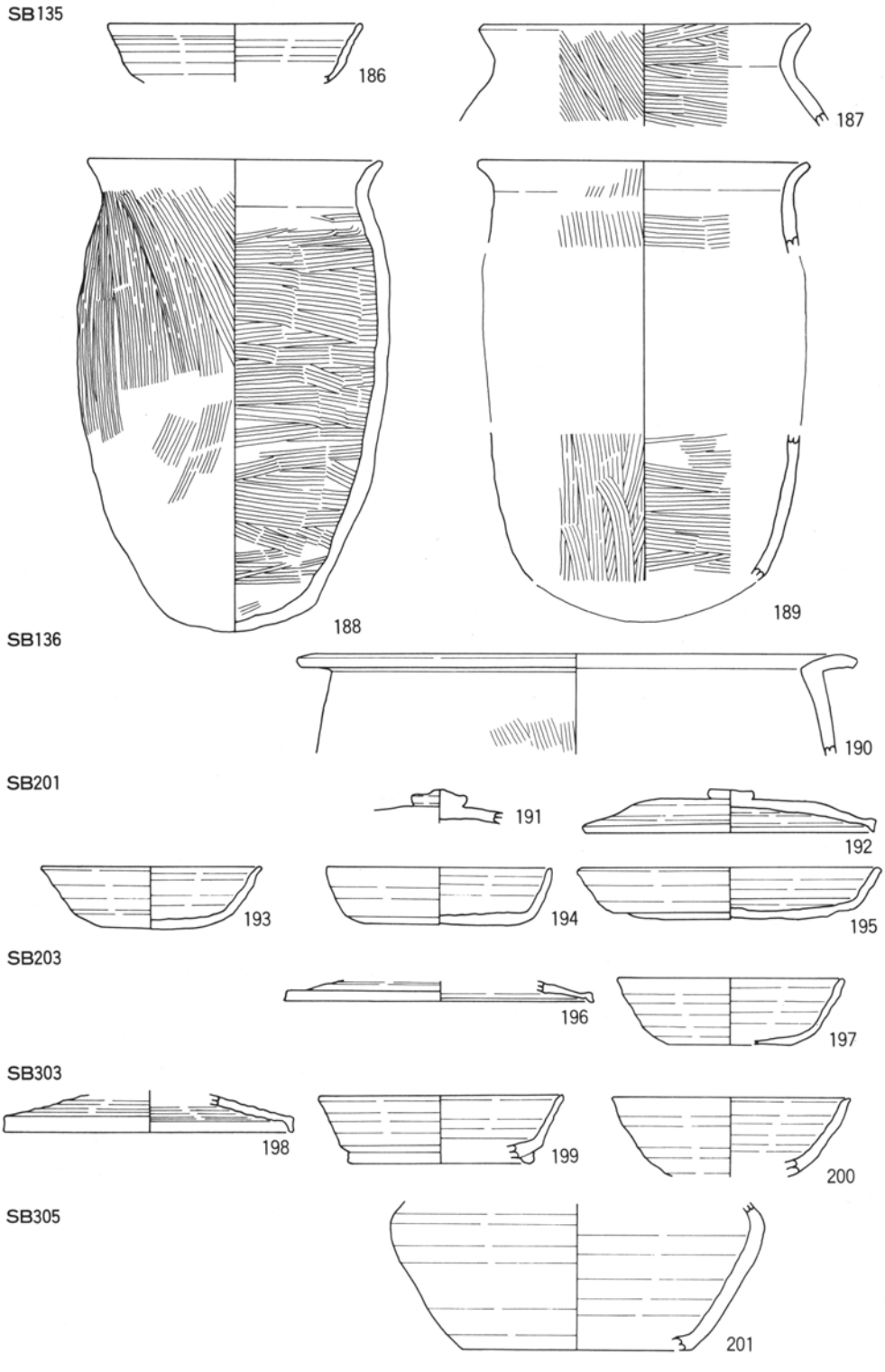




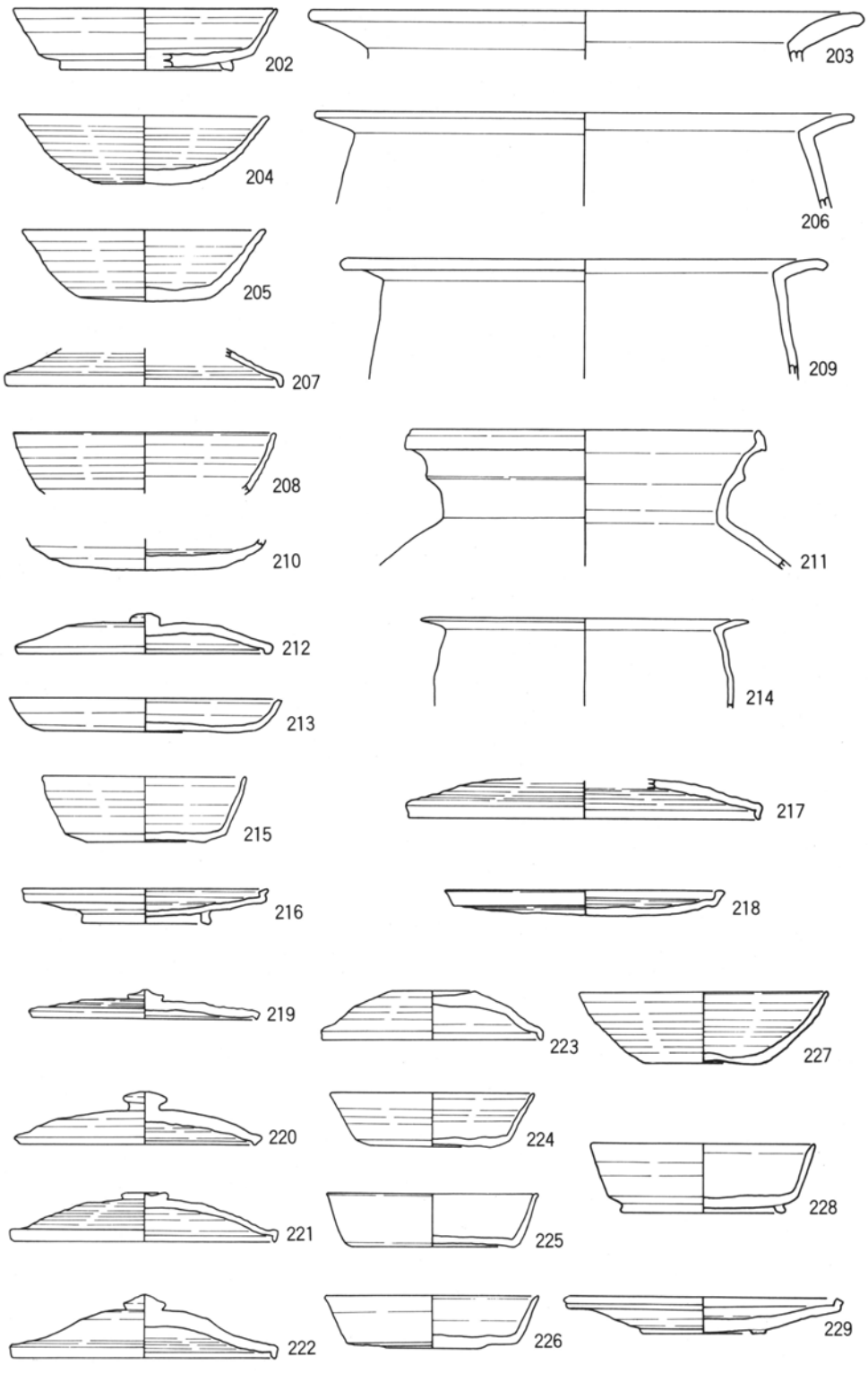




第39図　III期の遺物　1/4



第40図　Ⅲ期の遺物　1/4



第41図　III期の遺物　1/4

削り調整である。

ＳＫ030（第41図）　土師器甕Ａ類（206）が出土した。

ＳＫ105（第41図）　須恵器蓋Ａ類（207）杯Ｄ（208）が出土した。

ＳＫ118（第41図）　須恵器杯Ｄ類（210）甕(211)が出土した。210は底部ヘラ切り痕がある。

ＳＫ1014（第41図）　須恵器蓋Ａ類（212）皿（213）　土師器甕Ａ類（214）が出土した。212は、やや偏平な鈕を有し、口縁折り返しも弱い。214は、小形の甕である。８世紀後半代と考えられる。

ＳＫ0199（第41図）　須恵器杯Ｃ類（215）盤（216）が出土した。215は、底部回転ヘラ削り調整。８世紀後半代と考えられる。

ＳＫ1242（第41図）　須恵器蓋Ａ類（217）が出土した。

ＳＫ1270（第41図）　須恵器盤（218）が出土した。無台の盤と考えられる。

219～229は、遺構外で検出されたものである。須恵器蓋Ａ類（219～222）Ｂ類（223）杯Ａ類（228）Ｃ類（224～226）Ｄ類（227）盤（229）がある。８世紀後半から９世紀初頭に属すと考えられる。

(2)　Ⅲ－２期

ＳＢ301（第42図）　須恵器蓋Ｂ類（230）杯Ｄ類（231～233）　灰釉陶器椀（234・235）　土師器甕Ａ類（236・237）B_3類（238）製塩土器（239）がある。230は、頂部回転ヘラ削り調整である。231・232は、底部未調整、回転糸切り痕が残る。233の底部調整不明。234は、角高台を有し、内面全体に施釉しているが、上半の釉はとんでいる。235は、内外面に施釉している。236は、外面縦方向のハケ調整痕が残るが、内外面ナデ調整をしている。237は内外面ナデ調整。236・237とも、Ⅲ－１期に比較して厚い器壁である。238は、口縁部が大きく外反し上端面が水平近くなる形態である。口唇部内面が、上方向にわずか突出する特徴を持つ。外面長い縦方向のヘラ削り調整、内面ナデ調整、口縁部に横ナデ調整を行う。239は、製塩土器の脚部破片である。以上は、Ｋ－14号窯式に併行する時期と考えられる。

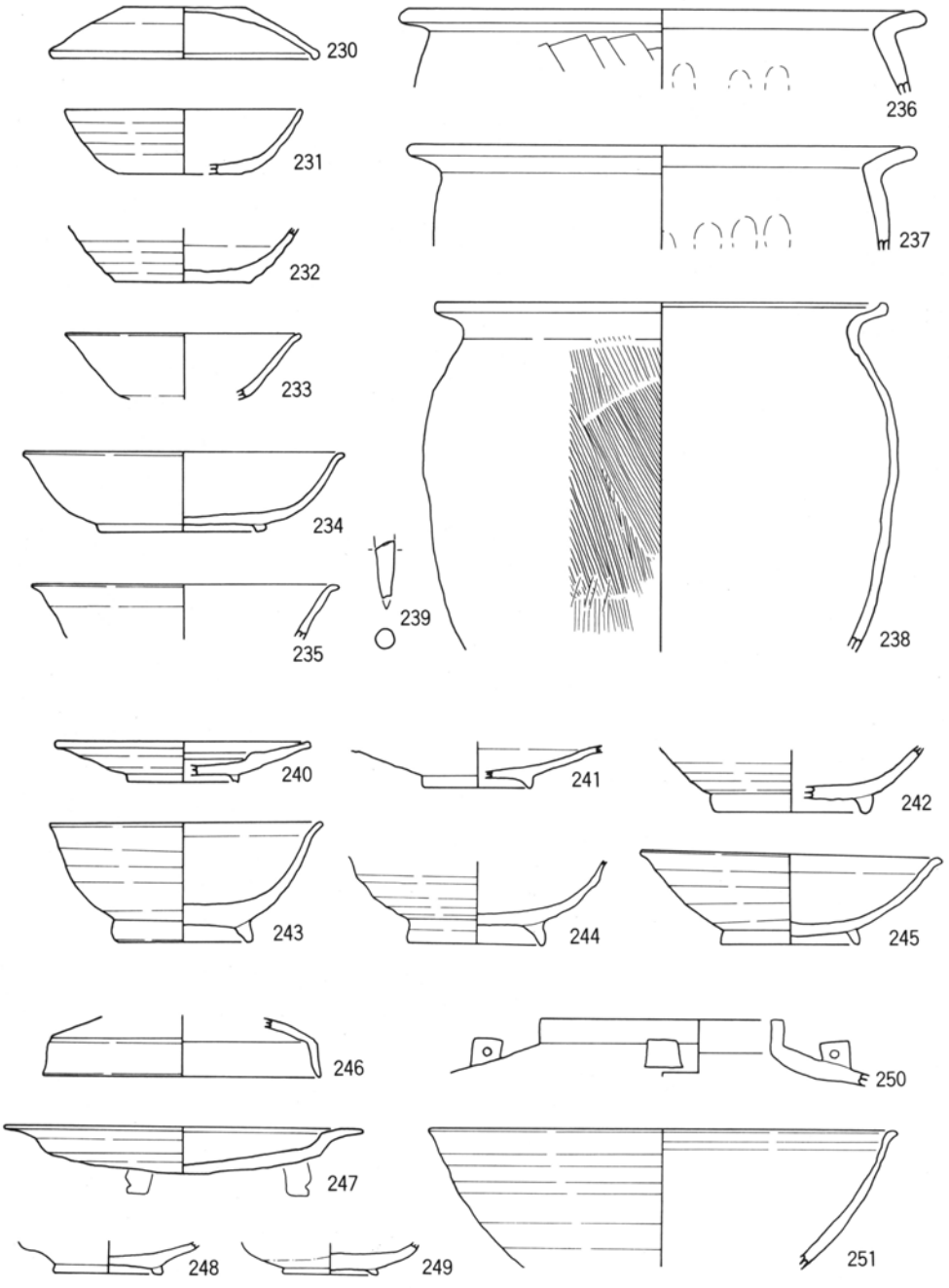
ＳＫ1113（第42図）　灰釉陶器段皿（240）が出土。内面施釉する。Ｋ－14号窯式併行の時期である。

ＳＫ1182（第42図）　無釉陶器（241）が出土。底部糸切り痕がある。

ＳＫ049（第42図）　灰釉陶器椀（242）が出土。内面全体と体部上半施釉。底部回転ヘラ削り調整である。Ｋ－90号窯式併行の時期である。

ＳＫ0106（第42図）　灰釉陶器椀（243・244）が出土。施釉は浸け掛けで、底部に回転糸切り痕を残す。Ｏ－53号窯式期に併行する時期と考えられる。

ＳＫ1245（第42図）　灰釉陶器椀（245）が出土。内面全体施釉。底部回転ヘラ削り調整で



第42図　Ⅲ期の遺物　1/4

ある。K－90号窯式に併行する時期と考えられる。

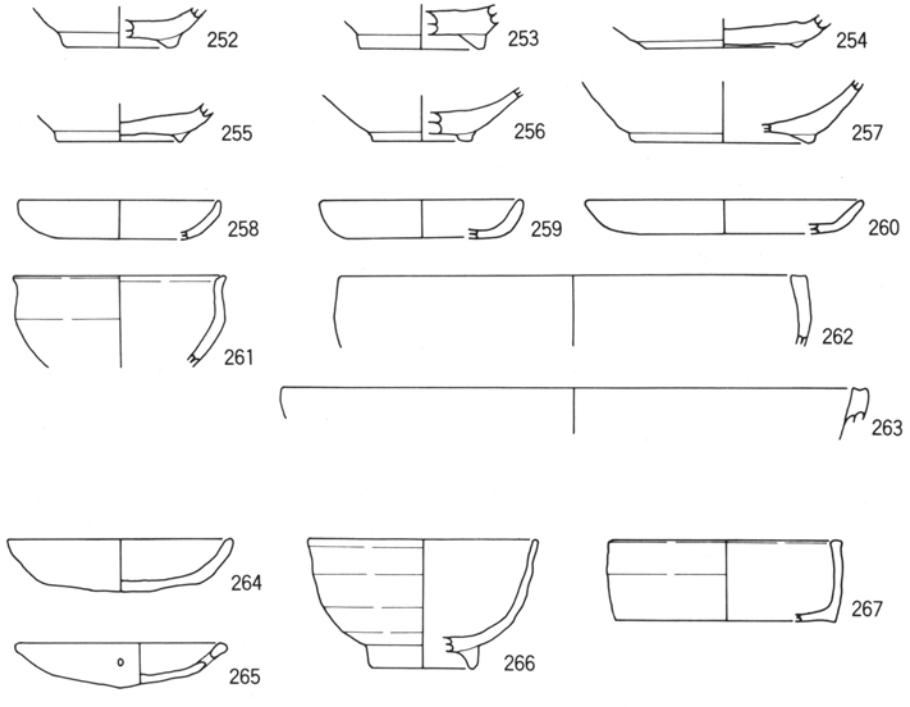
246～251（第42図）は、遺構外出土の灰釉陶器である。246は短頸壺等に付随する蓋で外面のみ施釉する。247は、三足盤で、上面施釉。246・247ともにK－14～K－90号窯式の時期と考えられる。248・249は耳皿である。248は、内面施釉する。249は、内外面施釉、K－14号窯式に併行する時期である。250は、短頸壺で、四方に耳を有する。K－14～90号窯式の時期である。251は、大形の椀で、内面に施釉する。K－14～90号窯式の時期である。

4．Ⅳ期の遺物

遺物量は少なく、13世紀と16世紀の2時期に分かれる。

SK4002（第43図）　灰釉系陶器（山茶椀）が出土した。252～254は、いずれも椀底部で、中心部に回転糸切り痕がある。胎土は砂粒・細礫を多く含み、粗い。13世紀代に位置づけられる。

SD15（第43図）　灰釉系陶器（山茶椀）が出土した。255～257は、いずれも椀の底部で、回転糸切り痕を残す。255・256は、高台下底に籾痕がある。255・257は粗い胎土である。13世紀代と考えられる。



第43図　Ⅳ・Ⅴ期の遺物　1/4

ＳＫ2001～2032（第43図）　258～263は、Ｘ区の土坑群より検出された。ＳＫ2010・2019・2028より土師器皿（258～260）が出土した。いずれも内外面をナデ調整する。261は、天目茶椀で鉄釉を施す。262、263は内耳鍋口縁部で、口唇部上端面を強くナデ調整する。16世紀代に位置づけられる。

５．Ｖ期の遺物

ＳＫ103（第43図）　土師器皿（264・265）　鉄釉椀（266）　灰釉椀（267）が出土した。土師器皿はいずれも手捏ねで成形、内面にナデ調整を施す。265は、焼成後の穿孔がある。266は、尾呂茶椀である。内外面・底部まで鉄釉を施す。267は、鬢盥（ビンダライ）である。内外面に緑色の釉を施し、平面形は、楕円となる。264～266は、ほぼ半割されており、副葬品と考えられる。18世紀前半の時期である。

（酒井俊彦）

第Ⅳ章　自然科学的分析

1　愛知県諏訪遺跡及びその周辺地域に発達する黒色土の起源について

Origins of Black Soils from Site of Suwa and its Vicinities,

Aichi Prefecture, Japan Archaeological reserch center of Aichi Prefecture
Yuichi MORI,Koji NAGAKUSA and Mamiko TATE

(1)　はじめに

愛知県新城市諏訪遺跡並びにその周辺地域には、遺跡の基盤層や包含層をなす腐植質の黒色土が発達する。この黒色土は、「黒ボク」とも呼ばれ、九州や中国・関東・東北・北海道をはじめ、日本全土の表層土壌として広く分布するが、東海・近畿地方では、その発達は悪い。

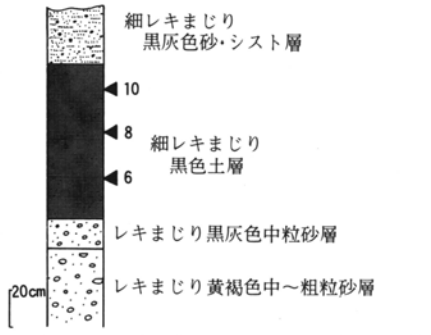
黒色土の起源については、河室・鳥居（1986）をはじめ多くの研究があり、火山噴出物とくに火山灰層に由来するものであると考えられてきた。しかし、表層地質に火山灰層のほとんど見られない東海・近畿地方においては、黒色土の起源はあまり知られていなかった。

遺跡の立地環境の推定にあたって、このたび黒色土の分析を行ったので、その概要を報告する。ただ、現時点では分析試料が少なく、今回の結果はその予察の段階にとどめる。

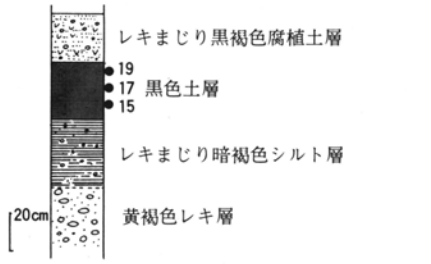
(2)　試料の処理と分析方法

分析を行った試料は、諏訪遺跡（ⅢSW）62B区及び62A_3区のそれぞれ3試料、計6試料である。62B区の試料は中位段丘堆積物、62A_3区の試料は下位段丘相当層の堆積物から採取した。柱状図と分析試料採取層準を第44図に示した。

試料処理にあたっては、乾燥重量1gの試料をトールビーカーにとり、過酸化水素水（35%）を加えて煮沸し、有機物の分解と粒子の分散を行った。この後、比重選別によって植物珪酸体分析試料と鉱物分析試料に分離した。



下位段丘堆積物の地質柱状図と分析試料採取層準
（ⅢSW62A_3：aサンプル）



中位段丘堆積物の地質柱状図と分析試料採取層準
（ⅢSW62B）

第44図　分析試料採取柱状図

植物珪酸体の分析試料については、珪藻分析（町田遺跡報告書参照）と同様、水洗を4～5回くり返しながら、比重選別を行った。次に分離した試料を希釈して、マウントメディア（和光純薬製）にて封入した。検鏡は400倍及び1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも400個の植物珪酸体を同定した。また、植物珪酸体数の算定は、400倍で複数枚のプレパラート中の8走査線以上を検鏡し、鏡下に出現した個数と試料の希釈率から算出した。

鉱物分析用試料は、標準ふるいによって150μm（＃100）以上の粒子を取り除き、エポキシ系樹脂で封入した。検鏡は200倍の偏光顕微鏡下で各試料とも200個以上の鉱物を同定した。

(3) 分析結果

a．植物封酸体の分析結果

植物珪酸体は、主にイネ科植物の葉身及び茎等に見られる10～100μmほどの珪酸質の組織である。組織の外壁がガラス質でできているため、堆積物中によく保存されて残る。また、珪酸体の形態によって、ある程度の給源植物の推定が可能であり、花粉や珪藻などの微化石を含まない陸成層の堆積環境を考察するうえで重要である。

植物珪酸体についての研究は、佐瀬・近藤（1974）をはじめ、佐瀬・加藤（1976）、佐瀬（1980）、近藤・佐瀬（1986）など多くの研究がある。本論では、佐瀬ほか（1987）による植物珪酸体の分類に従って、分析した。

62B区の試料の植物珪酸体数は、1gあたり平均3.5×10^6個、62A_3区の試料では同6.7×10^6個であった。いずれも上部に向かうにつれて、その数が増加する。

	サンプル番号	全植物珪酸体数（個／g）	大型珪酸体			小型珪酸体				総計	その他の微化石
			ファン型	棒状型	ポイント型	ウシノケグサ型	タケⅠ型（ササ亜型）	キビ型	タケⅡ型（タケ亜型）		
低位段丘（62A_3）	10	9.3×10^4	9 (36)	51 (204)	1 (4)		13 (52)	5 (20)	21 (84)	100% (400)	*Pinnularia sp.* *P. subcapitata* *Hantzschia amphioxys* （いずれも珪藻）
	8	6.1×10^4	6 (24)	64 (261)	3 (12)	1 (2)	9 (36)	3 (11)	14 (54)	100% (400)	*Pinnularia borearis* *Hantzschia amphioxys* *Epithemia zebra* *Cocconeis placentula*
	6	4.6×10^4	14 (55)	57 (231)	2 (7)		13 (52)	3 (12)	11 (43)	100% (400)	*Pinnularia borearis*
中位段丘（62B）	19	4.4×10^4	5 (20)	53 (210)	1 (4)		27 (109)	2 (8)	12 (49)	100% (400)	*Cocconeis placentula*
	17	3.3×10^4	3 (13)	47 (189)	1 (5)		29 (116)	2 (8)	17 (69)	100% (400)	
	15	2.9×10^4	19 (77)	50 (201)	1 (4)	1 (2)	19 (75)	6 (24)	4 (17)	100% (400)	

第3表　黒色土の植物珪酸体分析結果

（　）内は実数

植物珪酸体数の種類では、すべての試料で大型珪酸体が目だった。なかでも棒状型珪酸体は全試料中の54%を占め、つづいてファン型9%、ポイント型は1.5%に過ぎなかった。

小型珪酸体では、62B区と62A_3区でそれぞれ出現率を異にした。前者ではタケI型（ササ亜型）25%、キビ型3%、タケII型（タケ亜型）11%、後者ではタケI型(ササ亜型)12%、キビ型4%、タケII型(タケ亜型)15%であった。ウシノケグサ型は、前者・後者ともそれぞれ1試料で1%出現したのみであった。なお、分類不能の珪酸体については「その他」とし、今回の計数から除外した。

	62B			62A_3		
	15	17	19	6	8	10
石英	31.8	22.8	21.1	27.7	32.0	33.7
斜長石	21.8	23.9	24.4	26.5	23.0	19.7
正長石	19.0	20.8	15.8	18.4	16.5	15.8
黒雲母	3.6	4.2	5.7	4.9	11.2	6.3
角閃石	8.3	8.3	14.1	12.7	10.4	15.3
斜方輝石	3.2	3.1	1.2	0.4	0.0	2.3
普通輝石	2.8	2.4	3.2	3.3	0.4	2.7
燧石	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.5
ザクロ石	0.8	1.4	0.8	0.8	0.4	0.0
ジルコン	0.8	1.0	0.4	0.4	0.7	0.0
火山ガラス	1.6	2.4	2.8	2.9	2.9	1.4
不透明鉱物	6.3	9.7	10.5	2.0	1.8	2.3
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

第4表　鉱物の組成（個数%）

その他の微化石には、主に62A_3区の試料中から第3表に示したような珪藻化石の破片を産した。これらの珪藻は、水分の乏しいところでも生活できるいわゆる「陸生珪藻」と、水深の浅い水域の水草等に付着して生息する珪藻の仲間であった。

b．鉱物の分析結果

150μm以下の鉱物を同定し、個数%で表したものを第2表に示した。

62B区及び62A_3区の6試料とも、石英・斜長石がそれぞれ20～30%を占める。次いで正長石、角閃石、黒雲母の順に多く、これら5種の鉱物で80%以上を占めている。

また、150μm以上の粒子について、実体顕微鏡下で観察した結果、大型岩片はそのほとんどが花崗岩に由来するものであることがわかった。

火山ガラスは、A_3区の試料では多孔質型（マイクロパミス型）及び中間型が偏平型（バブルウォーロル型)より多く、B区の試料ではほぼ同量か偏平型の方がやや多く検出された。

この結果、中の黒雲母は、過酸化水素水処理の段階で碧開方向に破壊され、比重選別においてうまく分離されない場合があって、その数値にはやや問題が残るものであることを付記しておく。

(4)　考察

鉱物の組成から黒色土のもとになった岩石を推定すると、中性ないしやや酸性の火成岩が源岩になっているものと考えられる。諏訪遺跡の周辺には中部領家帯に属する花崗岩類(とくに新城石英閃緑岩)及び変成岩類が分布している。新城石英閃緑岩は大型でよく自形した角閃石を特徴的に含んでおり、これが源岩であるとすれば、鉱物分析に多くの角閃石が含まれることや、150μm以上の粒子のなかに花崗岩片が多く含まれることもよく理解できる。

以上の点から、諏訪遺跡周辺の黒色土中の鉱物は、そのほとんどが遺跡周辺の基盤をなす花崗岩類、とくに新城石英閃緑岩の風化によって供給されたものと推定される。

こうした花崗岩起源の岩石が地表付近に露出し、土壌化が進むとともに、やがてイネ科植物の繁茂する草原に覆われたものと考えられる。その後、長期間にわたって風化と腐植化が進行した。

大型珪酸体の給源植物の特定は困難であるが、小型珪酸体のなかにはその形態や大きさによって植物相が復元できるものがあるといわれる（第５表）。62Ｂ区の試料では、タケＩ型（ササ亜型）が全体の25％（小型珪酸体中では64％）を占める。このことから、中位段丘中の黒色土については、ササ属の繁茂する亜寒帯から冷温帯的な気候下で生成された腐植土ではないかと考えられる。冷涼な気候下では、植物体の多くは未分解のまま土中に埋もれ、その結果、厚い腐植土層が発達することになった。

植物珪酸体組成における優秀な小型珪酸体	イネ科植物相の優勢種	気候帯
ウシノケグサ型	ウシノケグサ亜科	寒　帯 ～亜寒帯
ウシノケグサ型 タケＩ型(ササ亜型)	ウシノケグサ亜科 ササ属	亜寒帯
タケＩ型(ササ亜型)	ササ属	亜寒帯 ～冷温帯
キビ型 タケＩ型(ササ亜型)	キビ亜科 ササ属	冷温帯
キビ型	キビ亜科	冷温帯 ～暖温帯
キビ型 タケII型(タケ亜型)	キビ亜科 メダケ属	暖温帯
タケII型(タケ亜型)	メダケ属	

第５表　植物圭酸体と気候帯との関係
（佐瀬ほか：1987）による

下位段丘相当層中の62A_3区の試料では、タケII型（タケ亜型）が15％（小型珪酸体中では48％）、タケＩ型（ササ亜型）が12％（同38％）と両者がほぼ同率で検出された。このことから、おそらく上位に堆積した中位段丘の黒色土が再堆積したものではないかと推定される。タケII型の珪酸体が比較的多く検出されたことから、この腐植土層はメダケ属等の繁茂する、やや暖かい気候のもとで生成されたものであるように思われる。また、下位段丘の黒色土中には珪藻化石の破片が多く見い出されることから、この腐植土層の堆積には水が関与していたものと推定される。

なお、62Ｂ区及び62A_3区両試料中の鉱物中に数％の火山ガラスが含まれることや、まれによく自形した鉱物が含まれることなどから、黒色土生成中にテフラが降灰したことが考えられる。しかし、野尻湖火山灰グループ（1983）の分析結果と比較して石英の比率が大きいことや、高温型の結晶形を残した石英が全く見あたらないこと、また、その他の鉱物に自形したものが少なく風化も進んでいることなどから、火山灰の影響はごくわずかであると考えてよい。降灰が予想されるテフラには、拾良火山灰（約22,000y.B.P）やアカホヤ火山灰（約6,300y.B.P.）が考えられるが、詳細は今後の研究に待たれる。　（森　勇一）

文献

河室公康・鳥居厚志　「長野県黒姫山に分布する火山灰由来の黒色土と褐色森林土の成因的特徴－とくに過去の植被の違いについて」『第四紀研究』　25(2)　1986　81－96

近藤錬三・佐瀬　隆　「植物珪酸体、その特性と応用」　『第四紀研究』　25(1)　1986　31－63

大越昌子　「プラントオパール」　『寿能泥炭遺跡発掘調査報告書』　埼玉県教育委員会　1982　239－259

藤原宏志　「プラントオパール分析の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法」『考古学と自然科学』　9　1976　15－29

野尻湖火山灰グループ　『火山灰分析の手びき－野尻湖の火山灰分析法－』　1983、79p.

坂口　豊　「黒ボク土文化」『科学』　57(6)　1987　352－361

佐瀬　隆・近藤錬三　「北海道の埋没火山灰腐植層中の植物珪酸体について」　『帯広畜大研報』　8　1974　465－483

佐瀬　隆・加藤芳朗　「現世ならびに埋没火山灰土腐植層中の植物起源粒子－とくに植物珪酸体－に関する研究（第Ⅰ・Ⅱ報)」『第四紀研究』　15　1976　21－32　66－74

佐瀬　隆　「南部浮石層直下の埋没土壌の植物珪酸体分析」　『第四紀研究』　19(2)　1980　117－124

佐瀬　隆・細野衛・宇津川徹・加藤定男・駒村正治　「武蔵野台地成増における関東ローム層の植物珪酸体分析」『第四紀研究』　26(1)　1987　1－11

宇津川徹・細野衛・杉原重夫　「テフラ中の植物珪酸体“Opal sponge Spicules”について」　『ペトロジスト』　23(2)　1979　134－144

山田直利・片田正人・坂本亨・松田武雄・須田芳朗　『20万分の1地質図幅・豊橋』　1972　通産省地質調査所

○第45図解説

諏訪遺跡黒色土中の植物珪酸体

1～2　ファン型

3～6　棒状型

7～10　タケⅠ型（ササ亜型）

11～14　キビ型

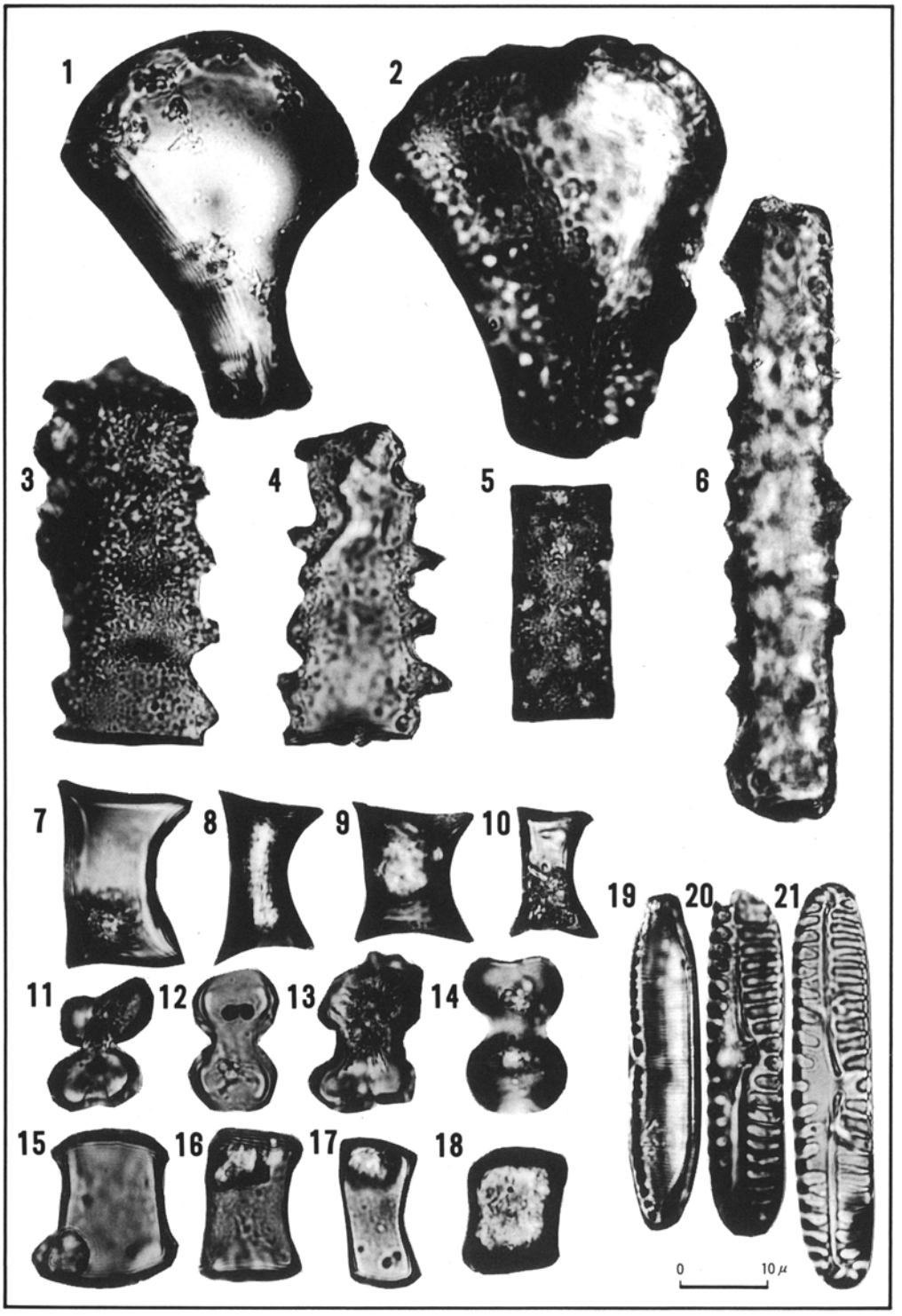
15～18　タケⅡ型（タケ亜型）

19～21　珪藻遺骸

19　*Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow

20　*Pinnularia borearis* Ehrenberg

21　*Pinnularia borearis* Ehrenberg



第45図　黒色土中の植物珪酸体

2．弥生土器の胎土重鉱物分析

弥生時代後期後半の土器について、関連比較試料を加えて胎土重鉱物分析を（株）パリノ・サーヴェイに依頼し、以下はこの結果に基くものである。

(1) 分析試料

重鉱物分析を行った試料は、55点である。（第７・８表）出土遺跡は以下の５遺跡である。

①廻間遺跡　（愛知県海部郡清洲町）　尾張地方　木曾川水系

②朝日遺跡　（同上）　同上

③岡島遺跡　（愛知県西尾市）　西三河地方　矢作川水系

④三和町遺跡　（静岡県浜松市）　遠江地方　天竜川水系

⑤諏訪遺跡　（愛知県新城市）　東三河地方　豊川水系

諏訪遺跡以外は、本報告書において高杯Ｃ類としたいわゆる欠山型高杯に限定し、諏訪遺跡試料は、遺構出土で主要３器種を分析対象とした。（第６表）

(2)分析方法

土器片を鉄乳鉢を用いて粉砕し、水を加え超音波洗浄装置により分散、＃250の分析篩により水洗、粒径１/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後篩別し、得られた1/4mm－1/8mmの粒子をテトラブロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物のプレパラート作製、偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

(3) 分析結果

鉱物の同定粒数は、250個を目標としたがこれに満たない試料が全体の半数近い21点あった。このうち同定粒数が100個に満たない試料が11点あった。これらの試料は組成を正しく表していないと考えられるのでデータとして他の試料とは同等には扱えない。したがって後述する試料のグループ分けからは除外した。各試料の重鉱物組成は、第７表、第45図に示す。

(4) 考察

a 試料のグループ分け

分析結果をもとに各試料の重鉱物組成において優占する鉱物、含まれる鉱物の組合わせ及びその量比などから以下のような試料のグループ分けを行った。（第46図）

○Ⅰグループ（No.２、３、８、12）

変質物である「その他」を除けば斜方輝石が優占する。

○Ⅱグループ（No.１、55）

「その他」を除けば不透明鉱物が非常に多い。

○ III グループ（No. 5 、51）

「その他」が非常に多い。

○ IV グループ「No.13、16、18）

「その他」を除けば角閃石が優占しジルコン、ザクロ石を比較的多く含む。

○ V グループ（No.20、21、23）

「その他」を除けば黒雲母が優占し単斜輝石、角閃石を伴う。

○ VI グループ（No.22、24、25）

「その他」が多く黒雲母、ジルコン、不透明鉱物を伴う。

○ VII グループ（No.19、27、34、35、49、50）

角閃石またはザクロ石が優占する。

○ VIII グループ（No.28～31、33、36、43、46、53）

角閃石が非常に多い。

○ IX グループ（No.32、41）

黒雲母が優占し次に角閃石または酸化角閃石が多い。

○ X グループ（No.37、39、40、42、44、45、48、52）

他のグループに比べて単斜輝石が多い。

○ XI グループ（No.38、47）

不透明鉱物または角閃石が優占し少量のジルコンを伴う。

○どのグループにも属さない試料

No. 6 は「その他」が非常に多いが、III グループに比べてジルコンが多い。

b 各遺跡試料の比較

遺跡と高杯C類の胎土重鉱物分析に基くグループは明確な対応関係がある。廻間遺跡の一部は、諏訪遺跡試料と同グループに含められるが、II は不透明鉱物、III はその他の鉱物の割合が高いためであり、また諏訪遺跡試料は他器種である。これと、グループをつくらない朝日遺跡の 1 点を除外すると、木曽川水系の 2 遺跡は、I グループに代表される。岡島遺跡は 1 点が諏訪遺跡の 3 大グループの一つに含まれるが、IV グループに代表される。三和町遺跡は V 、VI の 2 グループに分かれる。諏訪遺跡は、VII、VIII、X の 3 大グループと IX、XI の 2 小グループにまとめられるが、対象となる高杯C類は、VII に 1 点、VIII、X に各 3 点で、全て大グループに属し、これに代表される。

以上のように土器の胎土重鉱物組成は各遺跡少数グループにまとまり、各々特徴的な組成を示し明瞭に識別される。これは、同一様式の特徴的で斉一性の強い器種についても、水系が異なれば、各地域独自に生産し供給していたことを示す。しかし、例外もあり、VII

グループの岡島遺跡の試料は、遺跡が東三河地域と比較的近距離にあるということから、何らかの関連があることを推測させる。

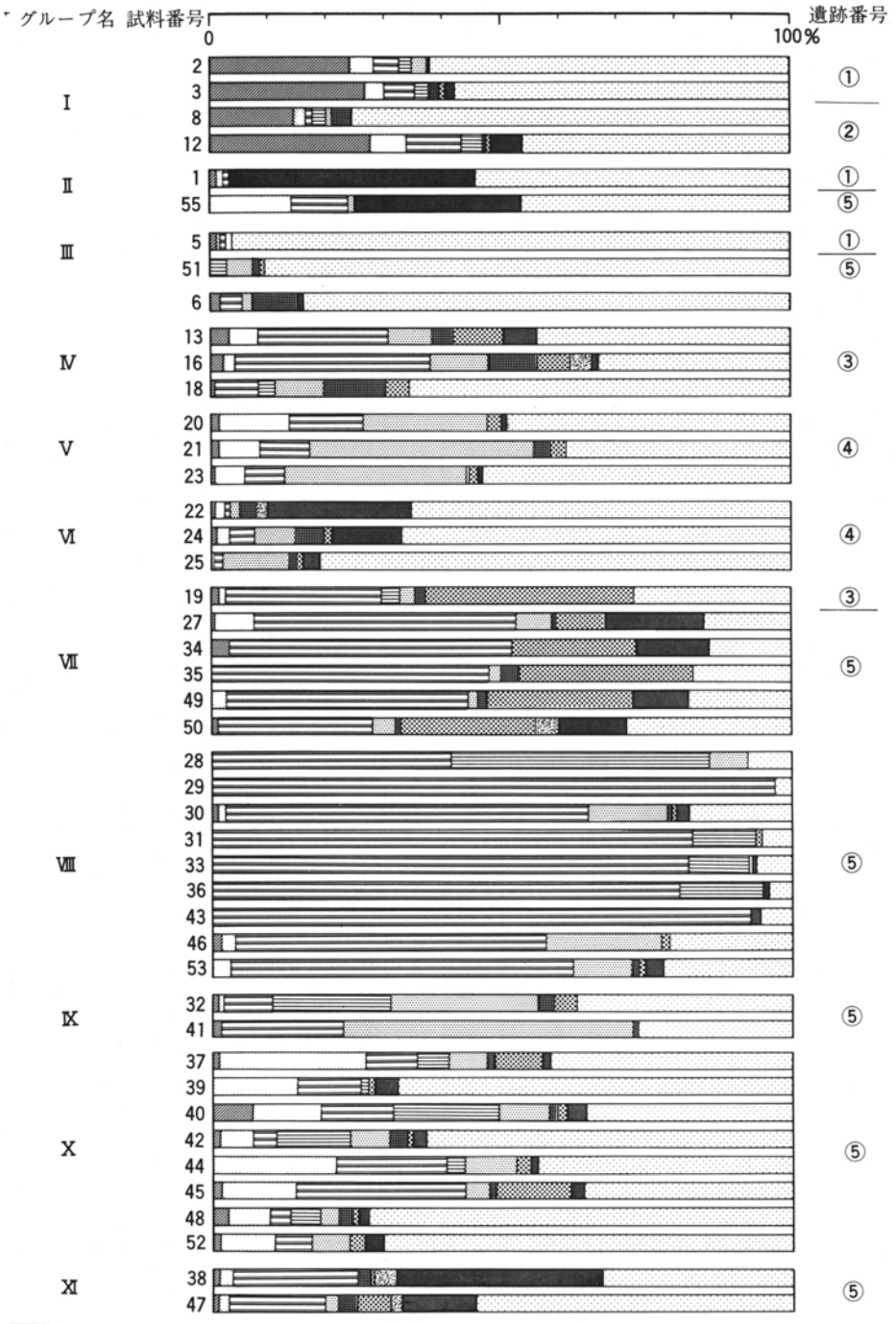
c 諏訪遺跡試料について

諏訪遺跡では、壺、甕、高杯、鉢の各器種の分析を行う。3大グループと2小グループとグループに含まれない2点がある。各大グループの個別試料は近似し、グループ相互の組成の差異は明確である。組成の内容からして土器の制作過程において、一つのグループから他のグループが派生する、あるいは、二つのグループの間に他のグループが成立するといった関係は認め難く、3者が独自性を持つ。二つの小グループは、大グループから派生する可能性はあるが、別個の組成内容である。大グループの器種との対応関係は、Ⅶが甕(3)高杯(1)鉢(1)　Ⅷが壺(3)甕(2)高杯(4)　Ⅹが壺(3)甕(2)高杯(2)で、Ⅶグループの鉢が、壺の胴下半部であることから、各グループとも主要3器種を含んでいる。また、遺構との対応については、若干の偏りは存在するが、各遺構の出土土器は、2グループあるいは3グループに分かれ、1グループのみに属す関係にはない。小グループは、Ⅸが甕(1)高杯(1)Ⅺが壺(2)で、各試料は別個の遺構からの出土である。

大グループは、各器種を含み、遺構によって偏在しないことから、恒常的な存在と考えられる。小グループは、Ⅸグループが大グループと同様に一般的な器種であるが、Ⅺグループは、装飾性の強い小型精製壺と、大形の壺で、諏訪遺跡では特殊な器種である。3大グループは、諏訪遺跡の集落の人員が属す共同体の土器生産が、三つの生産者集団によって独自に行なわれていたことを示唆する。Ⅸグループは、それと共通した土器を特殊な胎土で製作することから、その共同体内部で生産方法の異なる、他の共同体と関連性を持った製作者の存在が推測される。Ⅺグループは、特殊な器種で、地域が異なる他の共同体の生産者集団によって製作された可能性が考えられる。組成の差異の原因となる素材の粘土・混和材の採取地について検討することが今後の課題である。　(酒井俊彦)

試料番号	遺構番号	分　類	報告書番号
27	S B110	高 杯 C	40
28	S B110	高 杯 C	45
29	S B110	高 杯 D_2	47
30	S B110	高 杯 C	−
31	S B110	高 杯 C	44
32	S B110	甕 B_1	58
33	S B110	甕 A_2	60
34	S B110	鉢	38
35	S B110	甕	66
36	S B110	壺	−
37	S B110	壺 E	34
38	S B014	壺 C	70
39	S B014	甕 C_2	72
40	S D01	高 杯 C	119
41	S D01	高 杯 D_2	120
42	S D01	甕 A_3	124
43	S D01	甕 A_2	123
44	S D01	壺 B	113
45	S D01	壺 D	114
46	S D01	壺 C	110
47	S D01	壺 A_1	111
48	S D04	高 杯 C	91
49	S D04	甕 A_2	101
50	S D04	甕 D	105
51	S D04	甕 A_3	100
52	S D04	高 杯 C	83
53	S D04	壺 D	−
54	S D04	壺 D	77
55	S D04	壺 A	−

第6表　諏訪遺跡試料



第46図　重鉱物組成

※遺跡番号は本文参照

試料番号	重鉱物組成																同定鉱物粒数
	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	他の角閃石	黒雲母		緑レン石	ジルコン	ザクロ石	リン灰石	電気石	不透明鉱物	その他		
			緑色	褐色			緑色	赤褐色									
1	2	2			1					2			1	82	105	195	
2	59	10	5	6	5		1	6						1	157	250	
3	50	7	7	3	4			1		3	2			3	112	192	
4			1												15	16	
5	3	1	1		1			1		2					241	250	
6	2		3		2		1	1		10				1	110	130	
7	32			1	1		1			2			1		45	83	
8	36	5	3		6		1	1		8				1	189	250	
9	2														38	40	
10	3		8		1		1	1		1			2	3	38	58	
11	3		1							1	5				16	26	
12	68	15	12	10	2		9	1		1	1		1	15	115	250	
13	3	5	23				8			4	9		2	6	44	104	
14		1	4				2	2		9	1			2	44	65	
15	1	1	4				4	5		14	1				26	56	
16	5	5	83				26			21	15	1	10	2	82	250	
17	2		3	1	1	1	1			3	9				30	51	
18	2		18		7		4	16		27	10		4		159	247	
19	3	3	66		8		7			4	92				67	250	
20	4	29	23	4	3		47	6			6		4	2	116	244	
21	1	5	6				18	10		2	2		1		27	72	
22	2	4	1		1		1	3		6	1		5	61	165	250	
23	1	13	13		4		23	55		1	4			2	134	250	
24	2	5	7	3			12	4		11	3		4	28	154	233	
25		1	1		3		3	25		3	3			7	204	250	
26		1					3	15		1			1	1	8	30	
27	1	17	113				16		6	1	22		4	42	28	250	
28			99	4	112		15	2							18	250	
29			241	2	1		1			1					4	250	
30	2	2	158	1			29	5		2	1		1	6	43	250	
31			199	9	28						2		1		11	250	
32	1	1	21		53		30	34		7	10				93	250	
33			198	8	26				3	1	1			1	12	250	
34	3		49	2							23		1	13	14	105	
35			119			1	4	1		8	75		3	1	38	250	
36			199	3	37									2	9	250	
37	1	46	16		10		5	7		2	16			2	76	181	
38	2	5	54							6	1		10	91	81	250	
39		35	28				2	1		1	2		1	10	170	250	
40	15	30	32		46		6	16		4	4	2	1	8	86	250	
41	1	1	50		3		26	100		2	1				66	250	
42	1	14	10		33		4	13		8	2			6	159	250	
43			233											4	13	250	
44		51	49		8		9	13			6			3	111	250	
45	1	32	70	1	4		6	4		3	33		2	6	88	250	
46	1	6	133	3		1	40	10			3		1		52	250	
47	1	4	41			1	5	1		8	15		5	33	136	250	
48	5	17	9		13		3	5		6	3		1	4	184	250	
49		6	103	1			3	1		4	64		2	24	42	250	
50	1		39				6			1	35		6	18	42	148	
51					6		4	7		3	2				228	250	
52	2	22	14		2		12	5			6		1	8	178	250	
53		6	147	2			4	21		3	2		4	8	53	250	
54	4	2	12		2		2			1	1		1		39	64	
55		27	19				2							58	94	200	

第7表　重鉱物組成

試料番号	遺跡名	器形	表面の色(表・裏)	表面の質感	表面にみられる砂粒など(表－裏)
1	廻間	高杯 杯部	にぶい橙・灰～明褐灰	きめ細か	砂粒目立たず
2	〃	〃 〃	橙 ・にぶい橙	ややきめ細か	灰黒色岩片少量、赤色粒微量に含む
3	〃	〃 〃	にぶい赤橙・浅黄橙	きめ細か	砂粒目立たず
4	〃	〃 〃	灰白～にぶい橙・橙	〃	〃
5	〃	〃 〃	橙 ・ 同	〃	赤色粒少量、白色粒微量に含む
6	朝日	〃 脚部	浅黄橙・ 灰褐	〃	灰色岩片少量含む
7	〃	〃 〃	灰白 ・ 同	きめ細か	砂粒目立たず
8	〃	〃 〃	にぶい橙～橙・にぶい橙	〃	赤色粒・灰色岩片少量含む
9	〃	〃 〃	褐灰 ・ 灰褐	〃	砂粒目立たず
10	〃	〃 〃	灰白 ・ にぶい橙	〃	白色粒微量に含む
11	〃	〃 〃	灰白 ・ 灰白	〃	灰色岩片少量含む
12	〃	〃 〃	褐灰 ・ 灰褐	〃	灰色岩片・黒雲母片少量含む
13	岡島	〃 杯部	灰褐 ・ 同	〃	白色粒・灰色岩片微量に含む
14	〃	〃 〃	にぶい橙・にぶい褐	〃	灰色岩片微量に含む
15	〃	〃 脚部	にぶい橙・ 同	〃	黒雲母片微量、カコウ岩片(径8㎜)あり
16	〃	〃 杯部	にぶい橙・にぶい褐	〃	砂粒目立たず－カコウ岩片(最大径4㎜)少量含む
17	〃	〃 脚部	にぶい赤橙・にぶい橙	やや粗い	白色粒多く含む
18	〃	〃 〃	浅黄橙・にぶい橙	ややきめ細か	灰色岩片少量、赤色粒・白色粒微量に含む
19	〃	〃 杯部	浅黄橙・ 同	やや粗い	灰色・白色岩片少量含む
20	三和町	〃 脚部	灰褐・ 同	きめ細か	砂粒目立たず
21	〃	〃 〃	灰白・ 浅黄橙	〃	〃
22	〃	〃 杯部	褐灰・にぶい橙	〃	灰色岩片微量に含む
23	〃	〃 〃	にぶい褐・ 灰褐	〃	黒雲母片微量・砂粒目立たず
24	〃	〃 脚部	灰褐・にぶい橙	〃	灰色岩片微量に含む
25	〃	〃 〃	淡橙・ 同	ややきめ細か	灰色岩片微量、赤色粒微量に含む
26	〃	〃 〃	灰白・ 同	きめ細か	砂粒目立たず
27	諏訪	〃 〃	にぶい橙・にぶい黄橙	やや粗い	灰色・白色岩片多い、白色粒少量、黒雲母片微量に含む
28	〃	〃 〃	橙 ・ 同	きめ細か	白色粒・黒雲母片微量に含む
29	〃	〃 〃	にぶい橙・ 同	〃	灰色岩片微量に含む
30	〃	〃 〃	にぶい赤褐・同	やや粗い	白色岩片(最大径3㎜)少量・微細黒雲母片多く含む
31	〃	〃 杯部	橙 ・にぶい橙	〃	黒雲母片・灰色岩片少量含む
32	〃	甕 口縁部	褐 ・ 灰褐	きめ細か	砂粒目立たず
33	〃	〃 〃	橙 ・ 同	やや粗い	灰色岩片少量含む
34	〃	針 〃	にぶい橙～明褐灰・同	きめ細か	灰色岩片微量に含む、カコウ岩片(径8㎜)あり
35	〃	甕 脚部	にぶい橙・ 同	ややきめ細か	白色岩片少量含む
36	〃	壺 胴部	橙 ・ 同	〃	〃
37	〃	〃 〃	〃 ・ 〃	〃	〃
38	〃	〃 〃	〃 ・ 〃	やや粗い	白色・灰色岩片少量、黒雲母片微量に含む
39	〃	甕 〃	灰褐 ・にぶい橙	きめ細か	砂粒目立たず
40	〃	高杯 脚部	浅黄橙・ 同	粗い－きめ細か	灰色・白色岩片多い－砂目立たず
41	〃	〃 〃	浅黄橙～灰白・同	粗い	灰色・白色岩片多量、白色粒多く含む
42	〃	甕 脚部	にぶい褐・ 同	粗い	白色・灰色岩片多く含む
43	〃	〃 胴部	褐灰・にぶい黄橙	きめ細か－粗い	灰色岩片多量、白色粒多く含む
44	〃	壺 〃	にぶい橙・ 橙	きめ細か	灰色岩片少量、白色岩片微量、黒雲母片微量に含む
45	〃	〃 〃	にぶい橙・明褐灰	ややきめ細か	白色・灰色岩片(径3㎜)少量あり
46	〃	〃 〃	明赤褐・ 同	〃	黒色斑晶・白色紋・岩片少量含む
47	〃	〃 〃	にぶい橙・浅黄橙	やや粗い	白色岩片多く含む
48	〃	高杯 脚部	橙 ・ 同	ややきめ細か	白色岩片少量含む
49	〃	甕 胴部	灰褐 ・にぶい橙	〃	白色粒少量含む
50	〃	〃 〃	黒 ・ 灰褐	きめ細か	砂粒目立たず
51	〃	〃 〃	にぶい橙～橙・橙	やや粗い	白色・灰色岩片少量、赤色粒少量、チャート(径8㎜)あり
52	〃	高杯 杯部	橙 ・ 月	粗い	白色岩片(最大径4㎜)・灰色岩片少量、白色粒多く含む
53	〃	壺 胴部	灰褐 ・にぶい赤褐	きめ細か	黒雲母片多く含む
54	〃	〃 〃	にぶい橙・ 同	〃	白色粒・黒雲母片微量に含む
55	〃	〃 〃	〃 ・ 〃	やや粗い	白色岩片少量含む

＊岩片：粒径約0.5～2㎜程度の角ばった砂粒。
粒 ：粒径約0.2㎜程度。外見的には粘土の微細な固まりのように見える。

第8表 土器胎土観察

第Ⅴ章　考　察

1．遺構の時期別変遷

遺構について、Ⅰ期：縄文時代　Ⅱ期：弥生時代　Ⅲ期：奈良時代～平安時代　Ⅳ期：中世　Ⅴ期：近世の5時期に区分したが、以下これに従って、遺構の時期別の変遷について整理しておく（第47・48図）

Ⅰ期　縄文時代中期の土坑が1基検出された。表土掘り下げ及び検出時での同時期の出土遺物は極少量であり、その意義については不明である。諏訪遺跡周辺の上位段丘上には、中期の遺跡が分布し、何らかの関連があると考えられるが、位置する段丘上には、ほとんど遺構は存在しないものと推測される。

Ⅱ期　中期と後期に分れる。中期は土坑1基が確認され、大部分は後期に属す。Ⅱ期の遺物は、下位段丘上のA区に集中する傾向があるが、少量であり、同段丘面及び近辺に同時期の遺構はあまり多くは存在しないと考えられる。後期は、前半（Ⅱ－1）と後半（Ⅱ－2）に細別される。東三河地域の後期の土器編年において寄道式土器と欠山式土器の時期に各々相当する。ここでは、2時期に分けて考える。

Ⅱ－1　B・C区中央部とX区に、並行する断面V字形の溝ＳＤ04・ＳＤ01が存在し、両溝間の地区に、4棟の竪穴住居ＳＢ101・102・114・124が存在する。ＳＤ04の北側には、方形周溝墓ＳＺ01・ＳＺ02がある。

Ⅱ－2　Ⅱ－1期に竪穴住居の存在した部分に、3棟の竪穴住居ＳＢ110・111・141が近接して存在するが、ＳＤ04より北側の前時期にはなかった部分にも竪穴住居の分布が広がる。この時期には、溝は埋積しつつあり、機能は既に失っていると考えられる。また、同時に、前時期の周溝墓を竪穴住居がきってつくられることから、墓としての認識・機能も消滅していると推測される。

Ⅲ期　Ⅲ－1期とⅢ－2期に分れる。

Ⅲ－1　8世紀後半から9世紀前半の時期で、下限が灰釉陶器出現以前の時期とした。B・C区のⅡ期を除外した竪穴住居、掘立柱建物、大部分の土坑及び、X区とA_1区の1棟を除いた竪穴住居がこの時期に属す。竪穴住居は総計44棟、掘立柱建物10棟である。竪穴住居・掘立柱建物の各々及び相互に重複関係にあるものがあり、細かい時期区分が可能である。同時期の遺構は遺跡周囲の中位・下位段丘面に密に分布すると考えられる。

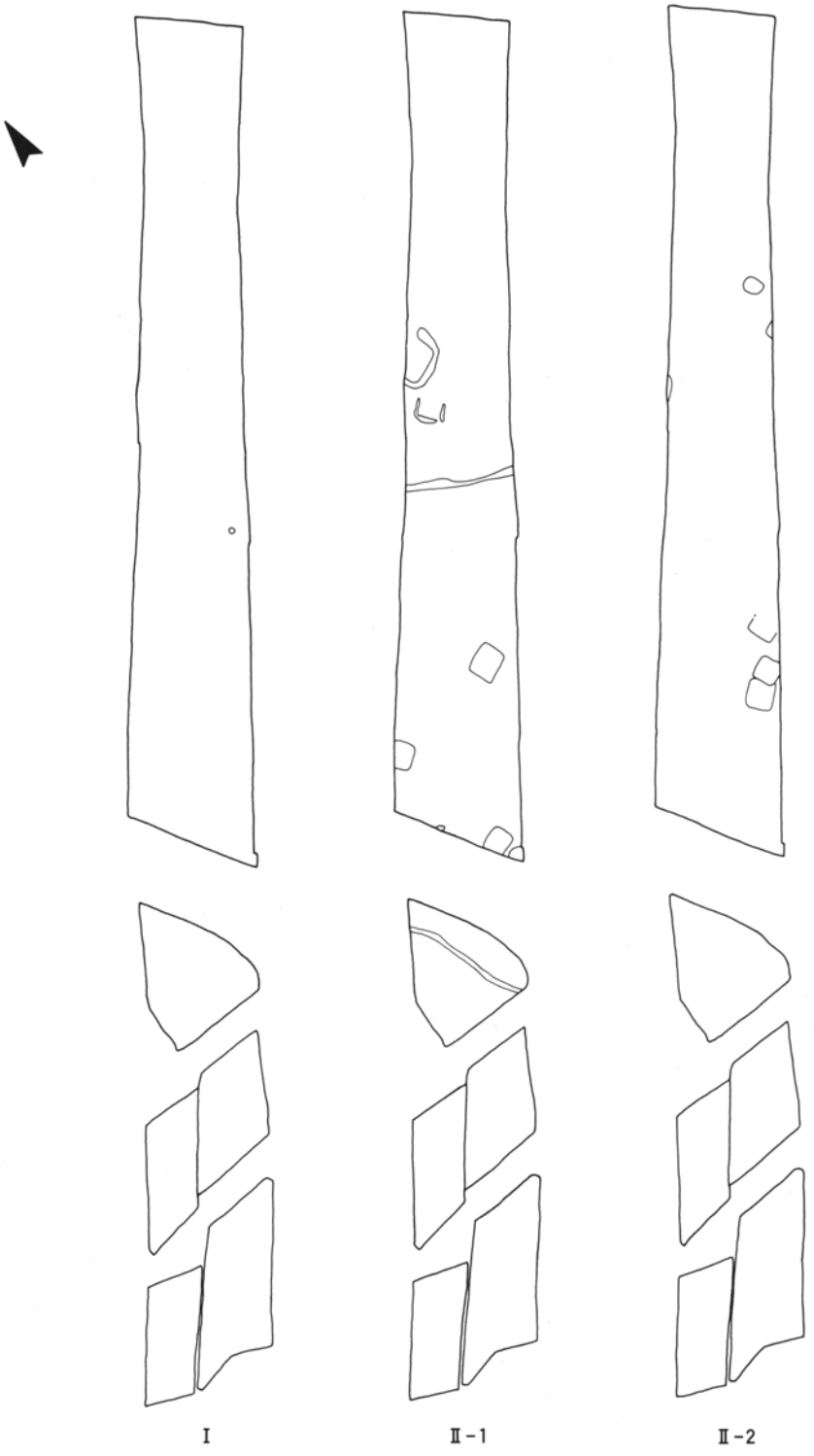
Ⅲ－2　9世紀後半から10世紀代の時期である。灰釉陶器の編年で数時期を含む。B・C区には、黒笹14号窯式から折戸53号窯式までの灰釉陶器を出土する土坑がⅢ－1期の遺構

群に混在するが、掘立柱建物及び竪穴住居等の建物は確認できない。X区で、黒笹14号窯式併行期の竪穴住居を検出したが、X・A_1区の他の竪穴住居は、Ⅲ－1期である。遺物は各調査区で検出されることから、中位・下位の段丘面に同時期の遺構が展開していると推測されるが、出土量からしてⅢ－1期に比較するとかなり希薄と考えられる。

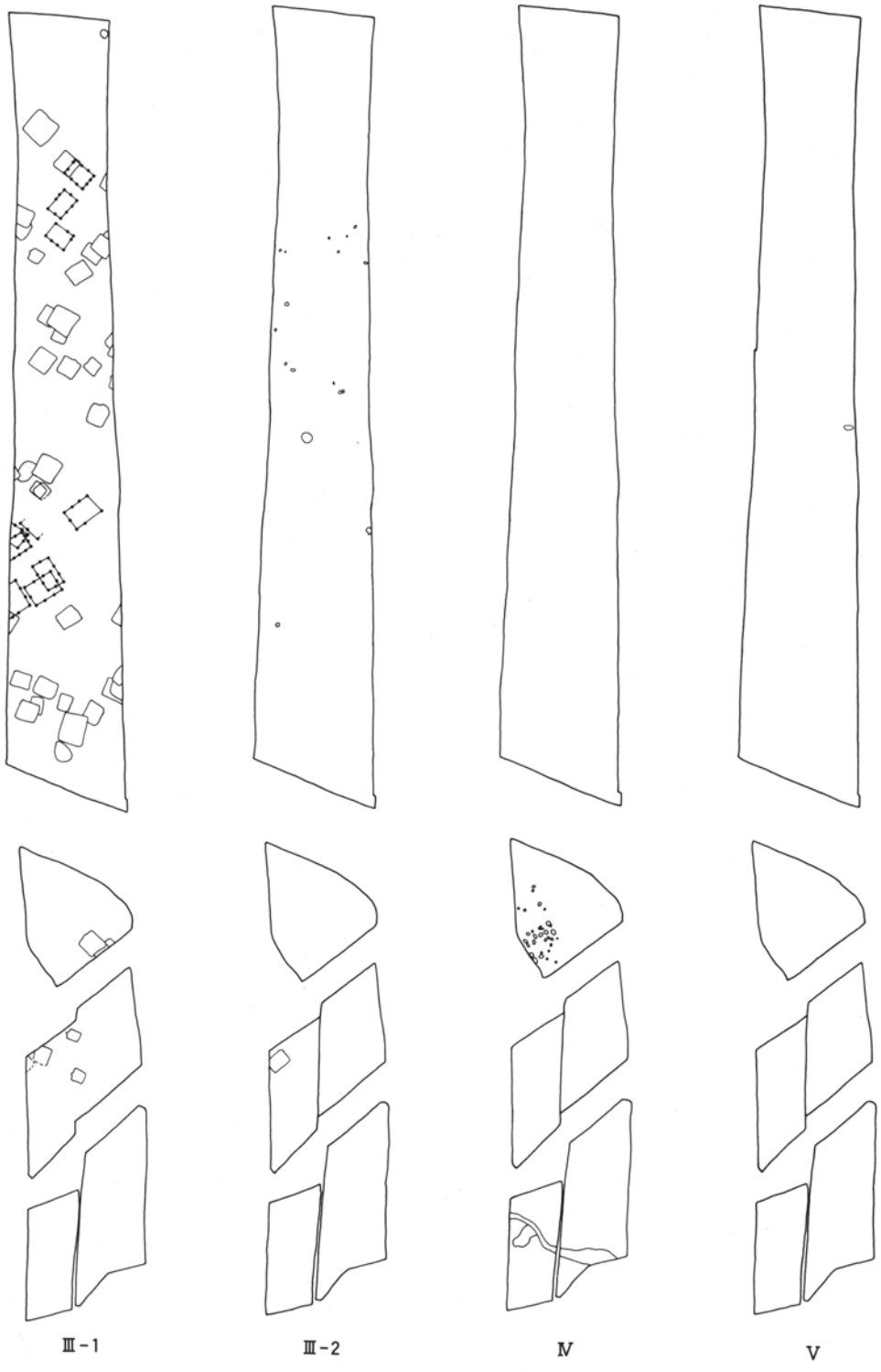
Ⅳ期　13世紀代と16世紀代の2時期に細別される。A_2・A_4区では、13世紀代の遺物が少量出土し、基盤にまで達する溝・土坑が検出されている。現在の水田面から基盤までに数時期の水田の水平堆積層が認められることから、中世初期の耕地に伴う用水路と考えられる。下位段丘面は、現在も集落が形成されており、X区の土坑群は、中世末期の掘立柱建物の柱穴と考えられる。中世においては、下位段丘面に屋敷地が存在し、野田川河谷には水田等の耕地が形成されていたものと推測される。

Ⅴ期　18世紀前半の土坑が1基存在し、出土遺物の性格、遺構から墓坑と考えられる。調査区内には、同様の性格の遺構は存在しないが、中位段丘面上に位置する杉山遺跡では数基がまとまって検出されており、単独ではなく、検出された地区付近の調査区外にこの時期の墓坑が存在する可能性がある。

以上のように諏訪遺跡の遺構は変遷するが、平安時代以前において、遺構が集中して形成されるのは、Ⅱ・Ⅲ期の短期間である。弥生時代後期に集落が形成されるが、古墳時代の遺構は検出されず、断絶し、奈良時代後半まで形成されることはない。Ⅲ期には、一時期に諏訪遺跡の立地する段丘面上に広く竪穴住居と掘立柱建物が混在する建物群が成立するが、平安時代初期までで、以降の遺構は検出されてはいるが、集落としては継続しない。中世以降は、野田川河谷が耕地化されるなど、周囲が開発され、段丘上には調査区内の位置に、時期によって屋敷地が形成され、現在と共通した集落・耕地のあり方が認められる。



第47図　遺構変遷

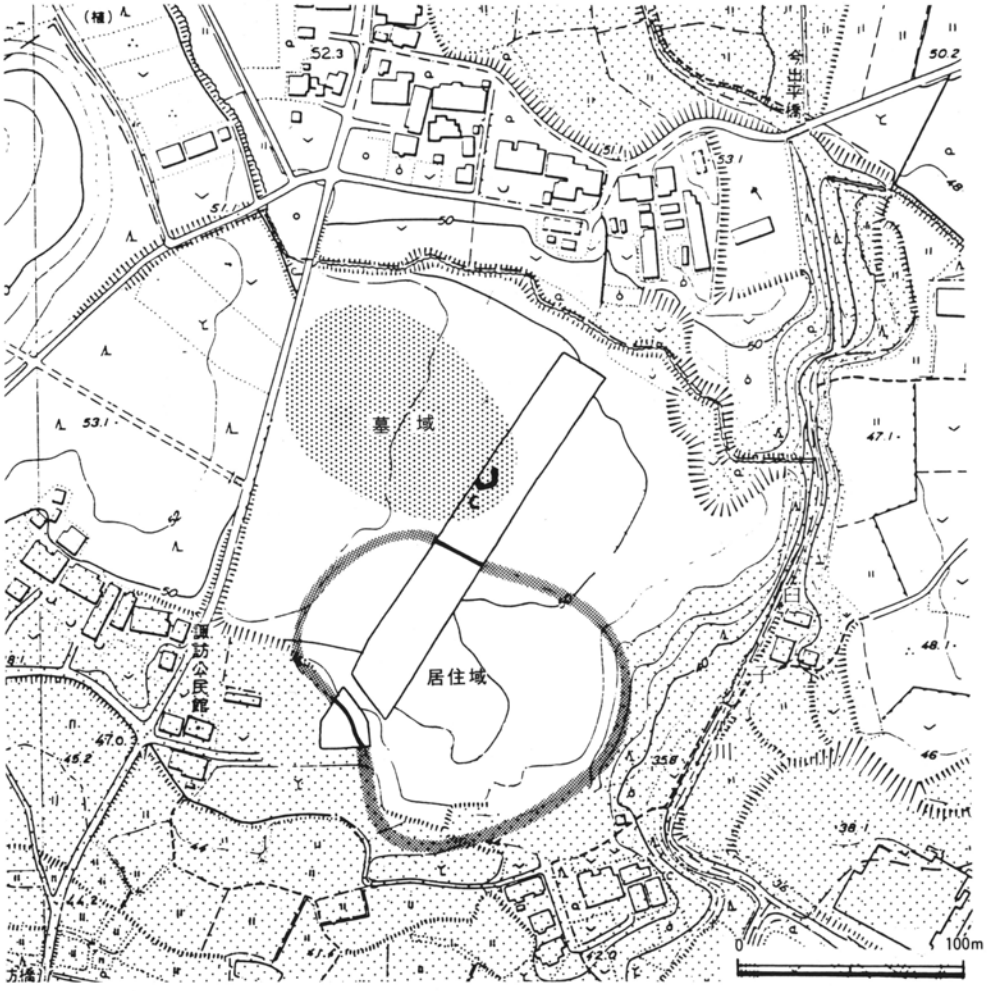


第48図　遺構変遷

2．II期の集落

ここではII期の遺構から、弥生時代後期の集落の構成について検討する。

この時期の２本の溝ＳＤ01・04は直線距離で約100m離れ、ＳＤ04は段丘の奥部、ＳＤ01は段丘崖下に位置するが、断面形状、復元した場合の規模は近似している。出土遺物の大部分はII－２期に属すが、ＳＤ01は調査区西壁の２層の埋土の上層中、ＳＤ04は東端部分の２層の埋土の上層中からの出土である。ＳＤ01の場合、溝底部より0.8～1.0m、ＳＤ04は、0.6～0.7m程度上でII－２期の土器群が検出され、溝の掘削後ある期間を経て埋積し、溝としての機能を失った状況で遺物が廃棄された状況を示す。溝内の出土遺物が、II－１期以前のものを含まず、竪穴住居との時期的な関係より、２本の溝ともII－１期に属すと推定される。この時期、竪穴住居は両溝間にのみ存在し、住居群がこれに画されることか



第49図　II期集落概念図

ら、いわゆる環濠としての機能を有するものと推測され、その内部は居住域と考えられる。

調査区内では、溝の方向性・連続性は部分的にしか明らかにしえないが、環濠によって居住域が形成されることを前提とした場合、ある程度推測が可能である。(第49図) ＳＤ04は大概、段丘の縁に対して平行で、東方向は直線的に延びて臼子川の河谷のやや屈曲する部分に至る。ＳＤ01は、Ｘ区において段丘の縁に対して崖直下より６～７ｍ程度離れて、これに沿って走るという特徴をもつ。ゆえに東方向は、段丘のやや突出した部分を廻り、ＳＤ04と同様に臼子川河谷に至る。居住域の東辺を画す臼子川河谷は、中位段丘と臼子川との比高差10数ｍの急傾斜地であり、環濠の代替としての機能を有することから、ＳＤ01とＳＤ04の推定部分が結合するかは不明である。ＳＤ01の西方向は、段丘崖が急角度で溝が崖面を段丘上に上らず、崖に並走すると考えられる。崖は、西へ100ｍほど続き、中位段丘は上位段丘へと移行することから、ある程度のところでとまり、段丘上のＳＤ01が、西方向へＳＤ04の終息部分に向って廻り居住域の西辺を画すと考えられる。

以上の推定から、Ⅱ－１期の居住域は豊川に対して舌状となる中位段丘の南東の先端部に占地し、南北120ｍ、東西100ｍ以上の区域となる。ＳＤ04の北側の段丘奥部には方形周溝墓が２基存在し、Ⅱ－１期の居住域に対応する墓域の一部と考えられる。北方向と東方向に展開しないことから、居住域の北西方向の段丘奥部に占地すると推測される。

Ⅱ－２期には、竪穴住居のみが検出され、Ⅱ－１期の居住域の部分にも存在するが、ＳＤ04の北側にも出現し、前時期の居住域から変化する。溝は意義を失ない、土砂で埋積したことによって機能が消滅したものと推定され、また、墓域内にも竪穴住居が存在することから、居住域の変化にあわせて墓域の変化が認められる。この時期、一時的に成立した環濠集落の構成が変動し、既に解体した状況にある。

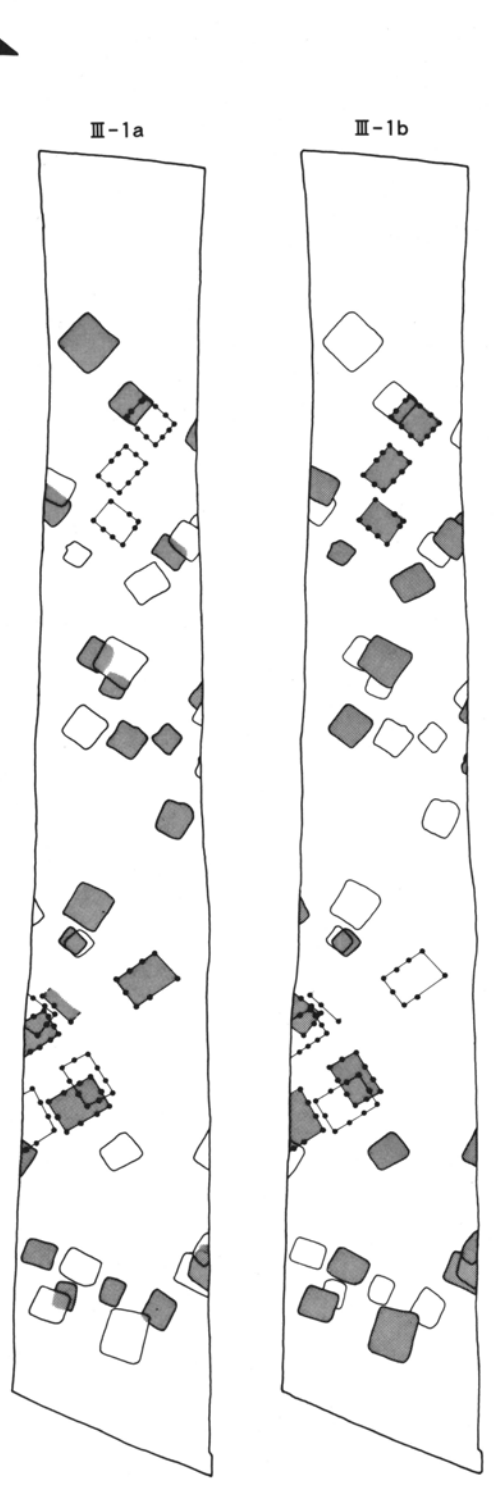
Ⅱ－１期のＳＤ01・04を環濠として防御の機能を考える点において、平坦な段丘面をＳＤ04によって画することについては必要性が認められるのに対して、ＳＤ01の場合、居住域の南辺から東辺は段丘崖及び河谷であり、崖直下より数ｍ離して溝を廻らすことは、その機能に関しては必要性が考えられない。また、溝の全容が明らかでないが、高低差がある位置の溝が一本として結合することの必要性なども問題となる。Ⅱ－１期の遺構の分布から、今回の調査部分は、居住域の北西部分、墓域の東端であり、中心部分から外れた区域である。居住域・墓域の実態は、今後の中心部の調査によって明らかになる部分が大きい。Ⅱ－２期は、調査区内において集落としての構成を考える材料が少ない。環濠の消滅後も同地域を占地していることから、前時期と共通した集落立地を行なう状況にあったことが推察される。なお、Ⅱ期の集落に伴う水田・陸耕を含めた耕地の存在は、判断の材料が少なく、解明すべき問題点として残る。

3．Ⅲ期の集落

Ⅲ期の遺構の大部分を占め、集落として一体をなしていると考えられるＢ・Ｃ区のⅢ－１期の竪穴住居、掘立柱建物について検討する。

Ⅲ－１期は、８世紀後半から９世紀前半としたが、８世紀代に大部分の遺構が属す。遺構の多くは、良好な一括遺物は少なく、遺構に伴う遺物が無い例もあり、明確に時期決定できない竪穴住居も存在する。出土遺物が細かい時期認定に不十分であり、他の遺構と切合関係にないため、型式的に同時期の出土遺物の遺構間の先後関係及び同時存在が確定できない場合もあることなどが問題となるが、この時期の遺構をⅢ－１ａ（古）Ⅲ－１ｂ（新）の２期に区分する。これは、建物群のａ切合関係　ｂ方向性　ｃ配置関係　ｄ形態的な類似　による相対的な新旧関係である。（第50図）

Ⅲ－１ａ、竪穴住居20棟、掘立柱建物４棟がこの期に属し、Ｂ・Ｃ区全体に建物群が広がる。Ｂ区南部のＳＢ112・116・117・119は南北軸が他の竪穴住居と比較してやや西へ大きく傾き、段丘の縁に対して平行する関係にある。中央部ＳＢ015・016・021は、他の竪穴住



第50図　Ⅲ－１期遺構変遷

居において竈が確認される例では北壁に位置するのに対して、東壁にあるという共通した構造をもつ一群である。C区の北部に位置するＳＢ001・002・003は軸の方向及び配置から一群をなす。掘立柱建物については、B区の中央部にＳＢ125・126・128・130が存在し、そのうち3棟の桁行が、ほぼ東西方向にあるという特徴をもつ。

Ⅲ－1ｂ　竪穴住居17棟・掘立柱建物6棟がこの時期に属す。B区の南部に、ＳＢ113・116・119が存在し、前期と同様な軸方向をもつ。B区中央から北部にかけてこの期の竪穴住居は少なく、C区南半には前期にひき続き一群が存在する。C区北部には、この期の竪穴住居は存在しない。掘立柱建物は、B区中央に前期と同じ位置に重複して、ＳＢ127・131・140からなる建物群があるが、桁行が南北方向となる。また、C区中央に、ＳＢ023・024・127からなる掘立柱建物群が出現する。B区の前期の掘立柱建物群及びこの時期のＳＢ130・131は、南北軸が真北に近く、竪穴住居とは明らかに方向性を異にするのに対して、C区のこの期の一群は、南北軸が西へ傾き、竪穴住居群と同じ方向性をもつ。

Ⅲ－１ａ・１ｂの建物相互の同時性は、現段階では厳密に検証しえず、切合関係にある遺構を1時期に含むなど、細かい問題はあるが、一定の傾向を示すことが可能である。竪穴住居は、配置関係において相互に一定の距離をおきながら、大概軸方向を同じくして3棟以上で群をなすことが認められる。これは、１ａ期の竪穴住居の竈を同方位の壁に有する一群に示され、B区の南部の群のように2期に渡って、地形に沿う形で他の建物群と若干方向を異にする群が同位置に継続することからも明らかである。このことは、掘立柱建物群にも顕著で、1b期の南北2群は群相互で南北軸の傾きが異なる。竪穴住居と掘立柱建物の関係についていえば、群単位である程度の距離を保って混在しないことが認められる。

Ⅲ期の遺構のＢ・Ｃ区での範囲は、南北方向は明らかであるが、調査区は中位段丘上に広がる遺構群のほぼ中央に位置するため、その東側と西側との関係から、調査区内に認められる群構成は不確定なものであり、今後さらに検討する必要がある。　（酒井俊彦）

第Ⅵ章　まとめ

今回の調査によって、豊川中流域の原始・古代の様相の一端を示す新たな成果を得ることができたと思われる。

これまで述べたように、諏訪遺跡のⅠ期からⅤ期まで分けた中で中心となるのは、Ⅱ期の弥生時代後期とⅢ期の奈良時代から平安時代初期にかけての時期である。弥生時代の集落は、東三河地域では豊川下流域である程度類推できるような形で環濠の一部などが検出されてきたが、環濠に囲まれた建物群と方形周溝墓すなわち居住域と墓域が具体的な形で検出されたのは、今回の調査が初めてである。後期前半に成立した環濠は後半には解体し、以降は集落が消滅するという過程をたどるが、この地域全体のこの期の遺跡の動向と関連させて検討することが課題である。また、この期の出土遺物に関しては、当地域が遠江地方に近接しており、一定の交流関係を示す様相をもち、また、長野県南部地域の影響が認められるなど、東三河地域の中でも独自の性格が窺われる。集落遺跡の関連資料の増加を待ちたい。

奈良時代から平安時代の時期については、Ⅲ－１期とした奈良時代後半から平安時代初頭の竪穴住居と掘立柱建物によって構成される集落が明らかになったが、全体像については示し得ず、近接部分及び周辺の調査に待つ部分が大きい。この時期の遺跡では、律令制下における郡・郷といった当時の集落と関係する行政単位、及び、条里制などの土地制度との関連が問題となる。諏訪遺跡において建物群が短期間に集中して出現する８世紀後半の時期に新城市の豊川右岸は宝飫郡に属すが、その後10世紀初頭に宝飫郡から割かれた設楽郡に含まれる。これは、豊川上・中流域の開発の進展による人口増を反映したものと考えられる。宝飫郡の段階では、諏訪遺跡の集落の属す郷に関しては不明であるが、設楽郡において、新城市街を中心とした地域に設楽郷が存在したことが通説となっている。おそらく、８世紀後半の時期にも設楽郷としての実体は存在したと考えられるから、諏訪遺跡近辺の集落もこれを構成するものであったと推測される。奈良時代において、律令制が確立し、開発が進むなかで、一時的に成立した集落という性格が強い。現在、条里制が確認されているのは、宝飯郡に属す現在の一宮町までで、諏訪遺跡の周辺には認められないが、土地開発において何らかの関連はあるものと予想される。文献史学的な調査とともに古代集落に関する考古学的資料の蓄積が望まれる。　（酒井俊彦）

杉山端城跡

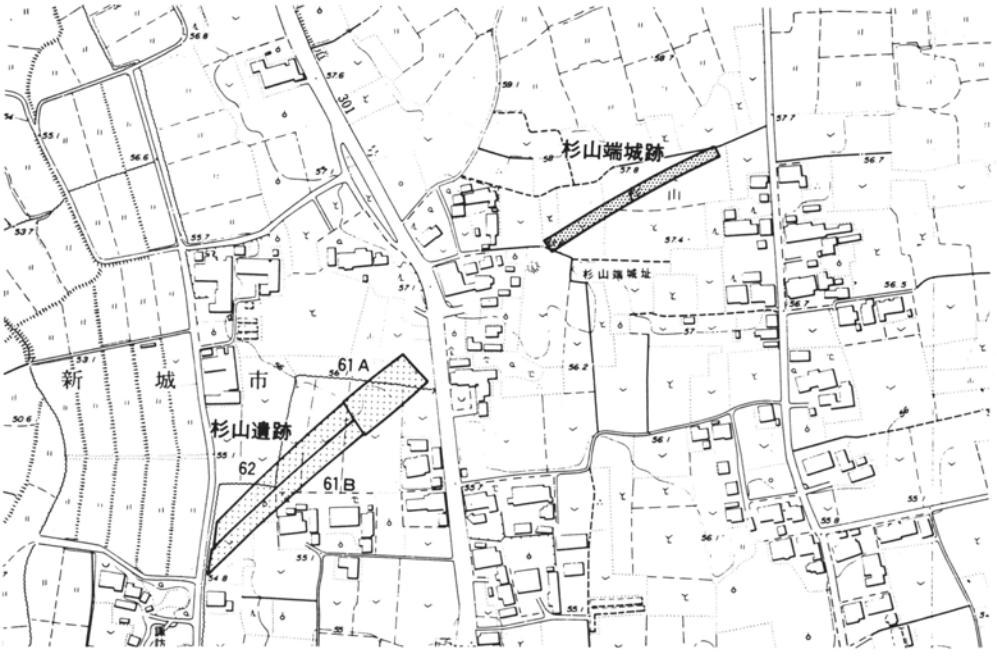
第Ⅰ章　調査経過

1．調査の経緯

(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、一般国道151号線新城バイパスの建設工事の事前調査として、昭和61年度より杉山遺跡（昭和61･62年度）、諏訪遺跡(昭和62年・63年度)の発掘調査を実施してきた。

今回の杉山端城跡（新城市杉山地内）も、一連の新城バイパス建設工事の事前調査として、まだ未完成の２車線分を対象に、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、当センターが実施したものである。調査期間は、昭和63年５月から７月まで、調査面積は1000㎡である。

調査に際しては、黒色土までを重機により除去した後、手掘りで掘り下げて遺構の検出を行うという方法をとった。後述のように、耕作土下の黒色土（いわゆる黒ボク土）内は遺構の検出が困難で、元来が無遺物層のため杉山遺跡・諏訪遺跡等の調査の経験をふまえて、黒色土層を除去し、基盤である黄褐色土層(中位段丘)の上面で直接遺構の検出を行った。



第１図　調査区位置図　1/5000

2．遺跡の立地と環境

今回、調査を実施した杉山端城跡は、新城市街地の南西、愛知県新城市大字杉山字端城地内を中心とした一帯に所在する。この地は豊川右岸に展開する河岸段丘の中位面にあたり、この段丘崖から少し奥部に入ったところである。標高は57.5m前後である。

今回の調査区の南、国道151号線新城バイパスをはさんだ反対側に杉山端城跡がある。現在は一面の茶畑となっており、道路際に、「杉山端城址」と刻まれた石碑が建てられている。杉山端城は、幅4間の土塁、同じく幅4間の堀に囲まれた、一辺が50mほどの方形の敷地に営まれた城というより居館の跡である。杉山端城の周辺には、端城の土塁の軸方向に沿った形で、「道」が展開しており、城を中心とした、ある意味での方格地割の存在が推定されている。また、城址からは、室町時代末期（戦国時代、16世紀後半）ばかりではなく、13世紀～16世紀代にかけての時期の遺物がみられることが確かめられている。後述のように、今回の杉山端城跡の調査では、城跡の堀の跡と思われる遺構は検出できなかった。しかし、国道301号線を隔てて杉山端城跡の反対側に所在する杉山遺跡から、鎌倉時代～室町時代にかけての遺構が検出されたことと考え合わせて、今回の調査で同じ時期の遺構が検出されたことは、杉山端城の周辺の方格地割の存在を証明する事実として注目される。

ここで、杉山端城跡の周辺に所在する城跡について触れておく。杉山端城跡の南西約1kmのところに道目記城址（杉山村古城とも呼ばれ、度々目記城と書かれることもある。）がある。さらに、南西約3kmのところに、天正3年（1575年）、武田勝頼軍と織田信長・徳川家康の連合軍との長篠の合戦で歴史上有名な野田城址がある。また、南東約1.5kmのところには、天正4月（1576年）長篠の合戦の戦功により、長篠城主奥平信昌が築いたとされる新城城址がある。

（安井俊則）

第II章　遺　構

調査区の地表面の標高は、北端で57.7m、南端で57.3mをはかり、南西に位置する杉山遺跡より１mほど高くなっている。今回の調査区は、以前、桑畑・菜畑であったところであるが、調査時点では草生地化していた。

１．基本層序

調査区の層序は、基本的に上から、Ⅰ耕作土層（0.3～0.5m）、Ⅱ黒色土層（いわゆる黒ボク土－0.3～0.6m）、Ⅲ黄褐色土層（中位段丘面、基盤）の順で、東側ほど耕作土層が厚くなる。遺構は、壁面での断面観察ではいずれもⅡの上面で検出が可能であるが、黒色土中における平面での検出は困難で、遺構の検出は、基盤層の上面で行なうしかなかった。

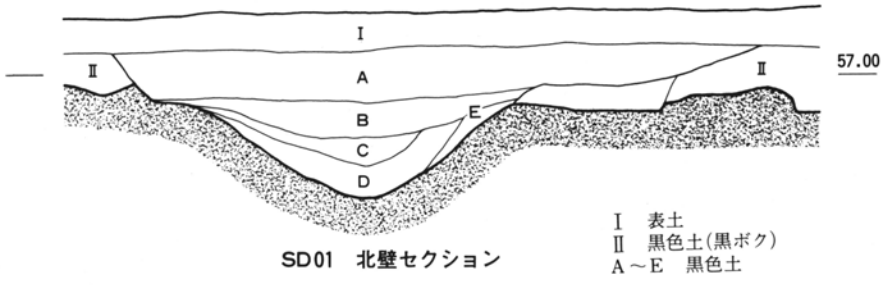
２．遺構

今回の調査で検出した遺構は、溝状遺構（６条）、土坑（２基）である。これらの遺構は、出土遺物、埋土、遺構の相互関係からみて、⑴鎌倉～室町時代、⑵江戸時代、⑶近・現代の３時期に分けることができる。以下、各時期ごとに説明する。

⑴　鎌倉・室町時代の遺構

調査区南側で、溝条遺構１条が検出された。

ＳＤ01　調査区南側で検出された幅1.6～1.8ｍ、深さ0.7ｍ（壁断面観察では幅2.5ｍ、深さ0.8m）の溝状遺構である。断面形は「Ｖ」字～逆梯形状を呈する。走向方位は、Ｎ－83°－Ｗで、杉山遺跡の北端で検出されたＳＤ02（幅1.8m、深さ0.7m、走向方位Ｎ－82°－Ｗ）とほぼ平行している。埋土は、上面が黒色土で（耕作土との境で中世土器の皿１点が出土）下面が基盤の黄褐色土のブロックを含む黒色土である。底面に接するように灰釉系



第２図　基本層序

陶器の椀類の破片（13世紀代）が数点出土した。

(2) 江戸時代の遺構

調査区中央よりやや南よりから、２条の溝状遺構が検出された。

ＳＤ02 ＳＤ01の北側５ｍに位置する幅0.8～1.2m、深さ0.3m（壁断面観察では幅1.2m、深さ0.5m）の溝で、「Ｌ」字状にゆるやかに屈曲している。断面形は「Ｕ」字状を呈する。走向方位は、Ｎ―60°―Ｗ～Ｎ―80°―Ｅである。埋土は、上面が耕作土が混じり灰褐色を呈する黒色土で、下面が粘質の黒色土である。上面から中世土器の皿・鍋の破片、灰釉系陶器のすり鉢の破片等が出土した。

ＳＤ03 ＳＤ02の北側約５ｍに位置する幅1.8～2.0m、深さ0.7m（壁断面観察では幅3.2m、深さ1.0m）の溝で、北側に弧を描くように湾曲している。断面形は「Ｕ」字状を呈する。埋土は、上面が耕作土と黒色土が混じった灰褐色土で、下面が基盤の黄褐色土のブロックを含む黒色土である。上面から、中世土器の羽釜・鍋の破片、灰釉系陶器の甕の破片等が出土した。

(3) 近・現代の遺構

調査区南側で土坑１基、中央から北側で溝状遺構３条が検出された。

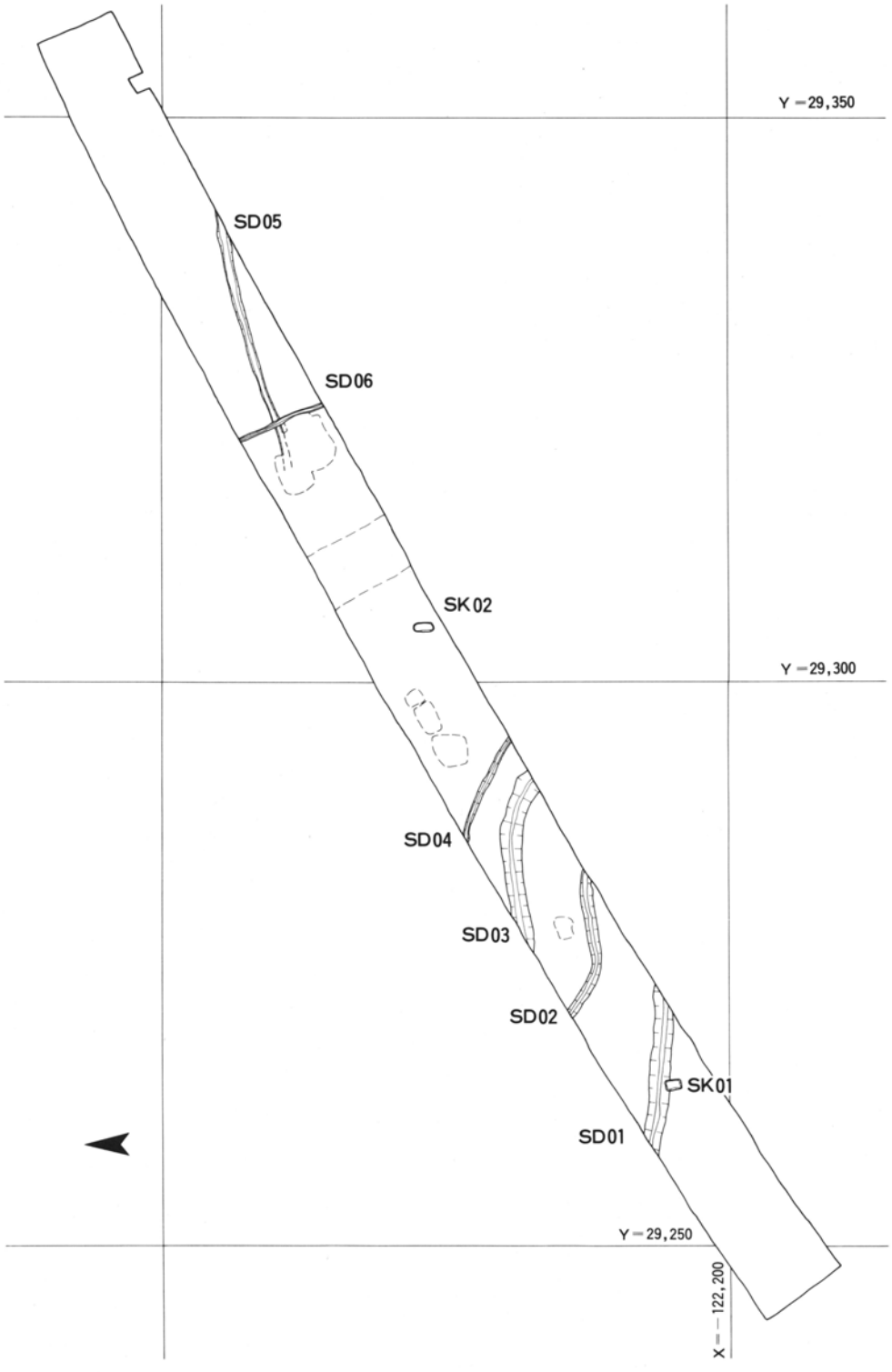
ＳＫ01 長径1.4m、短径0.9m、深さ0.1ｍの矩形の土坑で、長軸をほぼ南北に向けている。ＳＤ01を切っている。埋土は粘質の黄色土（客土）である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ04 ＳＤ03の北側約３ｍに位置する幅0.4m、深さ0.1ｍの溝である。壁面の断面観察によると、耕作土中から切りこまれた幅2.4m、深さ0.5ｍの溝となる。断面形は「Ｕ」字状を呈する。走向方位は、Ｎ―65°―Ｗで、埋土はシルトを含む灰黄色土である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ05 調査区北半に位置する幅0.8m、深さ0.1ｍの溝状遺構で、ＳＤ06に切られている。断面は逆梯形状を呈する。走向方位はＮ―75°―Ｗである。埋土は、灰褐色を呈する耕作土である。西側は、重機等による攪乱で破壊されてしまっている。

ＳＤ06 調査区中央やや北側に位置する幅0.4m、深さ0.2ｍの溝で、ＳＤ05に直交する形で、ＳＤ05を切っている。断面形は逆梯形状を呈する。走向方位はＮ―25°―Ｗで、以前の畑の境界とほぼ同じ方向を示している。埋土は、細かな礫を含む灰黄色の砂である。西壁は、重機等による攪乱でほとんど破壊されてしまっている。

その他、時期不明の遺構として、土坑１基（ＳＫ02）が調査区中央部から検出されている。長軸が1.7m、短軸が0.9m、深さが0.3ｍの隅丸方形を呈する土坑である。方向は、長軸をほぼ真北に向けている。埋土は、上面が耕作土が混じり暗褐色を呈する黒色土で、下面が基盤である黄褐色の細かいブロック（0.5～1.0㎝）を多量に含む黒色土である。土器等の遺物は検出されなかったが、底近くから性格不明の鉄片が出土している。（安井俊則）



第３図　遺構全体図　1/600

第Ⅲ章　遺　物

今回の発掘調査により出土した遺物には、中世土器、灰釉系陶器、施釉陶器類がある。全体に遺物の出土量は少なく、遺構以外からもほとんど遺物は出土しなかった。上記の遺物は既述のように、(1)鎌倉時代～室町時代（杉山遺跡のⅡ期に相当）、(2)江戸時代の２時期にまとめることができる。以下、出土遺物について、遺構出土の遺物を中心に各時期の遺構ごとに説明する。

(1)　鎌倉時代～室町時代の遺物

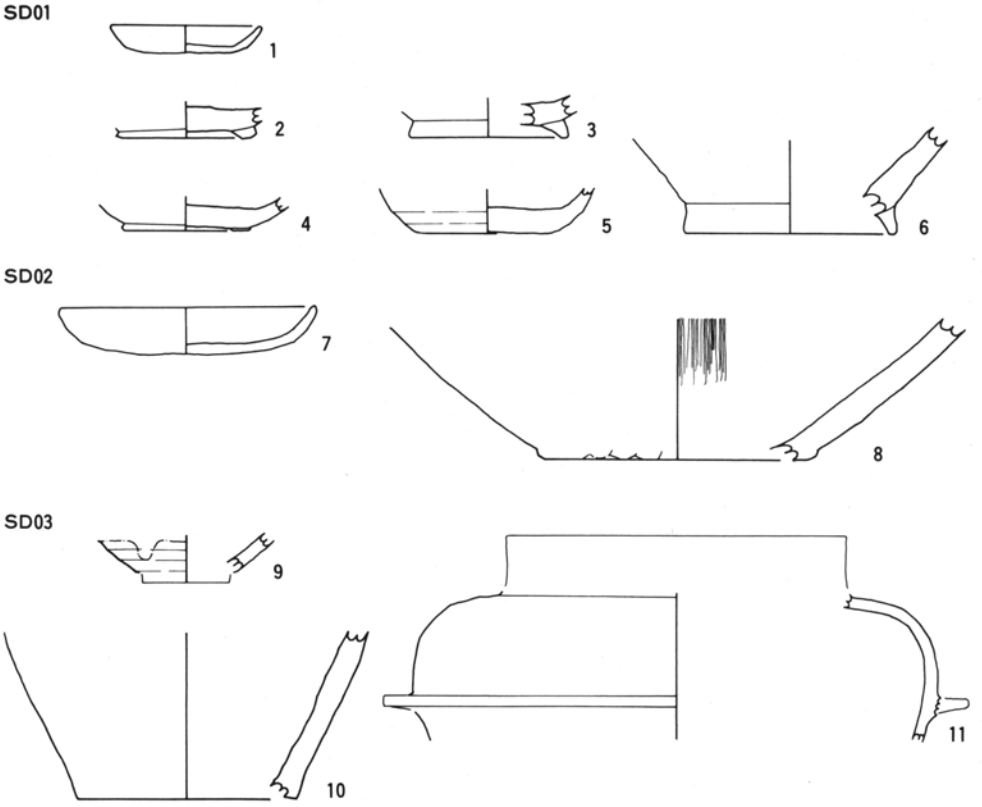
ＳＤ01（第４図１～６）　１は中世土器の皿である。口縁部は直線的に立ちあがり、広く平らな底部をもつ。内外面ともにナデ調整である。14～15世紀のものと思われる。２～５は灰釉系陶器の椀（山茶椀）の底部の破片である。２～４はいずれも粗雑なつくりの貼付高台を有し、高台端部に砂粒痕がつく。５は高台がつかず、糸切り痕をそのまま残す山茶椀で、体下半部は雑なヘラ削り調整がなされている。６は、鉢の底部片で、断面が逆梯形状の貼付高台を有する。外面は粗雑なヘラ削りがなされ、内面はナデ調整がなされているが磨耗がはげしい。また、図示できないが、小皿１片と甕が２片出土している。小皿は、糸切底の破片で、内底面に黄緑色の自然釉がかかっている。甕は胴部の破片で、斜格子目状のたたき目がめぐり、それを上から削りつけている。これらの灰釉系陶器類は、胎土・色調からみて、渥美窯（渥美半島）の第Ⅱ期終末から第Ⅲ期（13世紀代）にかけてのものに類似しているが、胎土の中に砂粒が多いこと、高台のない椀があることなどから、湖西古窯址群（静岡県遠江地方）の製品である可能性が強い。

(2)　江戸時代の遺物

ＳＤ02（第４図７～８）　７は土師器系の皿である。口縁部はゆるやかに内湾気味で、丸味をもつ底部との境は不明確である。内面はナデ調整がなされているが、外面は未調整のままである。つくりは厚手でやや大形である。杉山遺跡の調査結果によると、この手の皿（Ｆ類・ｂ手法）は、19世紀代（江戸時代末）の遺物に伴うことが多い。杉山遺跡Ⅲ期に相当するものである。８は、灰釉系陶器の擂鉢の底部破片である。櫛目は乱れているが16本である。常滑窯産の製品であるが、時期は特定できない。

ＳＤ03（第４図９～11）　10は常滑窯産の甕の底部片である。11は、つばの部分は欠損しているが、羽釜の上胴部の破片である。９は古瀬戸の灰釉椀の底部に近い部分である。

（安井俊則）

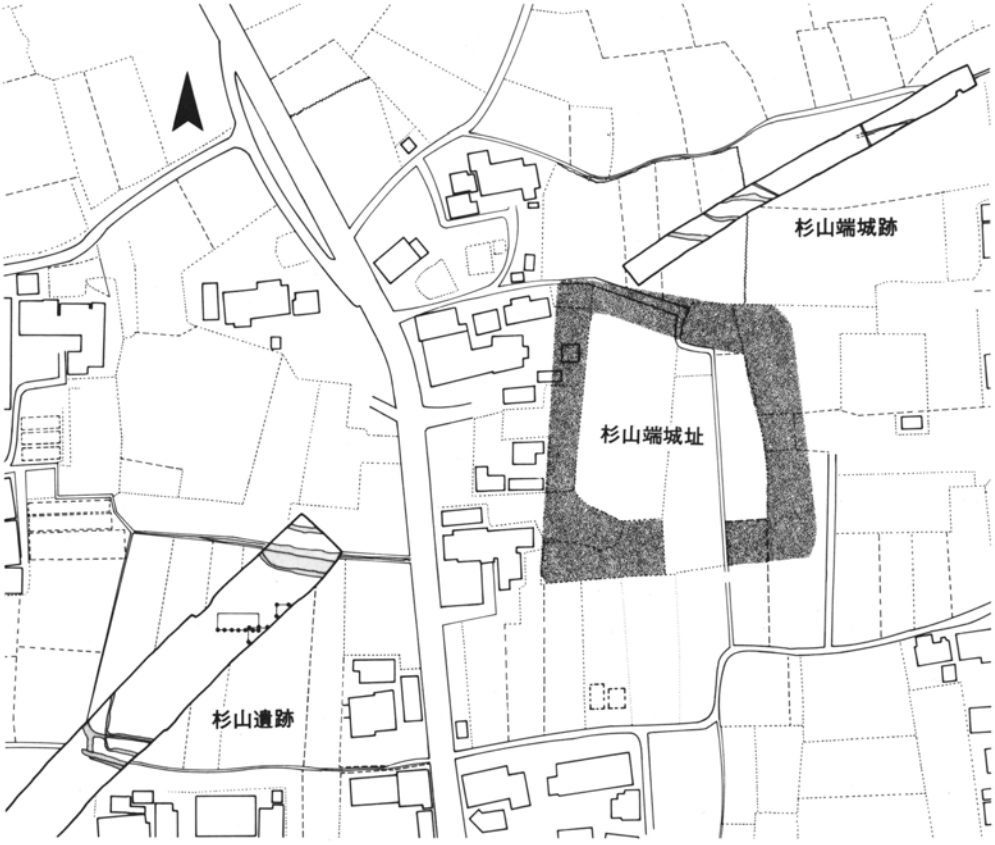


第4図　出土遺物　1/4

第Ⅳ章　まとめ

杉山端城跡に関して記された史料はたいへん少ない。「新城市誌」(昭和38年) にも、「参河国二葉松」三州古城記によるとして、「名称：杉山村端城、場所：杉山字端城、摘要：信濃守というものが、新城をこの端城に移すと伝えられる。それよりドドメキに移し、信州飯田に退行した。」とあるのみで、付載の「新城市誌年表」(昭和38年、新城市誌編集委員会」にも、杉山端城の名はいっさい登場しない。

現在、杉山端城と推定される地の道路際には、「杉山端城址」と刻まれた石碑が建てられており、敷地にあたる場所は一面の茶畑になっている。地元の古老の話によると、この国道151号線新城バイパスが完成する以前は、杉山端城の土塁の跡と思われる高まりがそのままのこっていたということである。この土塁跡は、幅4間あまりで方形にめぐっており、その外は同じく幅4間の堀が囲っていた。居館があったと思われる敷地は、一辺が50mほ



第5図　杉山端城位置関係図

どの方形で、南の方に口を開けていたという。これらの話と古絵図等から杉山端城の位置を推定したのが第５図である。図のアミを伏せた部分が土塁と堀の跡である。また、杉山端城の周辺には、端城の方位に沿った「道」が展開しており、城を中心とした方格地割の存在の可能性が推定される。

今回の杉山端城跡の発掘調査は、この端城跡の土塁ないしは堀の存在の検出を目的に実施されたが、残念なことにそれらの遺構は検出されることができなかった。おそらく堀の北西隅は、第５図で推定したように、発掘区の南、現在コンクリートが張られ駐車帯となっている場所の下に埋もれているのであろう。

ところで、杉山端城の敷地と推定される場所を歩いてみると、室町時代末期（戦国時代、16世紀後半）の時期の遺物はもちろん、13世紀～16世紀代の時期の遺物まで採集できる。ということは、杉山遺跡の北端で検出されたII－ａ期の遺構（掘立柱建物跡・溝条遺構）と今回の調査区南端で検出された、同じII－ａ期の遺構との間に、杉山端城につながる何らかの施設が存在したことを推定させる。しかも、杉山遺跡のII－ａ期の溝であるＳＤ01・ＳＤ02と、今回の杉山端城跡の溝であるＳＤ01が、100ｍほど離れているとはいえ、同じ方向（杉山端城の軸方向ともほぼ平行する）を示し、さらに、杉山遺跡のII－ａ期の溝状遺構であるＳＤ01・ＳＤ02が、杉山端城の時期であるII－ｂ期（15世紀代～16世紀代）までそのまま存続しているという事実を考えると、杉山端城の周辺に、道に沿った、端城を中心とした方格地割の存在さえ推定させる。

しかし、実際には、II－ａ期（13世紀代～14世紀代）に展開していた、溝状遺構によって区画された掘立柱建物等の遺構を破壊することで、杉山端城を築いていったと考える方が可能性が高いように思われる。ここでは、杉山端城を中心とした方形地割の存在の可能性があると言うにとどめたい。　　（安井俊則）

〔註〕

(1) (財)愛知県埋蔵文化財センター　1988『杉山遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第５集)

(2) 赤羽一郎・小野田勝一　1977『常滑・渥美』(日本陶磁全集８) 中央公論者
田原町教育委員会　1971『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡』

(3) 新城市誌編集委員会　1963『新城市誌』

出土遺物一覧表

※法量単位cm

遺物番号	登録番号	種別	器高	口径	体径	底径
1	62B-103	縄文土器	——	——	——	——
2	62C-82	〃	——	——	——	——
3	62C-93	〃	——	——	——	——
4	62C-81	打製石斧	——	——	——	——
5	62B-164	〃	——	——	——	——
6	$62A_3$-2	弥生土器 壺	——	——	——	——
7	$62A_3$-3	〃	——	——	——	——
8	$62A_3$-4	〃	——	——	——	——
9	$62A_3$-5	弥生土器 甕	——	——	——	——
10	$62A_4$-3	弥生土器 壺	——	——	——	——
11	$62A_4$-4	〃	——	12.6	——	——
12	$62A_3$-1	弥生土器 高杯	——	——	——	6.2
13	62B-59	〃	——	11.4	——	——
14	62B-58	〃	15.2	11.0	——	11.1
15	62B-61	弥生土器 高杯	——	——	——	19.6
16	62B-63	〃	——	——	——	11.0
17	62B-62	〃	——	——	——	19.4
18	62B-64	〃	——	——	——	18.8
19	62B-60	〃	——	——	——	13.2
20	62B-66	弥生土器 鉢	7.9	18.1	——	6.0
21	62B-50	弥生土器 甕	13.3	10.1	——	6.5
22	62B-56	〃	——	21.0	——	——
23	62B-54	〃	——	19.2	19.0	——
24	62B-53	〃	——	21.4	24.0	——
25	62B-52	〃	——	17.8	20.4	——
26	62B-55	〃	——	18.5	20.9	——
27	62B-51	〃	21.0	20.0	18.8	——
28	62B-57	〃	——	——	——	——
29	62B-91	弥生土器 高杯	10.1	9.0	——	9.0
30	62B-92	〃	——	——	——	10.4
31	62B-93	〃	——	——	——	——
32	62B-95	弥生土器 甕	——	20.0	23.4	——
33	62B-12	弥生土器 壺	14.7	9.2	10.8	——
34	62B-13	〃	——	——	13.4	5.0
35	62B-14	〃	——	10.9	——	——
36	62B-15	〃	——	15.5	——	——
37	62B-16	〃	——	——	——	6.0
38	62B-48	弥生土器 鉢	7.2	17.4	——	5.0
39	62B-35	弥生土器 高杯	——	13.6	——	——
40	62B-32	弥生土器 高杯	17.2	21.9	——	10.1
41	62B-33	〃	——	21.6	——	——
42	62B-34	〃	——	22.6	——	——
43	62B-41	〃	——	——	——	10.5
44	62B-37	〃	——	——	——	8.3
45	62B-36	〃	——	——	——	9.0
46	62B-42	〃	——	——	——	——
47	62B-39	〃	——	——	——	9.4
48	62B-38	〃	——	——	——	12.8
49	62B-46	〃	——	——	——	——
50	62B-44	〃	——	——	——	13.2
51	62B-43	〃	——	——	——	12.3
52	62B-45	〃	——	——	——	14.8
53	62B-24	弥生土器 甕	——	18.5	——	——
54	62B-20	〃	——	18.5	——	——
55	62B-22	〃	——	22.3	——	——
56	62B-23	〃	——	21.7	——	——
57	62B-21	〃	——	21.7	——	——
58	62B-18	〃	——	16.9	18.2	——
59	62B-19	〃	——	24.2	28.2	——
60	62B-17	〃	16.2	14.3	13.2	7.0
61	62B-27	〃	——	——	——	7.3
62	62B-28	〃	——	——	——	8.6
63	62B-31	〃	——	——	——	——
64	62B-26	〃	——	——	——	8.0
65	62B-166	〃	——	——	——	7.8
66	62B-25	〃	——	——	——	9.0
67	62B-29	〃	——	——	——	——
68	62B-30	〃	——	——	——	——
69	62B-47	弥生土器 瓶	——	——	15.6	4.5
70	62C-34	弥生土器 壺	14.3	10.2	15.9	5.4
71	62C-35	〃	——	——	21.2	5.0
72	62C-36	弥生土器 甕	——	27.6	19.2	——
73	62C-37	〃	——	18.6	20.4	——
74	62B-122	弥生土器 壺	——	——	8.7	4.5
75	62B-117	〃	——	13.0	——	——
76	62B-116	〃	——	15.4	——	——
77	62B-115	〃	18.6	10.6	18.0	6.0
78	62B-119	〃	——	——	——	7.0

遺物番号	登録番号	種別	器高	口径	体径	底径
79	62B-121	弥生土器 壺	——	——	——	6.5
80	62B-120	〃	——	——	——	7.7
81	62B-118	弥生土器 高杯	——	——	——	6.6
82	62B-144	〃	——	22.0	——	——
83	62B-147	〃	——	——	——	——
84	62B-145	〃	——	13.9	——	——
85	62B-150	〃	——	——	——	——
86	62B-146	〃	10.8	14.8	——	11.6
87	62B-154	〃	——	——	——	9.6
88	62B-151	〃	——	——	——	10.6
89	62B-153	〃	——	——	——	10.9
90	62B-152	〃	——	——	——	11.3
91	62B-148	〃	——	——	——	13.5
92	62B-149	〃	——	——	——	12.2
93	62B-155	弥生土器 甕	——	12.4	12.1	——
94	62B-134	〃	——	14.6	15.3	——
95	62B-125	〃	——	16.2	18.7	——
96	62B-131	〃	——	19.6	——	——
97	62B-133	〃	——	17.6	——	——
98	62B-132	〃	——	20.0	——	——
99	62B-127	〃	——	18.4	22.2	——
100	62B-124	〃	——	22.0	24.4	——
101	62B-129	〃	——	18.5	25.2	——
102	62B-126	〃	——	18.4	21.7	——
103	62B-130	〃	——	25.0	28.1	——
104	62B-128	〃	——	18.6	22.6	——
105	62B-123	〃	——	20.6	26.7	——
106	62B-143	〃	——	——	——	10.5
107	62B-142	〃	——	——	——	9.8
108	62X-14	弥生土器 壺	——	——	——	——
109	62X-17	〃	——	8.2	——	——
110	62X-11	〃	12.8	11.0	——	5.2
111	62X-13	〃	25.6	——	——	——
112	62X-10	〃	16.0	10.2	13.6	5.6
113	62X-9	〃	28.5	11.0	25.2	26.0
114	62X-12	〃	14.5	16.8	18.9	6.2
115	62X-15	〃	——	——	——	3.8
116	62X-16	〃	——	——	——	4.4
117	62X-22	弥生土器 高杯	——	14.0	——	——
118	62X-23	弥生土器 高杯	——	13.0	——	——
119	62X-26	〃	——	——	——	14.0
120	62X-27	〃	——	——	——	11.8
121	62X-20	弥生土器 甕	——	——	——	7.0
122	62X-21	〃	——	——	——	9.0
123	62X-19	〃	——	15.3	——	——
124	62X-18	〃	——	10.4	19.8	——
125	62C-1	土師器・甕	28.3	20.0	26.8	——
126	62C-2	〃	23.8	28.4	36.4	15.1
127	62C-3	須恵器・蓋	——	16.8	——	——
128	62C-4	土師器・甕	——	28.1	——	——
129	62C-5	須恵器・蓋	3.5	15.9	——	——
130	62C-8	土師器・甕	——	25.4	——	——
131	62C-6	須恵器・杯	——	13.4	——	——
132	62C-27	〃	——	——	——	10.8
133	62C-9	須恵器・鉢	——	18.4	18.5	——
134	62C-10	須恵器・杯	——	13.0	——	——
135	62C-11	〃	——	——	——	10.0
136	62C-12	土師器・甕	——	21.7	——	——
137	62C-13	〃	——	23.8	——	——
138	62C-14	〃	——	29.0	——	——
139	62C-15	須恵器・蓋	——	16.4	——	——
140	62C-16	〃	——	16.3	——	——
141	62C-18	土師器・甕	——	23.0	——	——
142	62C-19	〃	——	25.0	——	——
143	62C-20	〃	——	25.0	——	——
144	62C-21	〃	——	27.6	——	——
145	62C-23	須恵器・蓋	3.8	15.0	——	——
146	62C-24	〃	——	16.0	——	——
147	62C-25	〃	——	14.3	——	——
148	62C-29	須恵器・杯	2.3	15.8	——	10.4
149	62C-27	〃	——	——	——	9.2
150	62C-28	〃	——	——	——	8.2
151	62C-26	〃	4.0	13.4	——	6.5
152	62C-30	須恵器・甕	——	28.0	——	——
153	62C-31	土師器・甕	——	25.8	——	——
154	62C-32	須恵器・杯	——	——	——	13.4
155	62C-33	土師器・甕	——	24.9	——	——
156	62C-38	須恵器・杯	3.6	15.1	——	10.1
157	62C-39	土師器・甕	——	23.4	——	——
158	62B-2	須恵器・蓋	2.9	13.1	——	——

遺物番号	登録番号	種　別	器高	口径	体径	底径
159	62C-42	須恵器・杯	3.8	12.0	——	6.2
160	62C-41	〃	3.6	12.3	——	9.0
161	62C-43	〃	4.0	12.3	——	6.2
162	62B-3	土師器・甕	——	19.2	——	——
163	62C-46	〃	——	19.2	——	——
164	62C-47	〃	——	27.2	——	——
165	62C-44	〃	——	27.6	——	——
166	62C-45	〃	——	27.7	——	——
167	62C-50	須恵器・蓋	2.3	14.4	——	——
168	62C-51	〃	——	15.1	——	——
169	62C-52	須恵器・杯	6.6	16.2	——	10.4
170	62C-53	須恵器・皿	——	17.9	——	——
171	62C-54	須恵器・蓋	——	14.8	——	——
172	62C-55	須恵器・甕	——	21.9	——	——
173	62C-56	土師器・甕	——	28.9	——	——
174	62C-57	〃	——	24.1	——	——
175	62B-7	須恵器・蓋	2.7	10.1	——	——
176	62B-8	〃	——	13.9	——	——
177	62B-9	須恵器・杯	4.0	13.3	——	7.0
178	62B-10	須恵器・盤	3.4	20.4	——	8.6
179	62B-11	土師器・甕	——	29.6	27.8	——
180	62B-67	須恵器・杯	——	16.7	——	——
181	62B-74	土師器・甕	——	——	——	——
182	62B-71	〃	——	19.4	17.1	——
183	62B-70	〃	——	16.6	24.4	——
184	62B-72	〃	——	18.4	18.4	——
185	62B-69	〃	24.8	18.0	28.8	——
186	62B-76	須恵器・杯	——	15.0	——	——
187	62B-77	土師器・甕	——	19.0	——	——
188	62B-78	〃	27.9	17.0	18.1	——
189	62B-79	〃	——	19.0	——	——
190	62B-80	〃	——	33.0	——	——
191	62X-2	須恵器・蓋	——	——	——	——
192	62X-1	〃	2.5	26.9	——	——
193	62X-5	須恵器・杯	3.7	12.7	——	5.3
194	62X-4	〃	3.4	13.2	——	8.2
195	62X-6	〃	3.0	17.6	——	7.6
196	62X-7	須恵器・蓋	——	18.0	——	——
197	62X-8	須恵器・杯	3.9	13.4	——	7.2
198	$63A_1$-12	須恵器・蓋	——	17.0	——	——
199	$63A_1$-13	須恵器・杯	3.9	14.4	——	10.1
200	$63A_1$-14	〃	——	14.0	——	——
201	$63A_1$-15	須恵器・壺	——	——	——	13.6
202	62C-64	須恵器・杯	3.7	15.4	——	10.1
203	62C-65	土師器・甕	——	33.1	——	——
204	62C-59	須恵器・杯	4.1	14.5	——	4.6
205	62C-58	〃	4.5	14.3	——	7.2
206	62C-60	土師器・甕	——	32.1	——	——
207	62B-90	須恵器・蓋	——	16.2	——	——
208	62B-89	須恵器・杯	——	15.5	——	——
209	62C-72	土師器・甕	——	28.9	——	——
210	62B-98	須恵器・杯	——	——	——	4.2
211	62B-99	須恵器・甕	——	20.4	——	——
212	62B-100	須恵器・蓋	2.4	15.1	——	——
213	62B-101	須恵器・皿	2.0	16.0	——	11.6
214	62B-102	土師器・甕	——	19.0	——	——
215	62C-76	須恵器・杯	4.0	12.0	——	7.0
216	62C-75	須恵器・盤	2.1	14.4	——	7.6
217	62B-112	須恵器・蓋	——	20.6	——	——
218	62B-114	須恵器・皿	1.5	16.1	——	8.0
219	62B-158	須恵器・蓋	1.7	13.2	——	——
220	62B-159	〃	3.1	14.9	——	——
221	62C-84	〃	2.9	15.3	——	——
222	62C-92	〃	3.8	15.5	——	——
223	62X-34	〃	2.8	13.0	——	5.0
224	62X-36	須恵器・杯	3.0	11.9	——	6.6
225	62X-35	〃	3.1	12.6	——	9.8
226	62C-85	〃	3.1	12.6	——	5.6
227	62C-79	〃	4.3	14.6	——	7.2
228	62C-89	〃	4.1	13.2	——	9.5
229	62C-83	須恵器・盤	2.2	15.8	——	7.2
230	$63A_1$-1	須恵器・蓋	2.8	14.3	——	6.7
231	$63A_1$-2	須恵器・杯	3.5	13.0	——	6.3
232	$63A_1$-3	〃	——	——	——	7.3
233	$63A_1$-4	〃	——	13.0	——	——
234	$63A_1$-5	灰釉陶器椀	4.4	17.6	——	8.8
235	$63A_1$-6	灰釉陶器椀	——	16.9	——	——
236	$63A_1$-7	土師器・甕	——	28.9	——	——
237	$63A_1$-8	〃	——	27.9	——	——
238	$63A_1$-9	〃	——	24.7	25.9	——

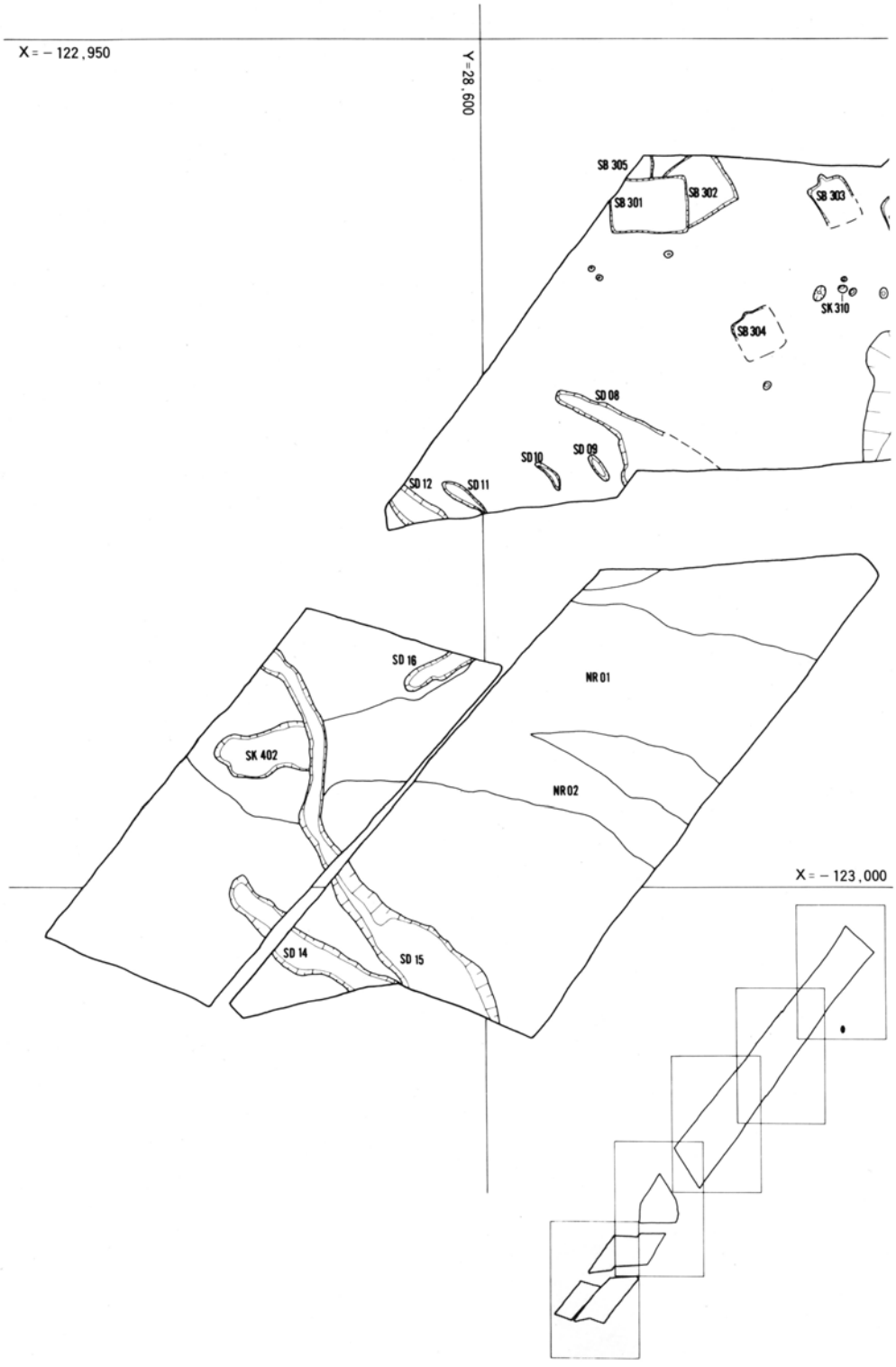
遺物番号	登録番号	種　別	器高	口径	体径	底径
239	63A_1-10	製塩土器	——	——	——	——
240	62B-13	灰釉陶器 段皿	2.2	14.1	——	6.0
241	62B-110	灰釉陶器 皿	——	——	——	5.9
242	62C-68	灰釉陶器 椀	——	——	——	8.2
243	62C-73	〃	6.5	14.9	——	7.3
244	62C-74	〃	——	——	——	7.3
245	62C-113	〃	4.9	16.1	——	7.4
246	62C-91	灰釉陶器 蓋	——	15.0	——	——
247	62B-156	灰釉陶器 三足盤	——	19.5	——	7.6
248	62B-161	灰釉陶器 耳皿	——	——	——	5.8
249	62B-162	〃	——	——	——	5.2
250	62C-77	灰釉陶器 四耳壺	——	13.2	——	——
251	62C-90	灰釉陶器 椀	——	25.6	——	——
252	63A_2-1	山茶椀	——	——	——	5.8
253	63A_2-2	〃	——	——	——	6.6
254	63A_2-3	〃	——	——	——	8.1
255	62A_4-1	〃	——	——	——	6.6
256	63A_2-5	〃	——	——	——	5.4
257	63A_2-4	〃	——	——	——	9.0
258	62X-30	土師器・皿	2.0	10.7	——	——
259	62X-33	〃	2.0	10.8	——	——
260	62X-28	〃	1.8	14.8	——	——
261	62X-32	天目茶椀	——	11.2	——	——
262	62X-29	内耳鍋	——	24.8	——	——
263	62X-31	〃	——	31.0	——	——
264	62B-85	土師器・皿	2.8	12.0	——	——
265	62B-86	〃	2.4	10.3	——	——
266	62B-88	尾呂茶椀	6.7	12.3	——	5.3
267	62B-87	髪盥	4.3	12.4	——	11.7

杉山端城跡

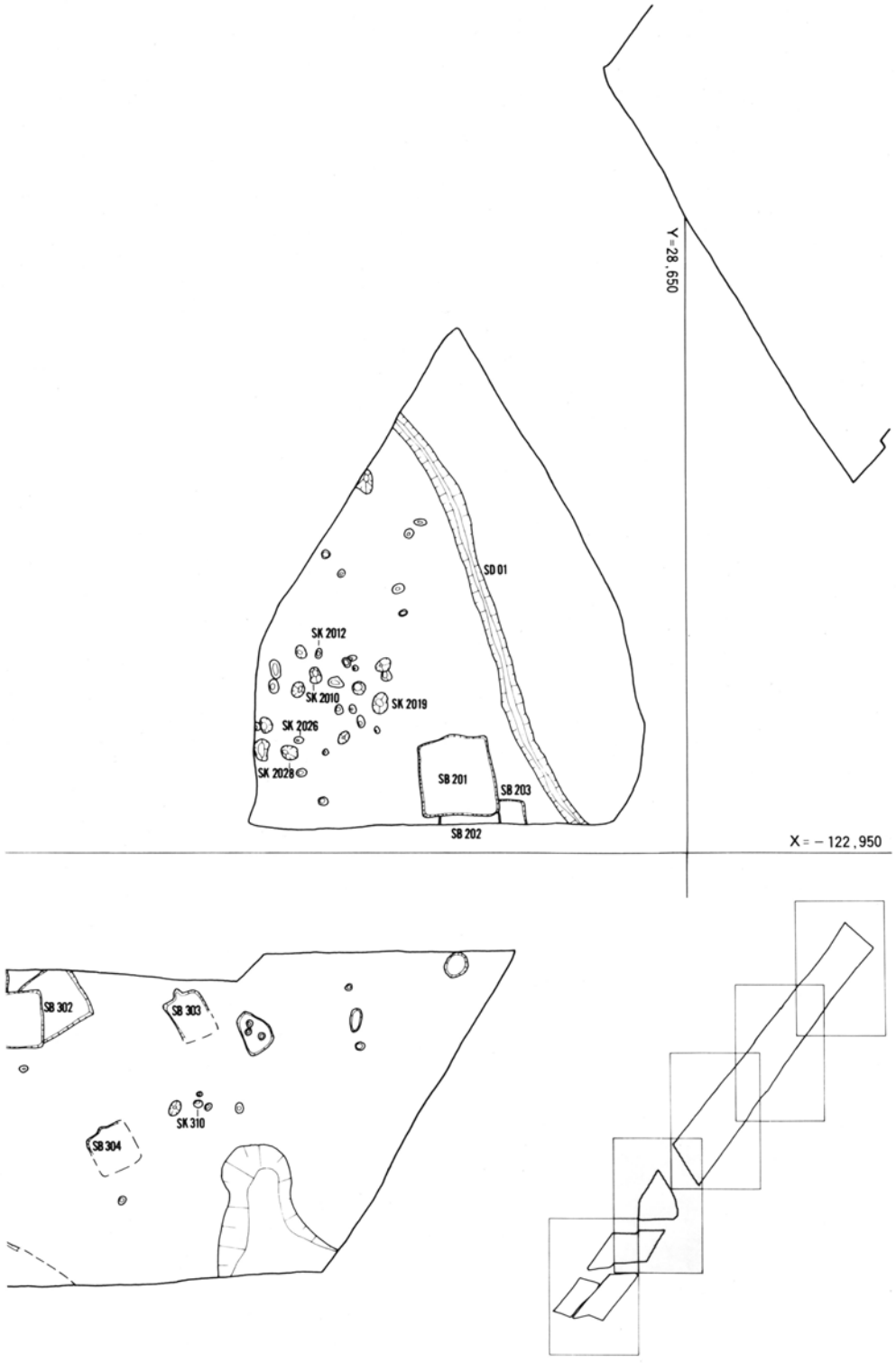
遺物番号	登録番号	種　別	器高	口径	体径	底径
1	63-1	土師器・皿	1.5	7.9	——	4.6
2	63-2	山茶椀	——	——	——	7.5
3	63-3	〃	——	——	——	8.3
4	63-4	〃	——	——	——	6.5
5	63-5	〃	——	——	——	6.6
6	63-6	〃	——	——	——	11.0
7	63-7	土師器・皿	2.5	13.7	——	11.3
8	63-8	灰釉系陶器 擂鉢	——	——	——	14.0
9	63-9	古瀬戸 灰釉椀	——	——	——	——
10	63-10	常滑窯・甕	——	——	——	11.6
11	63-11	土師器・鍋	——	——	28.0	——

図　　版

図版 1　諏訪遺跡遺構図 (1)

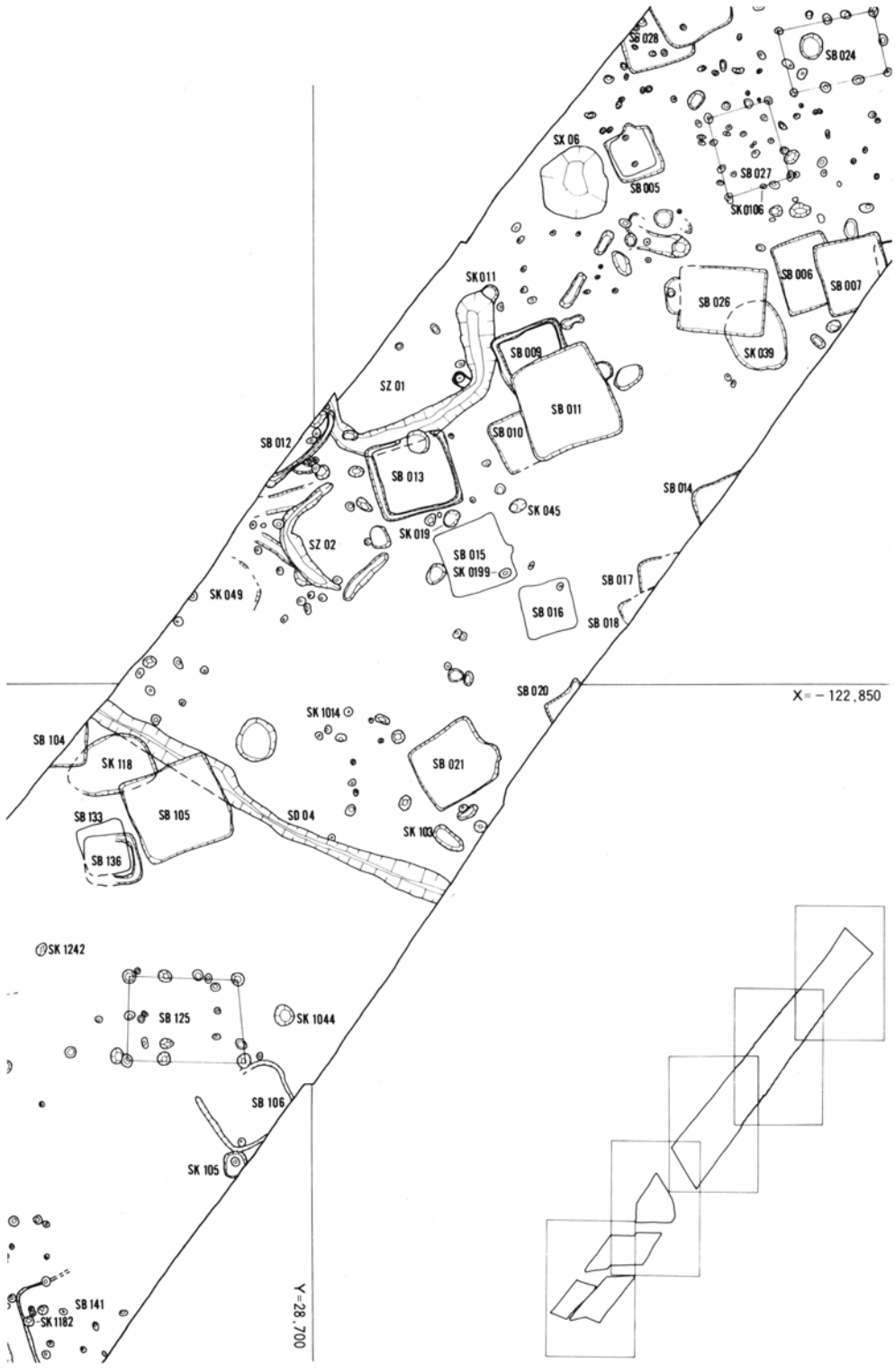


図版 2　諏訪遺跡遺構図 (2)

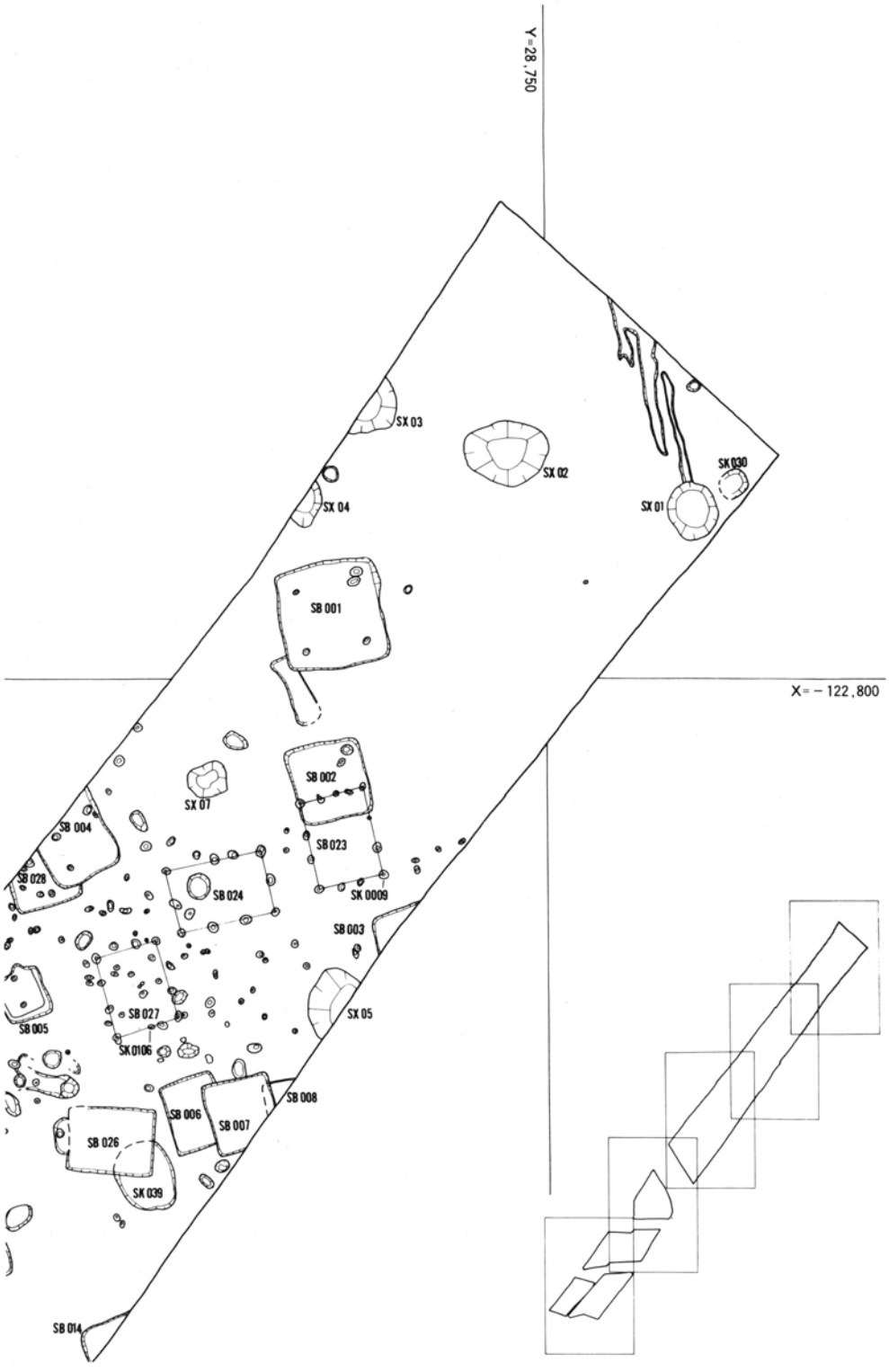


図版３　諏訪遺跡遺構図　(3)

図版 4　諏訪遺跡遺構図 (4)



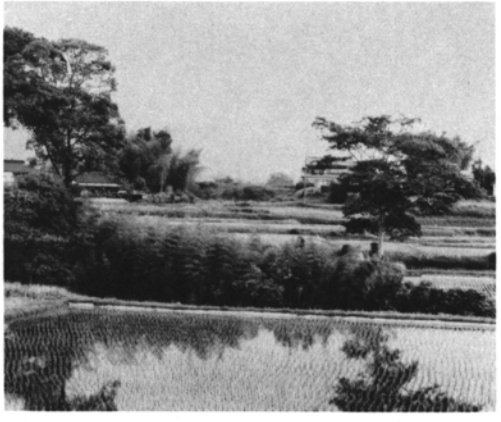
図版 5　諏訪遺跡遺構図 (5)



図版 6　諏訪遺跡近遠景

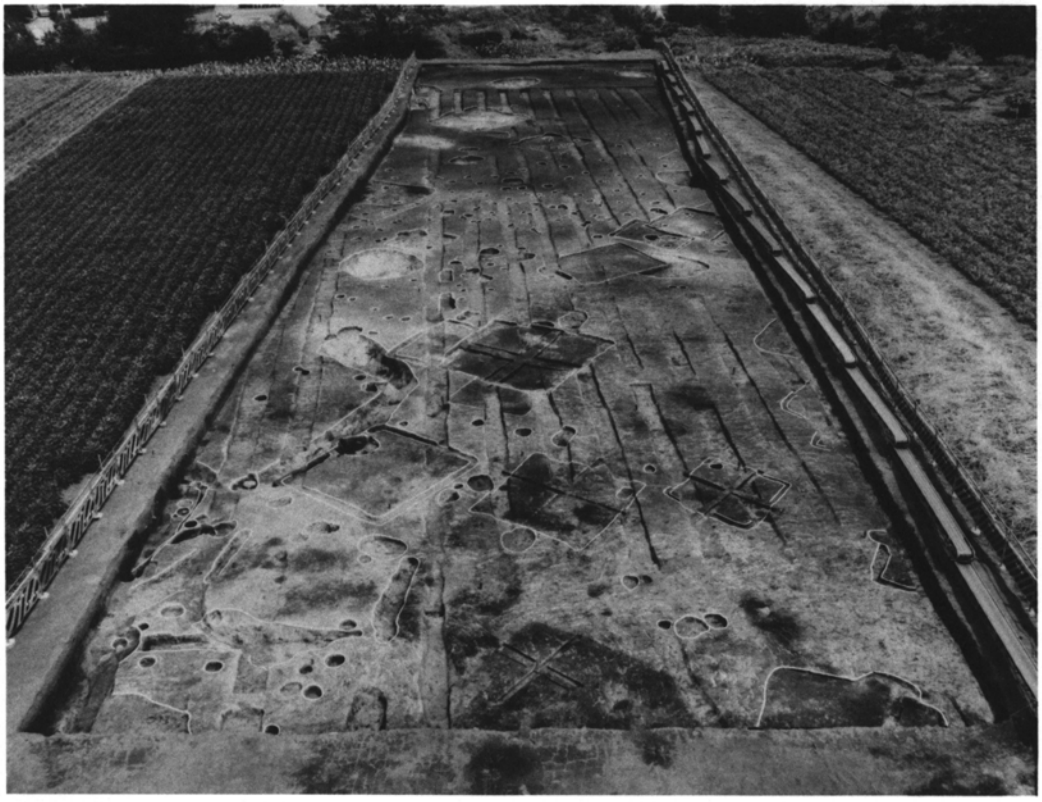
諏訪遺跡遠景(南より)

近景(北東より)

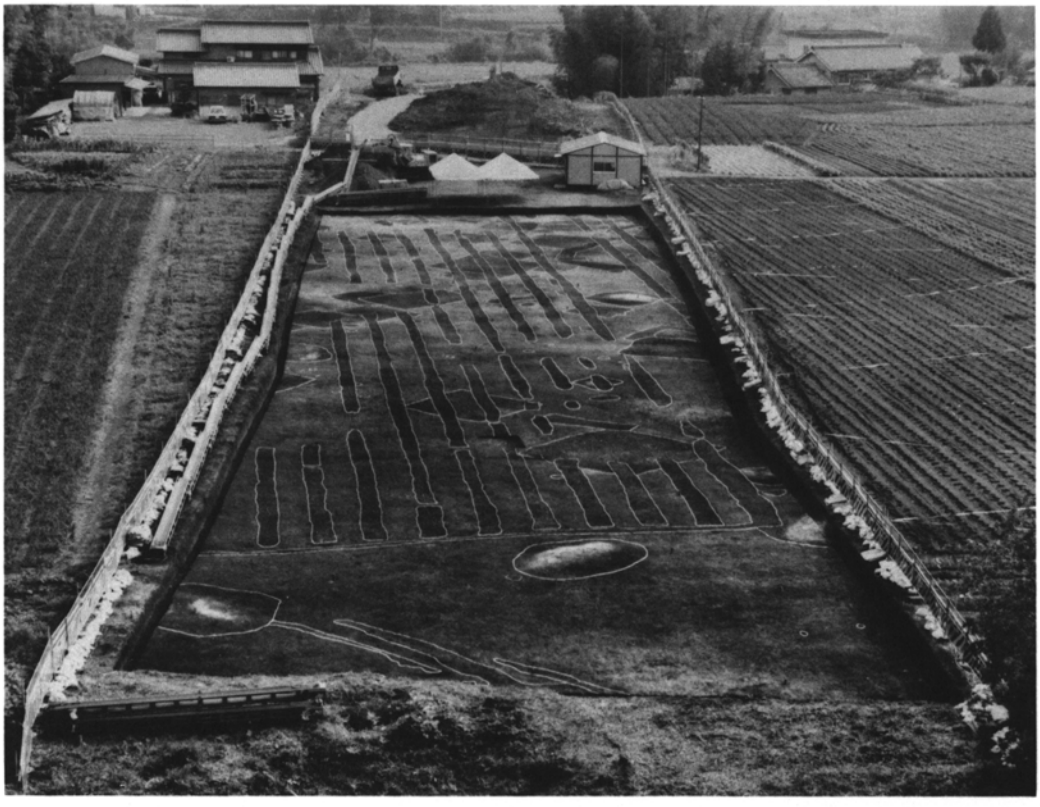


近景(南西より)

図版7　調査区全景（1）



C　区



C区検出状況

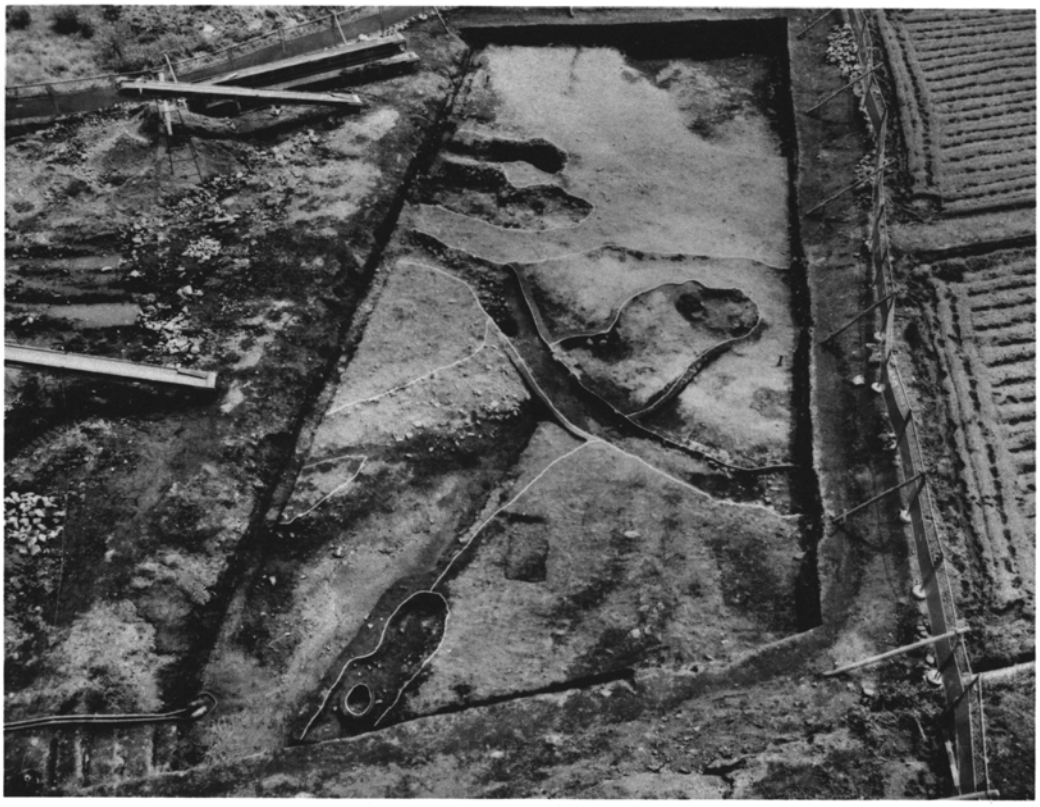
図版 8　調査区全景 (2)

B区全景

X区全景

図版 9　調査区全景（3）

A1区



A2区

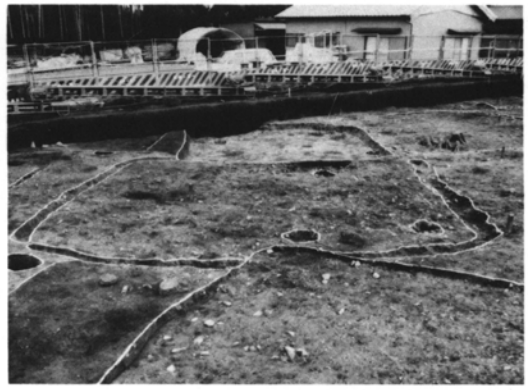
図版10 調査区全景 (4)

A3区

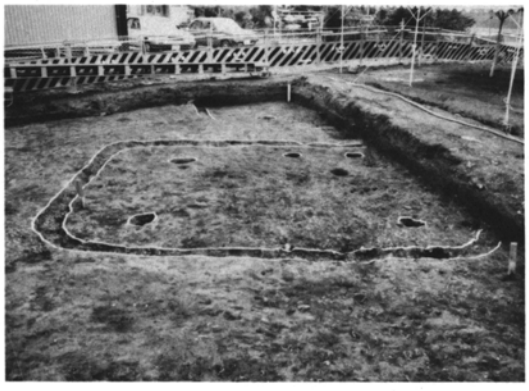
A4区

図版11　竪穴住居・遺物出土状態(II期)

SB014



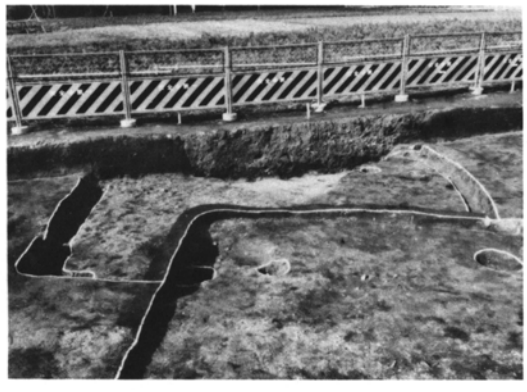
SB101



SB102

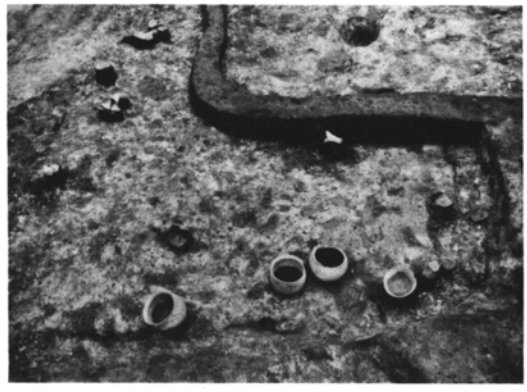
SB110

SB111



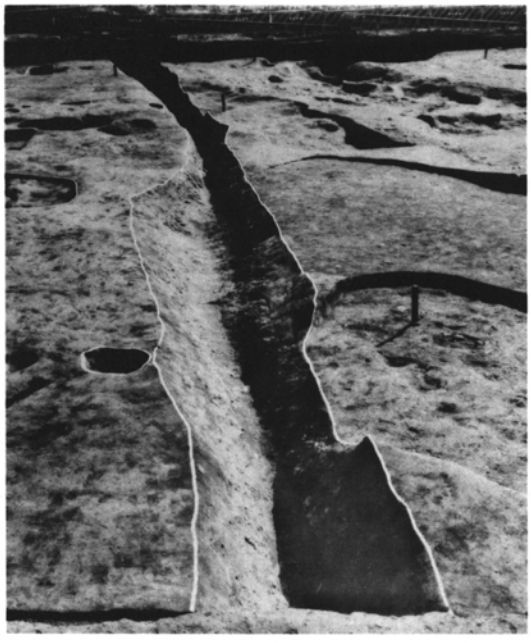
SB114

SB110土器出土状態

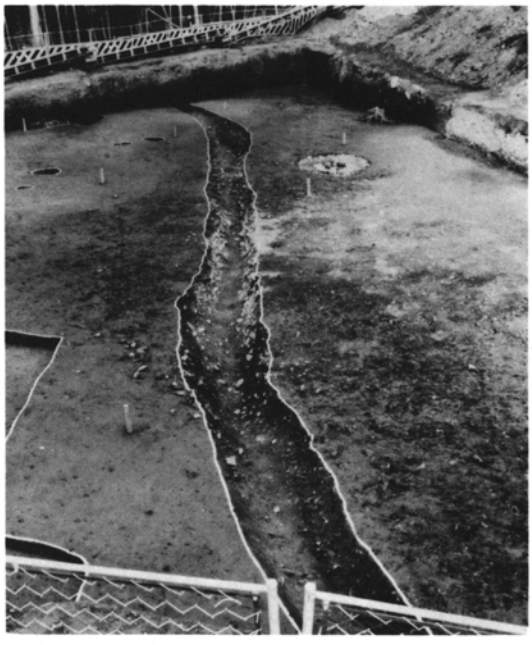


SB114土器出土状態

図版12　溝・方形周溝墓



SD04



SD01

SZ01

SZ02

図版13　竪穴住居(III期)

SB002

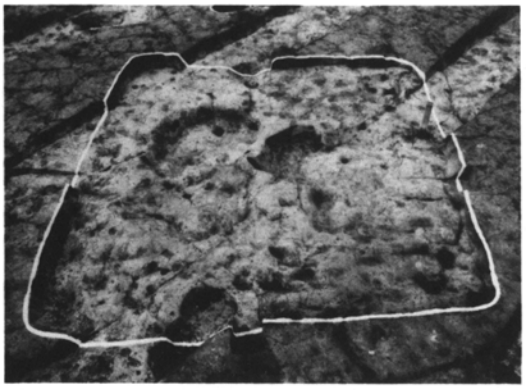
SB005

SB006・007

SB011

SB013

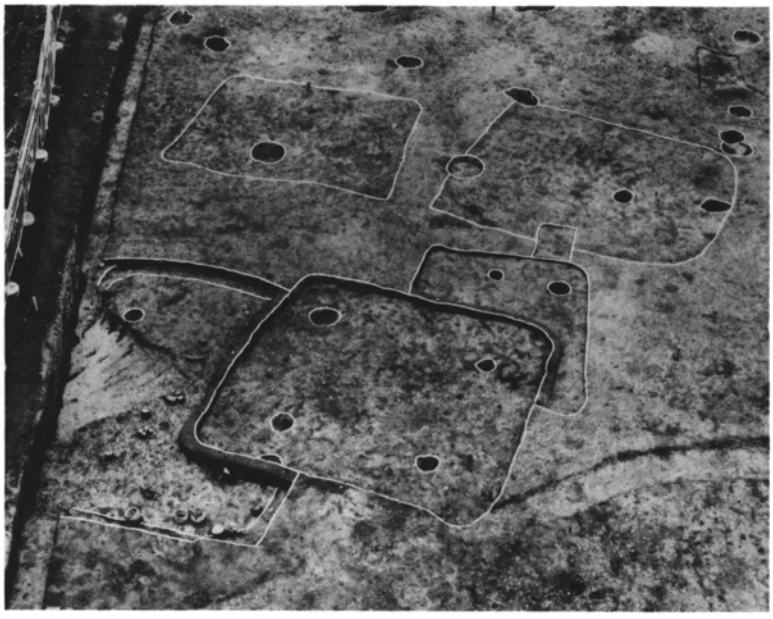
SB015



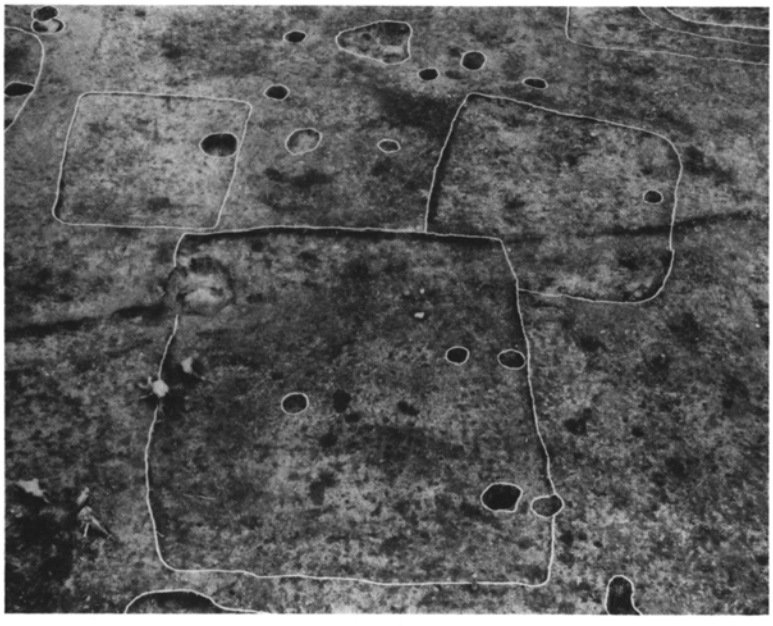
SB016

SB026

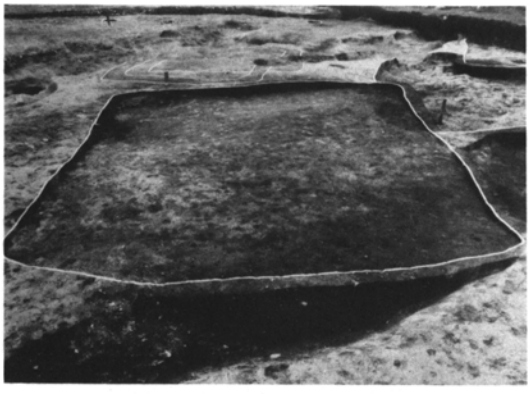
図版14　竪穴住居(III期)



SB112・113
115・116



SB117～119



SB105

SB109

図版15　竪穴住居・遺物出土状態(Ⅲ期)

SB201

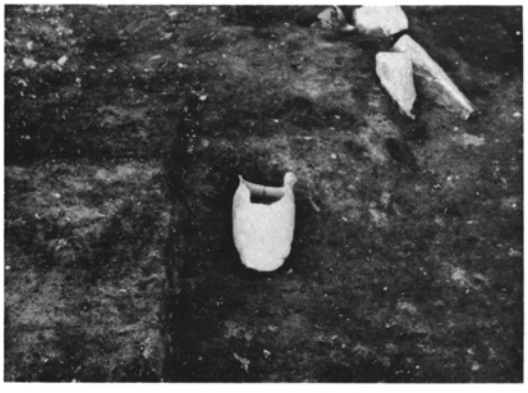
SB301

SB001土器出土状態

SB011土器出土状態

SB026土器出土状態

SB115土器出土状態



SB135土器出土状態

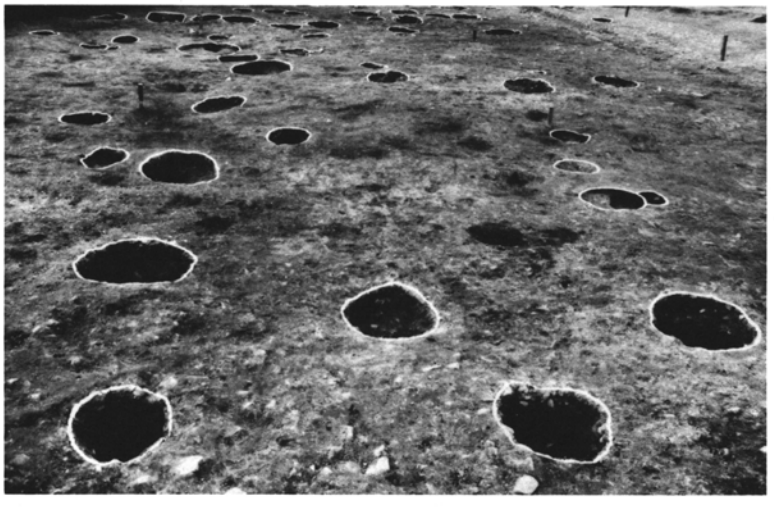
SB301土器出土状態

図版16　掘立柱建物

SB023

SB125

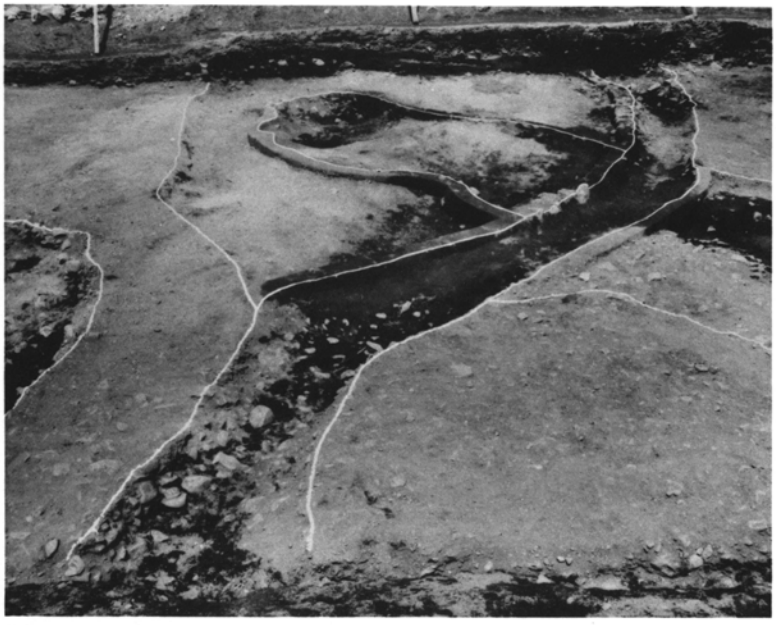
SB126・127



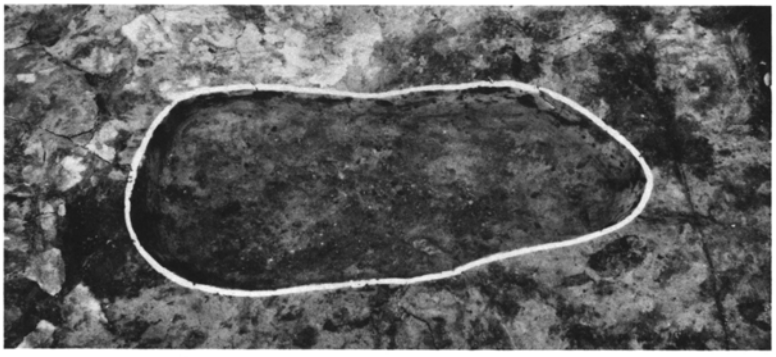
SB131

図版17　Ⅳ・Ⅴ期の遺構

SK2001～2032

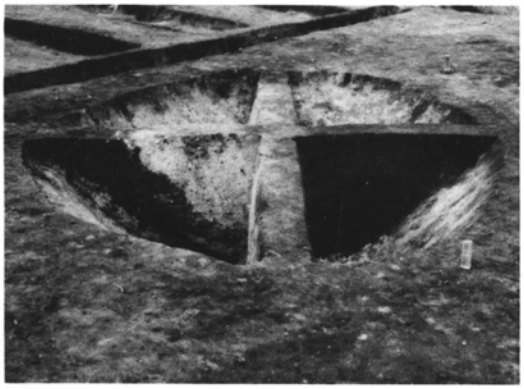


SK4002・SD13

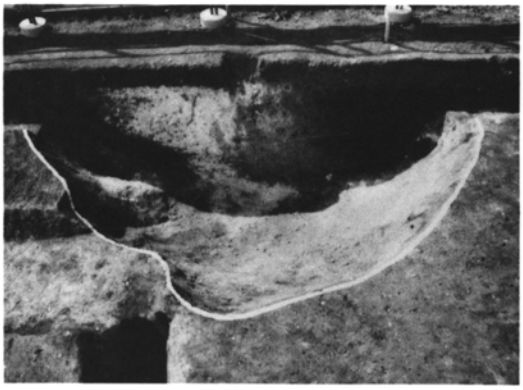


SK103

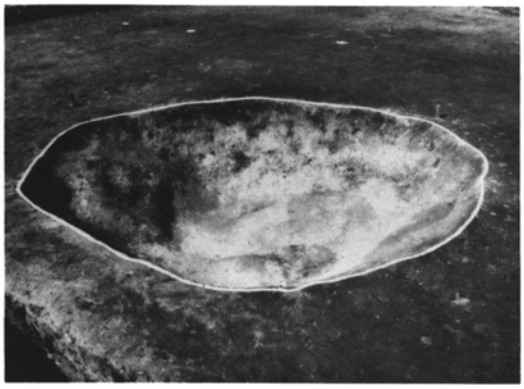
図版18　自然河道他



SX02

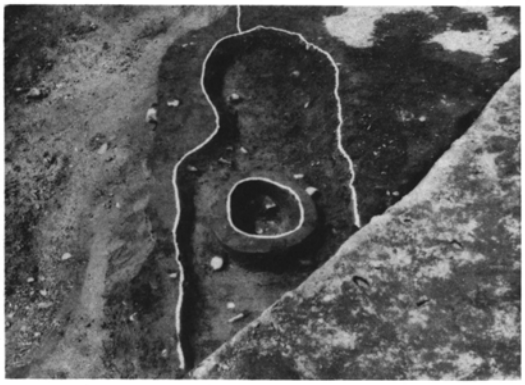


SX03



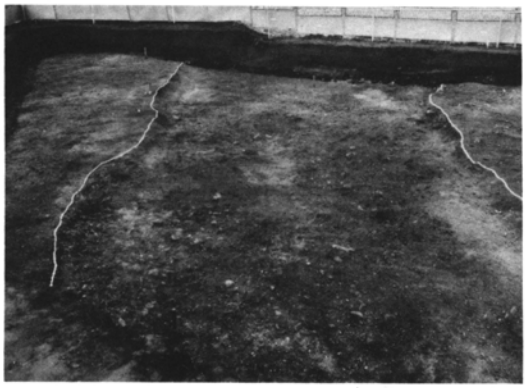
SX02

SX06

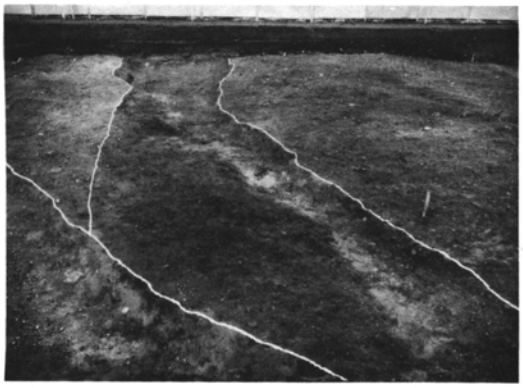


SD16

SD14



NR01



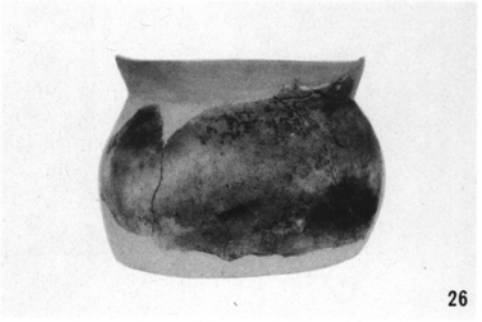
NR02

図版19　遺物（1）

13

25

14


26

20

27

21

29

23

33

図版20　遺物(2)

38

70

40

71

58

72

60

73

69

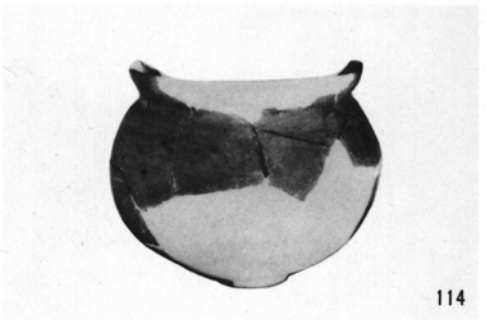
77

図版21　遺物 (3)

86

113

100


114

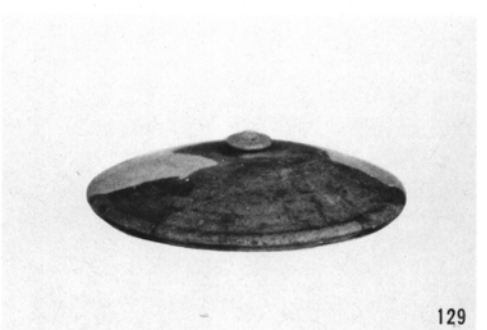
101

125

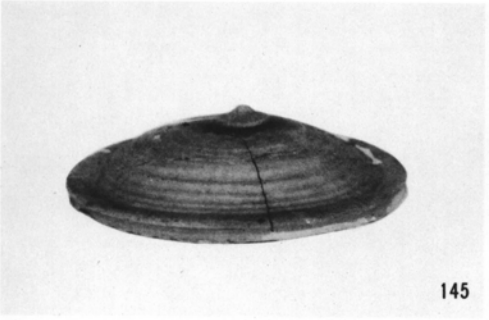
105

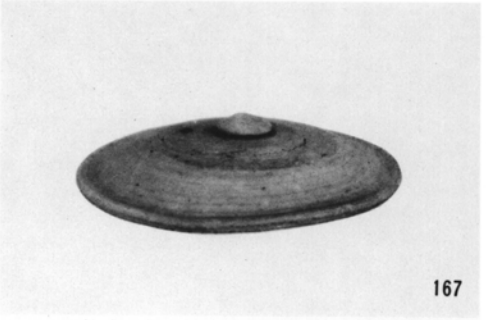
126

112


129

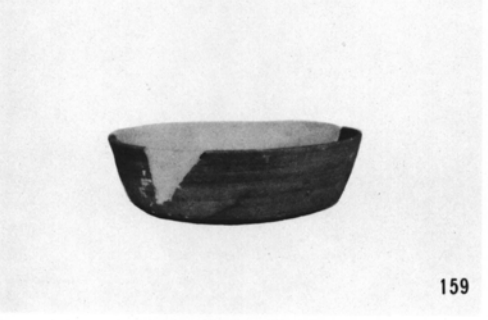
図版22　遺物（4）

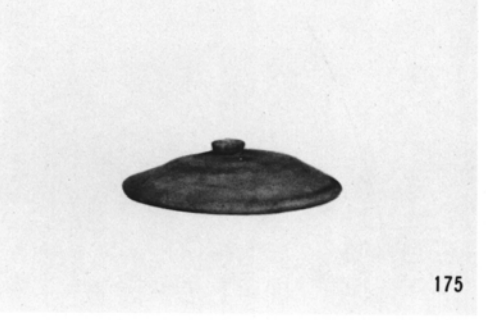

145


167

151

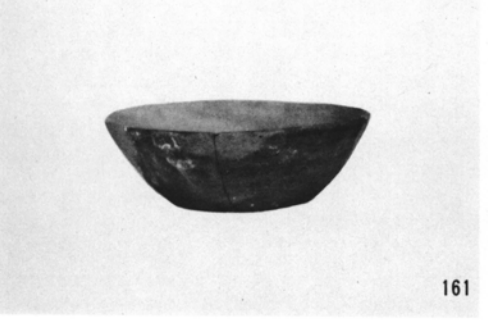
169

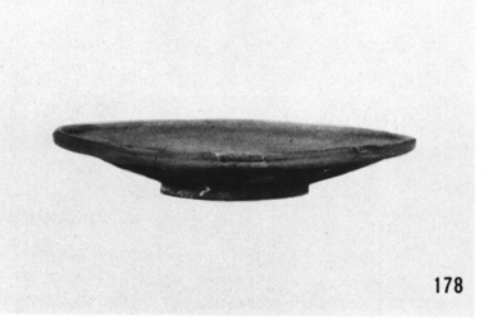

159


175

160

177


161

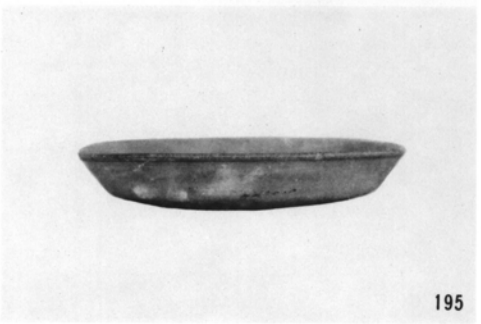

178

図版23　遺物（5）

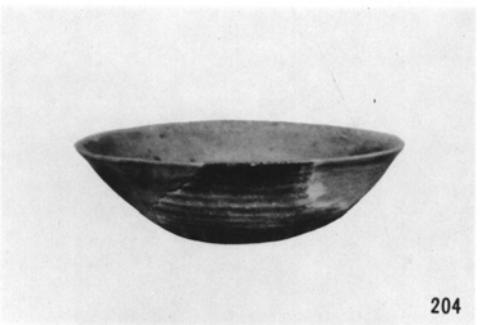
182

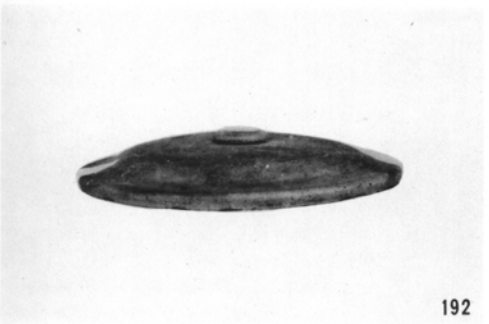
194

185

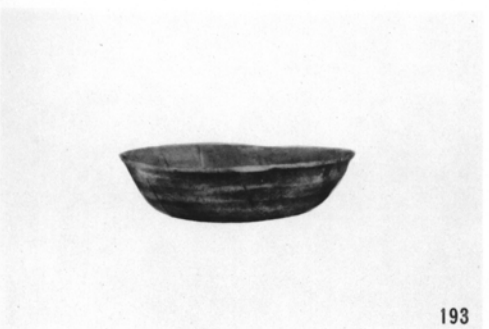

195

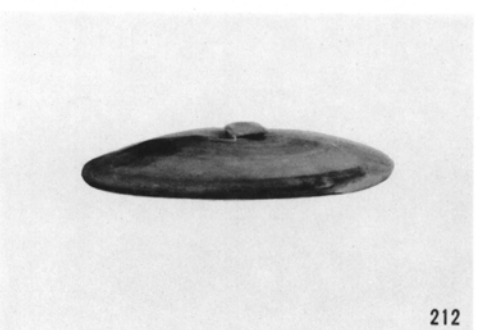
188


204

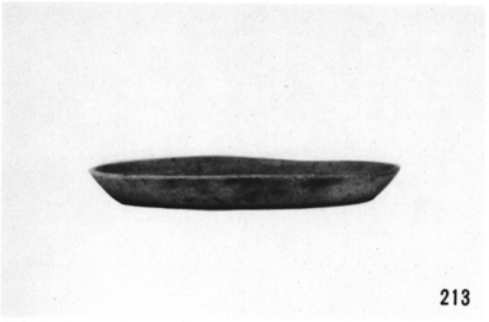

192

205


193


212

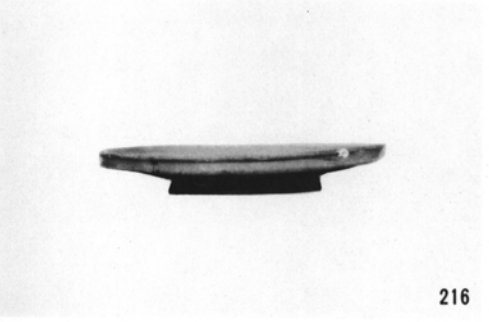
図版24　遺物（6）


213

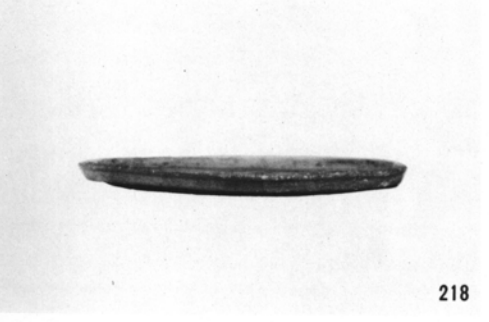
238

215

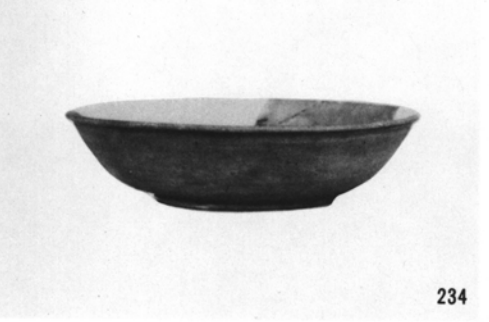
240


216

243


218

245


234

266

図版25　杉山端城跡全景

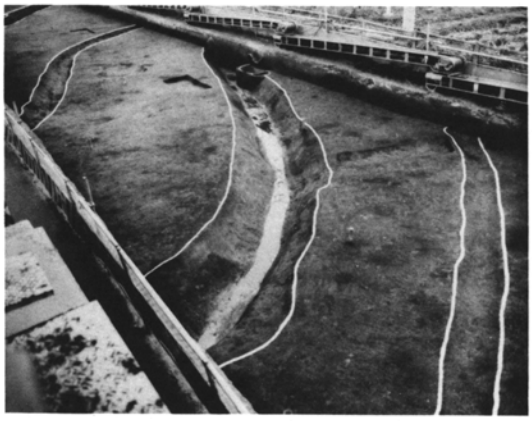
調査区全景(北より)矢印は杉山端城

調査区全景(南より)

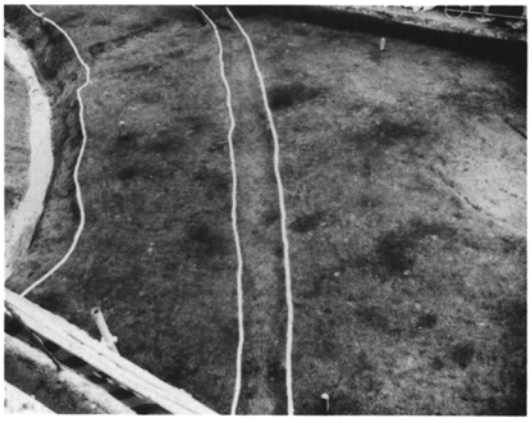
図版26　遺構遺物出土状態

SD01

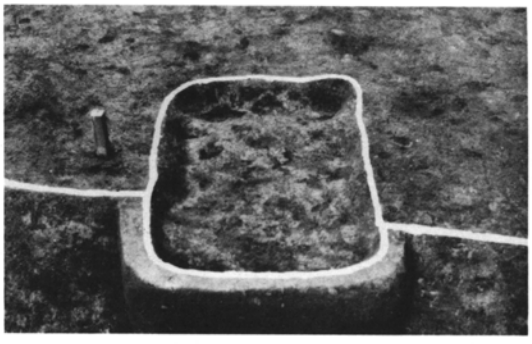
SD02



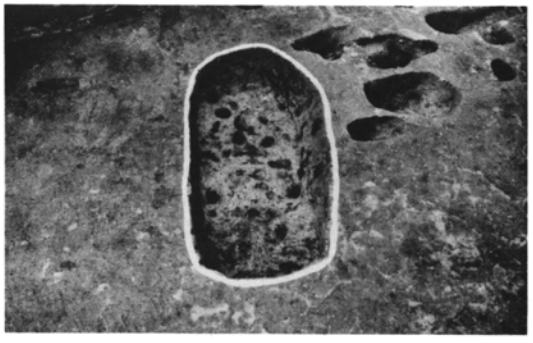
SD03



SD04



SK01



SK02

SD01遺物出土状態

SD01セクション